

---

# ~ 匂庭物語 ~

tiki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

（匣庭物語）

### 【Zコード】

Z9089Z

### 【作者名】

t i k i

### 【あらすじ】

何もかも削ぎ落して、振り払つて駆け抜けてきた彼に救いはあるのか。たつた一人の壊すために縛り付けられた男が、これまで必要だと捨ててきた大事な何かを取り戻していく物語。

12 / 5 題名を変更。

## 第一幕 序章（前書き）

プロローグです。独自設定を含みますので、「容赦ください」

## 第一幕 序章

「お……また来たなあ

その声を聞いて俺は、再び此処へ辿りついたことを悟った。

終わりのない終焉、報われない生。

だが、その繰り返しも終わりを告げる時が来たのだ。

「……」

「だんまりかよ。チツ、つまんねえヤロウだぜ」

心底面白く無さげに悪態をつく男。だが、コイツはどうでも快樂主義で、何処か破綻している男だ。

まともに取り合っていられるわけが無い。

「…………もつ、代価は払い終えただるつへ早くしろ…………」

「ああん？・・・代価、ねえ。それは違うなあ。お前の運命を有効利用した取引きてえやつだろおが。それにその代価こそがお前の持つ因果ゆえの、役割つてやつなんだがね」

クツクツ、とくぐもつた耳触りな笑い声を挙げながら、田の前の男は俺を見下ろす。だがその姿は霞がかっていてはつきりとはしない。すぐ目の前から声が発せられているにも関わらず、だ。その理由は何か？

それはこの男が人間ではないからだ。

「お前が転生する世界は安定を迎える。・・・お前という“悪”または“絶対の敵”を倒すためになあ。皮肉なもんだ。お前という圧倒的・絶対的な敵対者という役割を持った奴がいなければ手を取り合つことはなく、緩やかに自分たちは滅亡を迎えていたというのによお」

そういって男はニヤニヤと笑いながら、指をパチンと鳴らす。すると、これまで俺とヤツしか存在しなかった空間に、俺がかつて転生した世界の光景が次々と映し出される。

B E T A という異形の化物に蹂躪されていく人類。

聖杯なるものを探しての魔術師達の殺し合い。

圧倒的な強者として君臨する強国の長とそれに対抗しようと反逆す

るものたち

……様々な光景が行き通り。俺はそのよつた世界で“悪”とよばれる者を纏める、または  
その一派の中の倒さなければならぬ敵としての役割を「ミ」されて  
きた。

その役割を果たしている間は全く前世やいのちや記憶や契約の事  
など覚えていない。だが、役割の最期を迎えるたびに記憶が蘇り、  
此處に還つてくる。

「……だが、その“安定をもたらす為に存在する敵対者”としての因  
果も今回の転生で取り除かれる。そういう契約だつたはずだ」

そういうて凄みを放つ。ヤツには何の意味も無いことはわかっているが、これまでこの魂に刻みつけた歳月と経験は俺の靈格を昇華させている。この場のくだらない茶番を終わらさせることは出来る。

相手が尋常な存在なら、その魂まで震え上がるような威圧を眉ひとつ動かさず「分かった、分かった」と軽く受け流して姿勢を僅かに正す。ようやく本題に入るようだ。

「ああ、その通り。俺は契約を違えるようなことはしない。これで俺の受け持つ世界は安定を迎えた。よつて、お前にまるで呪いのごとく付き纏う、その因果を取り除いてやる。そして新たな人生を……だったなあ？」

「ああ」

そして男の手から光が溢れ、俺の意識が薄くなる。

「お前がこれまでの戦いで身に付けた経験や知識・あとは技か？それは報酬としてそのままにしてやらあ。お前がこれから向かう世界の抑止力を受けないよう調整して、だがな？俺の管理からは外れている世界だ。だから、お前の好きなように生きろや」

そして俺の意識が完全に無くなつていいく。

「…ああ～。あと、お前の靈格が高くなつたせいで只の人間としての転生は無理みてえだ。・・・また何かしらの役割を背負わされるかもなあ。はつはつはつーやつぱおもしれえわ、お前。」

その言葉が『届く』となく彼は転送された。

## 第一幕 序章（後書き）

そして彼は飛ばされる。主人公の名前はまだ明かしません。

## 第一話（前書き）

独自設定を含みます。その点を踏まえて、ご覧ください。

## 第一話

俺は、新たな生を受けた。

とこつても、マトモな生まれ方ではなかつた。

・・・此処は、どこだ

俺が転生して初めて見た光景は、真っ赤に染まつた紅い月だつた。深淵な魔力を感じさせるソレは、まるでこの身を流れる

のような鮮やかな色をしていて・・・

ハツと意識を急上昇させる。注意深く周囲を見渡す。

先ほど見た光景は「」にもない。消えてしまったかのよつて、まるで夢でも見ていたかのよつて。

しかし替わつて周囲に存在するものは木、木、木……。「」は「」かの森のよつだ。

その雰囲気は中世ヨーロッパを連想させる、人が踏み入れるには不気味すぎるものである。人を寄せ付けない深淵な何かを感じさせる。

・・・とつあえず何が起きているか把握しなくては。

ゆうべつと身を起こし、足音を完全に殺して歩き出した。

暫く周りを探索していると、小さな泉を見つけた。周囲を警戒しながら近寄り、泉の水をガブガブと飲んで喉の乾きを癒す。

顔を泉から離し、水面を見ると自分の顔が見えた。

肉体年齢は大体20歳辺り。容姿は黒髪で、瞳の色は吸い込まれそうなほど黒い。

一般的に見て端正な顔、だといえるがその年齢には不釣り合いといえる程どこか老成した雰囲気を醸し出している。

身長はおおよそ180cm代後半位だろう。身体付きはガツチリしているところによれば、細身だが研ぎ澄まされた刃物のように引き締まっている。

動きを阻害するギリギリまで鍛え上げられ、しかし柔軟性も兼ね備えた理想的な肉体である。少なくとも“戦闘”という面ではこれまでの記憶を省みても最高のスペックを誇るだろう。

だが、新しい生というにはこの状況はおかしいだろとか、此処はどこだとか、色々言いたいことはあるが、まず差し迫つて解決しなければならない問題がある。

「・・・服を探さんとな」

とりあえず全裸なのはいただけない。これまで壮絶な生涯を生きてきて、大抵のことには耐性があるとは自負してはいるが流石に変態にはなりたくない。

そして小さく溜息をつき、空を見上げる。喉の渴きを癒してかなり落ち着こうとした。

先ほど見た、いや幻視していた紅い満月のことをボーッと思いつ出す。がら、今自分が置かれている訳の分からぬ今の状況に愚痴をこぼす。

自分を此処に送つてくれた外道鬼畜自由の中最低野郎に

向けて

「アホが・・・あの馬鹿が何かミスでもしやがったのか・・・？」

憎々しげに、自分を此処へ送つた男を罵倒する。少しばかりのアフターケアは有つてもいいのではないか？そんなことを思つていると

「ガアツ？！？！」

突如として激しい頭痛が彼を襲う。そして膨大な情報が彼の頭の中に無理矢理入り込んでくる。

星とのリンク・」の星のこれまで歩んできた歴史・生命の誕生・主だった生き物達の盛滅し次々と代替わりしていく光景・繰り返される輪廻…

ありとあらゆる情報が彼の頭の中に流れ込んでいく。普通の精神の持ち主であれば狂い死ぬ程の激痛と凄まじい量の情報を彼は受け止める。

・・・・・

ハアハアと息を荒立てながら、そして全てを受け切った彼は自分の置かれた現状を理解する。

「畜生・・・今度は世界に捕らわれるのかよ・・・

そして仰向けに横になり、酷使した脳と身体を休める。だが、これから始まる出来事を思うと気が重くなる。  
この世界は実験を終えた。もう様々な生物が生まれ得るに足る環境を整え終わつたのだ。

・・・そして世界はある存在<sup>モード</sup>を欲する。

「世界、いや世界の抑止力としての存在足る生物。“真祖”・・・」

そしてこれから始まる事となり、強制的に参加を余儀なくされる戦い。

「そして生みだされた真祖十五体の中から抑止力となつる存在を選別するための、この星を舞台とした生存競争<sup>バトルロワイアル</sup>・・・」

そして俺は“星の記憶”を受け取った疲労に身を任せ、死んだよう  
に眠りについた。

消え失せていく意識の中で思つたことは唯一つ。

また理不尽な役目を背負わされるのかよ……

そして俺の意識は暗転した。

## 第一話（後書き）

最初だし、ただこの話では主人公と真祖の設定が中心ですので。 サ  
クツといきました。

## 第一話（前書き）

この作品は独自設定を含みます。ご容赦ください。

## 第一話

### 第一話

目を覚ました後、俺がまず最初に行つたことは拠点となる住居の作成と状況の整理。

この世界はどうやら生き物の創造という実験を終え、そして今後生まれ得る生物達が何か予期せぬ事態により“この世界に”破滅を引き起こすことになったときに、その破滅を防ぐ抑止力となる真祖を選別するために様々な靈格の高い魂を呼び込んだらしい。

そして俺はその中の一体として生み出された。とんでもなくヘビーで地獄を見ることが必須の生存競争バトルロワイヤルへと駆り出されてしまった、ということじらじら。

そして、この身体は元々は人間であつた俺の魂が理想とする最高の戦闘能力を発揮するために作られた存在であるため、今この時いるヒトと呼べるような生き物は俺のみ。どの真祖も基本的に強靭な肉体と、そして魔力・気というものを持つてゐるらしい。

だが俺は、他の真祖と比べて肉体が小さいために肉体の強度自体は、  
はるかに劣るに違いない。かつてない程強力な肉体を手に入れた筈  
だが単純勝負で一番不利なのは俺だろう。

他の奴らがどんなやつらか全く分からぬことが苛立ちに拍車をかけ  
るが、これまでの経験が俺にはあるし、見えない敵に振り回され  
るもの馬鹿らしい。そして何よりも気に食わない。

俺の新しい生を邪魔する奴らには、悪いが消えてもらおう。

そして真祖としての自分を創る作業と殺し合いが始まつた。

これは最初の勝利を得た後に気付いたことであるが、真祖は肉体を  
自分の思うように進化させることが可能なようだ。つまり他の真祖  
と戦うにためにより強くなれるよう自分の願望通りに進化させるこ

とが可能である。

だが、どうこう時に肉体を改造・・・いや進化を遂げるのかというと、同じ存在である真祖と戦い勝利した時。・・・勝利し、下した相手を食らつたあとであった。

これはそれなりに常識から外れていた俺でさえ抵抗を覚える（倒された相手が異形であるため）が、生き残るために四の五の言つてられない。なにより同じ行為を他の参加者たちもしていくのだ。つまり、やらなきゃやられるってことだ。生き残るために一度の進化で効率的に進化させていくことが求められる。

これは、俺にとっては大きなアドバンテージである。俺に比べれば他の奴らは知性が低いようだ。俺の様に効率的に進化させるといふのは難しい。強力過ぎる能力ではそれを身に付けるだけで其の進化は終了し強大すぎる力に振り回され、弱すぎては強靭な肉体を持つ真祖には通用しない。

生き残るために必要なのは応用の効く汎用性の高いモノ。本当の切り札というものは一つあればいい。単体ではなく他と組み合わせることのできる汎用性があればいくらでも発展させられるし、いくらでも誤魔化しが効く。それだけで俺は十分に勝利を拾える。使いこ

なせない程に強い力など死に繋がる隙を生むだけだし、いきなり手に入れて使いこなせるワケがないのだから。

そして切り札を切る時は相手を確実にソレで仕留める時。 そのためには布石というものが必要不可欠である。

俺はこれまでの転生の記憶から、より戦闘に適したモノを身につけていった・・・。

## 最初

他の真祖の戦いを潜伏しながら観察。そして片方が勝利した時に生じた隙を逃さずに勝利。これによつて他の真祖の基本的な力を把握。

一休分を食し進化を遂げることに成功した。

この時に

肉体再生力の強化（完全に消滅しなければ魔力を相応に消費し再生する）

“前”の世界を参考に、相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する魔眼（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。かなりの量の魔力を消費するためにあまりに長時間の使用は好ましくない）

自身の影の複製を作り出せる能力（ただし影のみであるため、実態を持たないので斥候としてしか使えない。気と魔力を少量消費するが固有スキルとしての進化のため燃費がいい）

獲得。

戦略プランに必要な能力を得る事に成功する。見た目からは判断されない能力として“吸血鬼”を採用。肉体強度と再生力は両立が出来ないことが判明する。現状でも十分な身体能力のため再生力を優先した。

実際に戦闘を行つことより、これまでの戦闘経験がビームまで通じるか把握することを主目的とする。

今までの魔法は体系が違うためか一切使用不可能。逆に“氣”に関しても単純なものならある程度は同じように使用可能。これまでに身に付けた基本的な身体技能はどれも使用出来る。

この状況下で行つ。

一時は肉体のスペックの違いで苦戦を強いられるも勝利。幾つかの能力の模倣に成功。もつ引き出せるものもない為いくつかの肉体のサンプル標本を残し捕食。

相手を捕食することによつ

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の一）

影の複製数の上限を上げる。これまでの五体から、五十体まで増やす。

## 三度目

残りの真祖は八体となる。

相手の広域殲滅魔力波により重傷を負う。再生する間も無い間隔で第一波を放出できることを確認。撤退を余儀無くされる。

影による監視により、あの魔力波による攻撃は口中でしか使用できないことが判明するも、対抗策を練る前に他の真祖を捕食し克服。

しかし魔力波を放つ前の動作のパターンを把握。有効範囲を把握。

一撃離脱法・遠距離攻撃によって魔力波の乱発と休息の妨害を行つ。

魔力の残量が少なくなつた頃合いを見計らい、吸血によつて魔力を全て吸引。撃破・捕食

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

魔眼に能力追加。眼を合わせるだけで相手に幻術を使用できる。

影の複製に実体を持たせるように改良。本体の十分の一程の実力

しか持たない。

「焼き鳥、うめえな・・・」

残り四体

（ここまで手に入れた能力）

・魔眼

相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する。眼を合わせるだけで相手を幻術に術中に落とすことができるよう後に進化した。（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。かなりの量の魔力を消費するため常時ではなく任意で発動している）

- ・吸血デヴァイト

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の一）

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

- ・隣に潜む暗殺者ハイドエッジ

自身の影の複製の作成及び実体化させる能力。最大五十体。本体を中心には半径15kmの中では存在できる（ただし供給を無視すれば範囲外であっても存在できるが実体化は出来ない）。固有スキルの進化であり、少量の気と魔力の消費で使用できるためかなり燃費が良く主人公は多用する。実体化も出来るようになったため、かなり運用の幅が広がった。

複製達とは感覚を共有できるようになつてゐるため並列思考を必要とする。実体化しても複製の出せる実力は最大でも本体の十分の一。さらに強さにはある程度の平均が存在しており、複製の数が増えれば増える程その平均の値は下がっていく。

そして複製達は魔眼は使用できない。

- ・再生能力

## 第一話（後書き）

とつあえずここまでではサックリと話を進めてきましたが、次話からは掘り下げていきます。多分初めての戦闘描写になるかと…がんばります。

## 第三話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。ご容赦ください。

## 第二話

### 第二話

バトルロワイヤル  
生存競争も残り四体。

取り合えず、この戦いを勝ち抜くために必要なモノは最低限揃つた。  
基本方針はこれまでと同じだ。

確実に敵を捕捉、無駄なく自分に必要な情報を引き出し、  
して必ず先手を打つ。

これまでに手に入れた能力はどれも応用の幅が効き、例え相手に能  
力を知られても苦にはならないものばかり。

さらばどれもこれから鍛錬次第でさらに昇華できるよう進化を遂

げた。

あとは鍛錬あるのみ。最近になって手に入れた技能とうまく擦り合わせる作業を一つ一つ潰していくばどれも化けていくに違いない。

・・・やはり当初の予想通り俺以外の真祖はどれも人外の存在だけの 幻想種ばかりであつた。まるで鬼のようなヤツもいれば鷹とライオンが混ざった化け物もいた。これまで俺が見たことがない程強力なドラゴンもいた。

正直いって真正面からバカ正直に戦つたらコツチが不利になる。何かしらの策やら下準備は必須なのだ。・・・そんなことが出来るのも必要なも俺ぐらいしかいないがな。

俺を除いた残り三体の現在位置も影で掴んでいる。

一体は黒竜。絶対に消えない黒い炎の息吹を吐き出してくる。だが、戦いの跡を調べると能力がソレだけではないことがわかる。頑強な鱗で覆われた身体は生半可な攻撃は通じない上に爪は相手の障壁を破壊する能力をもつていてる。

次に、まるでスライムのような軟体であるのだが身体を硬化させることが出来るもの。知性が低いから能力もシンプルであるが、どれもその分強力で隙がない。特に液体ゆえに急所がないというのも厄介な点だ。

最期のヤツは・・・ある森に潜んでいることは分かっている。この森からは真祖独特の禍々しい魔力が隠すことなく発せられている。そして、警戒すべきは、この戦いが始まつて一度もそこから動いていないのに最期まで勝ち残つているという事実だ。他の真祖もその森に入つて戻ってきたものはいない。だが、奇妙なことにいまだに俺の影が捕捉できていない。・・・コイツが一番やばい。唯一何の情報も掴めない。

そして情報を掴むためには他の真祖との殺し合いを観察することが

手っ取り早く、確実だ。特に最後のヤツの情報はどんな小さなものでもいいから欲しい。

然るにいち早く他の一体の内一体を食して、気配を消し、もう一体との戦いを観察する必要がある。

そして俺のいるこの場所から一番近いのは黒竜か。トカゲ  
次はおまえだ。

彼は強かつた。　びしまで、びしまで。

その息吹は全てを焼き払い、その強靭な鱗は全ての反逆を弾き、その四肢は全ての障壁を引き裂いた。

その瞳の前にひれ伏さないモノはなく、その翼が有れば何処へでも行けた。

そして今回の生存競争も例外ではない。彼は竜の中の竜。これといった苦戦も無く弱者を屠ってきた。 そう彼は強者だった。

だからJAN、今回の敵には驚きを隠せなかつた。自分よりもあまりに、あまりにも小さきモノ。よくぞ自分の前に出れたものだ。その矮小な身体では勝負にすらなるまい。

腹の足しにもならないであろう獲物に用は無い。 消える。

そして、血りが誇る全てを焼き尽くす息吹を吐き出すやうとしたその時、その小さきモノは

「

「

嘘つた。

全ての技能を引き出そうとも、思つたが・・・やめた。この程度の頭しか持たないモノに期待しても無駄だ。

感え、奈落の底へ

魔眼を発動させる。先程までは深みのある黒色だった瞳が一瞬で蒼く輝き始める。そして自らの幻術の術中へと相手を叩き墜とした。

全身に流れる魔力の流れを完全に把握。神経系に侵入。五感を支配。この作業を一工程でこなすこの眼は自分でも凶悪だとは思うが、まんまと引っかかる其の低能を恨め・・・。

コイツの魔力を操り、息吹を暴発させる。

ドゴオオオオオオオオオオン！――！ブチャア――！

愚団の体内で爆発音と何かが破裂する音が聞こえる。内臓の類が潰れたようだ。だがまだだ。まだ足りない。

一瞬で莫大な量の気を練り上げ拳に集中させ、一步で口から黒煙を上げている竜の懷に入り込み、そして 突き上げる。

まるで絵具をぶちまけたような音を立て、そして殴られた腹部を自然に凹ませながら竜は空中へと浮かび上がる。だがその先で待ち構え、こみ上げる液体が口から吐き出される前に地面へと叩き落とされる。

地面にヒビを入れるほどどの重量が生む反発力をその身で一身に受けた竜は悶絶した。

そして一拍

「まだ終わってないぞ・・・？」

その声に反応し、周囲を見渡すと自身を取り囲む影、影、影。

それはさながら死神の軍勢。そして、その軍勢の主たる男が手を振

つかないと回轉で一気に飛びかかるへる。

G A A A A A A ! ! ! ! !

だが、我が身は王。竜の中の竜たる自分を、やのよつたな雑兵どもで討ち取れると呪つてか

！ ！

そんな憤りと、先程格下であひて敵にこよひにされた憎しみを込めた咆哮をあげる。

しかし

「 ああ、下等生物。おまえの敗因は

皿の前の小さなものはぢしまでも、べじしまでも

「 本郷 」

恐ろしへ

「 運が無かったこと、だなあ……」

そして今まで見たことがないほど

「じゃあな」

強者だった。

・・・爆炎が辺りを焼き尽くす。そして目の前の獲物はその炎と衝撃によつてその身を地面へと横たえた。

周囲に配置した影達を、先の戦いで複製した魔力波を応用して爆発させた。結果はこの通り。うまく配置すれば如何様にも威力を増幅できる。もつとも完全に制御し切るにはまだまだ時間が必要であるが。

そして、倒れ伏した敗者の下へとゆっくりと歩く。

だが、てっきり死んだと思っていたが、まだ微かに息があった。そのままの呆れるほどの生命力と防御力には辟易する。・・・が、生きているというなら存分に活用させてもらひおつ。

「その血に宿る魔力と“情報”貰い受ける

そして血を一気に吸い取る。そして魔力とともに“記憶”を読み取つていく。

俺にとつてはいらない記憶を次々と破壊し、終に有益と思われる情報を得る。

「ふむ、なるほど」

どいつやうらあの森はある種の結界のようだ。俺自身は発見されることを恐れて、空から見たことは無かつたがこいつは竜。その翼でもつてその周辺を飛んだことがあるようだ。だが、魔力 자체は感じてもそのような生き物はどうにも見当たらなかつた。

俺の地上の探索にも、空からの探索からも逃れうる存在。いや、見つけられない存在？

「とこいつとは……？」

ある一つの推測が立つ。だが、もしその予測が正しいとするのなら・・・？

「厄介だな・・・」

ならば今ここで最後の殺し合いに備えて、切り札となる能力を創らなければ

ある森

そこには流体状のある生物が入り込んでいた。その身体を細く細く伸ばした糸のようなモノを周囲に張り巡らせ自身の獲物たる存在を探し出そうとしていた。その極細の糸はその主を中心にして半径 2 kmにも及ぶがいまだに捕捉できない。

鈍い衝撃

何か巨大なもので殴られたかのような衝撃を受け、身体が飛び散る。しかし彼の身体は再生力を發揮して元に戻り周囲を警戒する。

この後、森の主との戦闘が始まり、不滅であるはずの彼は敗北し、その血肉の糧となつた。

## 第三話（後書き）

次からは、これまでよりかなり話が長くなりそうですね。

## 第四話（前書き）

独自設定を含みます。厳正な原作準拠以外は受け付けない方はブラウザの戻るを押して他の素晴らしい ss をご覧になられた方が懸命です。

「・・・よし」

先程倒した竜の鱗や皮を加工し簡易的ではあるが鎧を作成した。

先程の戦闘でも、あれほどの過剰殺傷ともいえる攻撃を受けて、尚も原型を留めた頑丈さを見て加工してみたのだ。

基本的に皮鎧であるため動きを阻害しない軽さ、そして消えない炎を吐き出す竜であったためその防火性にも優れている。この二つを兼ね備えた新しい防具は生半可な攻撃や炎はすべて弾き飛ばしてくれるだろう。

これまでにも、他の真祖で使えそうな部位はほとんど加工して自分の装備を強化している。流石にどの生き物も規格外だけあって素晴らしい性能を發揮する。ただでさえハンデがあるのだ。少しでも戦いを有利にするための努力を欠かすことなどしない。

他の真祖に比べて弱い部分があるのなら、それを何かで補うなりす

ればいいだけの話なのだからな。

そして現在、俺は最期の真祖が待ち受けていると思われる森の中にいる。

鎧の作成にかけていた時間は残った一匹についてひたすら思考していた。自分が竜を捕食している間には既にもう一方の真祖同士の戦闘は終わってしまっていたからだ。

そしてやはり勝者は森の主のようだ。最大の懸念を感じている相手の戦闘を見逃してしまったことは痛いが、これまでの情報からでも推測できる部分はある。竜から得た情報でその推測も信憑性が増した。

そして何よりも、自分も切り札足る能力を手に入れたことが大きい。俺の推測が正しければ、使う事態に陥る可能性は十分にある。ただ、その切り札は強力であるがゆえに、それなりの制約や条件がある。

・・・一発で全て終わるが一発で決めないと全てが終わる。それほどまでに強力な能力チカラであった。

正直な話、使わずに勝利したいが……そりまくはないだろ？

基本的な戦力は拮抗しているはずだ。だが、ヤツはこれまで待ちの姿勢で勝利してきた。すなわち森の中はヤツの腹の中といつてもいい。そこに特攻を仕掛けるような下策はとりたくないのだが・・・。

衝動の赴くまま森に広域の炎でも撒き散らしてやりたいが、生憎その手の魔法はこの世界では全く使えない。そしてあの森は湿地帯。そしてなおかつ沼地が方々に点在している。

とてもではないが生半可な炎では焼き尽くすことなどできないし、そもそもその程度の炎では真祖に通用する訳がない。

よく考えればあの竜を戦わせれば、あの炎でイケたんじゃないかとも思つたが、あの低能では炎を吐き出す前に不意打ちされて終わりだろ。それに何よりあのスライムもどきとはやりたくなかつた。俺と相性が悪すぎるし、そもそも食えない。煮ても焼いても。

強化と相性の重しが俺の天秤を傾けたのだが、まさかここまで戦闘が早く終わるとは思つてなかつただけに思わず頭を抱えてしまった。

だが、ここまで来てしまつたのだから腹を括つて殺るしかないだろう。万全ではないが、最悪ではない。打てる手は打つたのだ。あとはヤツが俺の思う通りに動くか、否か。

そして生え茂る木々の間を周囲を警戒しながら歩く。視覚のみではなく全身の感覚全てを用いて敵の気配を探る。

影も用いているがその数は十。これは術の特性を用いた所為でもあ

る。普段のように視覚だけでなく、実体を持たせずに五感をそれら全てに繋ぐという細かい作業はこの能力を手に入れて日が浅い自分にはこれまで精いっぱいであった。

これ以上思考を分割すると意識に空白が生まれてしまうのだ。

そして森の奥へ行けば行くほど真祖の氣配は濃くなっていく。・  
・これが余計に俺の警戒心を煽る。気配を隠すのではなく、むしろ誇示するかのように森全体に広がらせている。これはまるで・・・。

そして後ろから一瞬の風切り音が俺の耳に入る。全身の感覚を総動員して身体を前傾させて転がると、頭の直ぐ上を何かが通り過ぎる。

その頭上を通り過ぎた何かは周りにあった木々を薙ぎ倒した。ミシツ、といったへし折れる音では無い、パキヤツ、という破碎音はそ

の振り切られたものの一撃のキレが半端ではないことを示した。

前傾した勢いを利用して転がり、襲撃者の姿を確認する。

「やはりか・・・」

そこには一本の周囲の木と姿は全く変わらないが 枝をしならせ  
木の根をまるで足の様に動かして近寄つてくる木の姿があった。

「色々予測はしていたが、周囲に完全に溶け込むその姿・・・道理  
で気配はするのに姿を捕らえられないワケだ・・・。最初は透明に  
でもなつていいかとも思っていたが、生き物の生活の跡すら無いと  
いつのは、な。

セオリー通りだ。隠すのなら“在って当然のモノの中に紛れ込ませ  
る”。正直ここまで隠匿し続けたのは大したものだ

だがな

「背後からの奇襲で仕留められなによつては無意味に等しい……！」

繰り出された鞭のよつた枝を握り潜り、一瞬で聞合口を詰め、拳に  
気を込めて。

力一杯

「吹き飛べえやああ……！」

殴り飛ばす！

ミシャアアアアー！！

心地よい音色と共に粉々になつて吹き飛んでいった。バラバラになつた枝やら紫色の体液やらが周囲に撒き散らされていく。その光景は実に爽快な気分にさせてくれる。

その様子を残心を怠らずに見つめる。粉微塵になつた相手が再生する様子は無い。

「・・・終わったのか？」

そつポツリと呟いた瞬間、ビシビシと周囲の地面が鱗割れしていく。一瞬でその場から離れ、安全と思われる場所へと飛び退く。

今は真祖ゆえのその聴覚の鋭さを恨めしく思ひ。俺の今想

その音がピタリ、と止まつた。

そして周囲を警戒する。凄まじい轟音と共に迫り、一帯の地面といふ地面上にヒビが広がっていく。まるで地震のように大地が荒ぶり、揺れ動く。その音は先程の場所を中心にして森全体へと広がっていき、

「クソッ！！」

像したことではないうことだ。今現在の状況においては・。  
・。

外れてほしい。

そんな思いを裏切るかのようにその音は耳の奥にまで響きわたる。その、普段は心を落ち着けてくれる木の葉の擦れ動き、靡く音が今は少し不吉な音に聞こえる。・・・その音が森全体からある一点に向かって集まつてきているような、そんな音。

そう、俺のいるこの場所へと

「ハア～……マジかよ・・・」

俺の周囲の半径五十メーター程だけポツカリと空間の空いた“森”。

「“木”がオマエじゃなくて、“この森自体”が“オマエ”ってか  
あ？はは、何て滅茶苦茶なヤロウだ・・・！」

俺は文字通りヤツの『腹の中』に誘き寄せられてしまつたらしい。  
どうやらこれまでの戦いで植えつけられた“敵は十四体”という先  
入観に捉われていたようだ。自分も似たような能力を持つていたく  
せに、な？

“自己増殖能力”

植物の真祖に相応しい、正に“らしい”能力だ。そして最悪といつ  
ていい武器・・・！同じ真祖同士が一対数千……。戦力差は余りに  
絶望的。

・・・ならば、俺は何がある？この状況を覆しつる、数多の並列世

界で常に不俱戴天の“悪”あるいは“敵”としての役割を果たし続けてきた、この俺にある絶対的なものとは？

傷つけて傷つけられて、殺し殺され、憎み憎まれ、裏切り裏切られてきた。

何度も転生を繰り返す内に、どんどん記憶は薄れしていく。今では最初の人生のことなどほとんど忘れてしまった。そして失う痛みでさえもなくしていく

だが、記憶はなくともこの魂は覚えている

諦めてしまおう。“役割”をこなす中でそう思つ度に、一時の間とはいへ『止まり木』と言える存在に出会えたこと。廻し合えたこと。

大多数には理解されなくても、ほんの僅かながらも理解者は“存在した”

どんな人間として生まれても“根っこ”だけは変わらなかつた。

あの原始の場所へと還る度に思い出す、あの“約束”だけは絶対に薄れはしなかつた

『求める』だけ『意味』は削がれていく。置いてきた人の数だけガリガリと削られていく。・・・そんなことは分かっているんだよ。

だからこそ『成さなければ』ならない

・・・・・決まってる。

「“不屈”……！俺の魂は絶ツ対エに折れねエ……！例え単身で万を超える数の敵と相対しようが、恥辱に塗れようが、どんな“理不尽”に見舞われたとしても」

絶対に

「俺はどんな運命を辿るつが、天寿を全うする……。少しでも、僅かでも、俺は『生きる意味』を見つけなきゃいけねえ……！」

もし次生まれ変わったら、絶対に“シアワセ”になつてくださいね！約束、ですよ……？

そう、一番最初の人生の最期に心の底から愛した女と交わした約束……優しい温もりを与えてくれたアイツと交わした、約束。どれだけ記憶が薄れようが色褪せなかつた、懐かしい『過去』の記憶……

そして、出来ればですが・・・

今度こそは・・・！

“次”も私を愛してくれたら、嬉しいなあ・・・

「来いよ。単細胞モドキ共が・・・教えてやうア・・・！」

俺から、そして周りの敵からも膨大な魔力が溢れだす。まるで開戦の闇を擧げるかのようだ。

「本当の、 “格” の違ひってヤツをなあ……」

## 第四話（後書き）

初めてのアクション描写になると想こます。

## 第五話（前書き）

この作品は独自設定を含みます。その点を踏まえてこの先へお進み  
ください

“私”はこの世界へと生みだされた。全ての始め。全ての祖。全ての起源として。そして私の存在が固定されこの世界に役割を負つた存在として刻まれてから開始した、『壊す存在』を選別する戦い。

どの戦いも流石に生物としての頂点に立つモノ同士の戦いだけあって激しいモノばかりであったが、一体だけ毛色の違う者がいた。

私と姿形が似ているが、また違う存在。『ヒト』と呼ばれる存在の形態をしている真祖。他のどれもが幻想種といえるなか、その者だけが『ヒト』という存在だった。

最初はこう思つたものだ。なんと哀れな。なんと場違いな戦場へと放り込まれてしまつたのだらう、と。だが、違つた。そのヒトは強かつた。・・・桁外れに。

種族として劣つてゐることなど歯牙にもかけない。戦闘巧者なのは間違ひない。勿論、能力や戦闘能力も凄まじかつたが、だが何よりも“生への渴望”。

この一点においては、本能で理解している他の真祖とは違い、理性で、本能で、何より魂から湧き出るとでもいえばいいのだろうか・・・。筆舌しがたいまでの違いを感じさせた。

燃え滾る程の熱さと時を止めるかのような冷たさ。ソレが同じ器に存在している・・・。そんな、一見矛盾したようでいて本質は同じ存在。

“魂”が違う。ただ長く生き、自然と一体となり靈格が高位になつた私や他の真祖とは全然違う。彼は異端なのだろう・・・。

自身の心に強く抱く死してなお曲がらない信念。ただただ只管、強くあれ。ただそれだけのために自らの魂を傷つけ、削り、打

ち据え、鍛え、鍊魔し、それでもまだ足りないと磨き抜いた末に高位の魂にまで登りつめた存在

なんという異端であるらうか。まず言えることは“ありえない”だ。どこにそんな頑強な精神を持つ生命があるだらうか。

まるで無機の鉱物のように己の魂を削り打ち据えていくなど・・・ありえない。もし、そんなことをすれば我々真祖へと至った魂でさえも崩壊をむかえるか、良くて“存在”としての欠陥を抱えることになるであろう。そして結果として消滅を迎える。

だから己が、ありえないのである。彼の者は自己を保つている。完璧とも言える状態の魂を。とてもなく強靭な精神。

正に“鉄のような自我”をもつヒトであった

……そして、終に始まつた“選別”的最終戦。彼の者は生き残つていた。

着々と力を身につけ、おそらく一番多くの真祖を葬つてきたのも彼の者である。そして眼前の光景にも驚かされる。

一対数千

戦力差は圧倒的。同じ真祖同士の戦いにおいてこの趨勢を覆すことなどは考えられない。終わった

と、彼の者を曰にする前なりば、そつ断じていたに違ひない。

だが、果たして・・・

「最期に立っているのはどちらになるのだろうか・・・？」

『壊す存在』とは相反し、また同格の生物として創られた『生みだす存在』である私が気にすることではないのだが、な。

そう一人ごちて眼前で行われている闘争を見つめていた・・・。

影を爆発させる。幾重にもその余波が重なりあつよつて、敵を誘導し数を減らす。奔る閃光と轟音、そしてその衝撃は殺戮領域に存在するモノ全てを容赦なく粉々にする。

だが、ワラワラとその空いた空間へと押し寄せる敵。生半可な攻撃は通用しないのは分かっていたことだが、やはり同じ真祖。たかが影一つ分の爆発では傷一つ付かない。このように何重にも重ねなければ殲滅すらもままならない。

また、厄介なことに奴らは俺には及ばないものの、再生能力まで備えていた。

表面が多少抉られようがある程度時間を置けば何事も無かったかのように、元へ戻つてしまつ。すなわち、完膚無きまでに粉碎・破壊しなければ無意味なのである。

チイツ、また囮まれてきている。

魔力を両足に集中させる。そして、相手を足場のよう使い飛び跳ねてその場から離れていく。勿論、飛び跳ねるついでに相手を攻撃するのも忘れない。動きを止めず敵を利用し、三次元的な動きでその場から脱出する。

この状況では、魔眼が役に立つ。幻術だけではなく、相手の動きや攻撃を解析・看破する能力は相手の動作一つから其の狙いを見破る。

・・・その蒼く輝く蒼眼は全てを見通す。

視界を埋め尽くす程の攻撃も防ぐべきもの、回避すべきものと瞬時に見分け、相手の攻撃一つ一つの軌道を完璧に予測できるため奴らの攻撃はどれも俺にとっては絶好のカウンターの的と化す。

それでも消費を抑えるために包囲された時にしか発動していないが。

・・・どうやら俺を出来るだけ動かして魔力を削っていく算段なんだろう。だが、それは対処可能且つ対策はもう既に立ててある。

バキヤア！

俺の目の前で上半分を粉碎され、その残存部位から紫色の体液を撒き散らす。こいつ等も一応“真祖”という生物を食すために、身体も完全な植物というわけではないらしい。そしてそのことは俺にとっても好都合だ。

その体液を啜り取り、消費した魔力を補給していく。壊し、啜り、迎撃し、啜り・・・新たな獲物を片手に、敵を次々と破壊していく。

勿論、相手も攻撃している。その一撃のどれを取つても地面を割り、その速度は弾丸にすら匹敵する。ましてや、その攻撃は何十、何百とも連續で彼を取り囲むもの全てが行っている。

だが、全てを回避できなくても瞬時に魔力を用いて再生する。鋭い一撃によって引き裂かれ、夥しい量の血が流れ出てもいつの間にか元通りになつている。

だが何よりも恐ろしいことは数多の並列世界を戦い抜いてきた男にはその程度の攻撃は対処可能の域に留まる、ということだ。

一撃一撃をその都度に最適な量の気を集中させ受け止め、流し、防ぐ。

一撃一撃を優先順位の高いものから焦ること無く不動の心を持つて見切る。

一撃一動はどれをとっても無駄がなく、無骨ながらも実戦で洗練され続けた動き。

そして自らの一撃一撃をどれも必殺のカウンターとして打ち出し敵の数を削っていく。

そして、その思考は 戰闘の、撒き散らされる血の匂いが濃くなればなるほど研ぎ澄まされていく。その経験によって積み上げられた、理論立てられている戦闘思考はどんな僅かでも勝利への道筋を導く。

まだだ、まだ、“切れない”

・・・・・

戦闘開始から既に五時間が経過しそうとしている。いくら真祖の強靭な肉体や魔力補給手段を確立しているといつても、流石にずっと戦闘に集中し続けられればし続ける程に精神力は削られていく。

更に先程吸い取つた情報によると、厄介なことに俺との戦闘に加わつていかない外周部の敵は徐々に増殖しているらしい。さすがに瞬時にとはいからいらしく、その増えた数も百体ほどらしきのだが“終わりの見えない長距離レース”ほどキツイものはない。

このままではいずれ押し切られる。取り合えず出来るだけ数を減らさなければ・・・まだ「ジョーカー手札」は切れないのだ

だがしかし、もう一つの切り札は使用できる。総数は把握した。たかが五千八百九十一体の戦力差を覆す。ただそれだけではないか

「・・・使うか」

周囲を爆破し、敵と距離を取る。

この技能はかつて別の真祖が使用したものを魔眼でもつて解析・模倣したものである。しかし魔眼で完璧に複<sup>トレース</sup>写した筈であるのに発動にはかなりの修練を必要とした。既に土台は出来ていたというのに最終的には約一ヶ月丸々かけて漸く形になつたという超高等技術だつた。

だが、余りに纖細且つ高度な魔力操作を必要とするためにまだ一瞬で発動出来る程、完璧に使いこなせない。そのため使用する時はある程度時間を必要とするのだ。周囲の敵を影で足止めし集中する。

左手に『魔力』を集中・集束。溢れんばかりの魔力を少しづつ研ぎ澄まし練り上げる。そしてこの作業と同時に右手に『気』を集中・集束。左手の魔力と全く同量になるよう、そしてより洗練

されたものになるよつ狂ヤクを澄まし、そして最後に

“融ヨウぜ合ハグわせる”

その瞬間に肉体の全てを活性化したかのような暴虐的なまでの圧倒的な“力”が全身を巡り、包み込む。

循環しているこの力は魔力とも氣とも違うもの。その危ういバランスに支えられた、しかし限りなく強大な力。その今まで感じたことないものに驚いたのか、周囲の奴らがたじろぐ様な動きを見せるが

足止めに使つていた影達を一斉に爆破させる。そして、その場から一息で一番近くにいた敵に向かつて突っ込む。

爆煙とともに現れた俺に向かつて攻撃してくるが、それらは全て俺に触れる前に逆に弾け飛ぶ。そして何が起きているのか把握させる間すら『えず』に左の一撃。

先程までならただのジャブ程度にすぎない一撃。だがしかしその手にはとんでもない密度を持つたエネルギーが集束されていた。つまり 威力は比べ物にならなかつた。

一撃で文字通り“木端微塵”になる。そして周囲がそのことに気が付かないでいる内に俺は攻勢に出る。もはや止まる気などない。

四肢に集束させて突っ込む。有り得ないほどに強化された瞬発力は敵を置き去りにする。認識する時間すら『えず』に十数体が通り過ぎただけで消し飛ぶ。

右手で殴る。周囲を巻き込みながら弾ける。ザクロのよう。

左手で握り潰す。なにも無かつたように縮小され、果てる。砂のように。

両足でもうって踏みにじる。下は大混乱だ。蟻のよう。

俺は今実にイイ笑顔を浮かべていることだらう。今の今までひたすら防戦一方で、たかが植物モードキに物の見事に嵌められ、苛立つ心を抑えながら敵をひたすら観察しつづけていたその成果と鬱憤を一気に晴らせるのだから。

このまま決める、そんな氣概で猛然と反撃する俺は一抹の不安と疑問をかすかに覚えていた。

これまで本当にこの擬態能力と物量だけで勝ってきたのか？

“切り札”を隠しているのは本当に俺だけなのか？

あまりにも一方的に攻めさせすぎるのではないか？

そんな疑問を抱きながらも、この攻勢にでる機会を潰せるわけでもなく、実際表だった黙の気配もなかつたために俺は手を休めることはしなかった。

## 第五話（後書き）

最近は忙しい。もつ少ししたら落ち着くかと思いますが。  
つて難しい。けど頑張ります。

戦闘描写

## 第一幕最終話～第六話（前書き）

「」の作品は独自設定を含みます。その点を踏まえて「」覗くください。

第一幕最終話～第六話

彼の者は恐れを集めん。

そして我らはその弱き者に持つ業を彼の者にぶつけるのだ

これ以上思い知らぬよう

これ以上先へ進まないよう

これ以上

語りてしまわぬよう

そのまま攻勢を続け一方的に敵を蹂躪し、残り一千程になつた時。あの状態をそのまま維持できる訳もなく。

流石に自覚できる程の淀み、身体がまるでどんよりとした鉛のようになくなつたかのような疲労感を覚え始めた。魔力は温存できてはいるが長時間の戦闘は確実に俺の心身を削り取つていた。

だが、このままならいけるか？ そう想つても良いほどの戦果を挙げることは出来たろう。圧倒的物量差に晒されながら、三千近くの敵をこれまでと比べ物にならない程の速度で殲滅できたのだ。・・・ そう思わないとなつてられない、といつのもあるのだが。

しかし相手も終に俺の力も尽き始めたと判断してか、予想だにしない“最後の手札”を切つてきた。

「・・・チッ。本当にえげつねえ真似しやがる」

・・・俺の周囲を取り囲む木々が一斉に枯ればじめる。急速に生氣を失い崩れ落ちていく。その異常な光景に何事かと思い前方を見る  
と、その疑問は一気に氷塊した。  
自分の頬が軽く引き攣つ  
ていることを感じる。

そこに在つたのは一本の大きな『大樹』であった。いや、違う。  
“  
今だ大きくなり続けている”と付け加えた方がいいだろう。

全長は約百メーター、幅は五十メーター程にまでなるうとしている  
巨大な“ソレ”。そしてその大樹からはとてもなく強大な力を感  
じる。・・・まるで大地を波立たせるかのような、先程の俺すらも  
上回る圧倒的な力を。

「純粹な魔力だけで先程の生成した“力”を上回るか・・・最初はドコのB級アクション映画の親玉だ、と思ったものだが。これは本当に不味いかもしれん」

どうやらヤツはこの木々達の魔力だけでなく氣、そして生命力すらも根こそぎ奪い取っているようだ。

自己増殖能力は本当の能力の隠れ蓑で、どうやらアーヴィングの本来の固有スキルとでもいうべき力は“同族からの力の篡奪”。そして今、これまで生みだした『自分』から全てを奪い尽くそうとしているようだ。

もし全て吸収し終えたら一体どれほどの存在になるのかは想像がつかない。

・・・現在の俺の対処可能な域で留まるのかもわからない

いま

といつても、俺は勿論全ての奪い終えるまで待つ気など無かつた。  
それは即ち俺の敗北を意味するのだから。

そつ思い攻勢に出ようとした瞬間。

「カハツ？！！」

突然俺の身体に衝撃が走る。何だ？ 一体何が・・・。

幸い無意識に衝撃に合わせて後ろへ飛び退いたが、それでも、このまるで身を引き裂かれる程の衝撃。

身纏つた皮鎧のおかげで目立つた外傷はないようだが、これを生身の部分で受けたら・・・間違い無く弾け飛ぶか、引き千切られていたに違いない。

何かがこちらへ来ることを気配に察し、僅かに空虚が生まれた意識をすぐに元に戻して更に飛び退く。

飛び退いた瞬間、先程いた場所がまるで地雷でも仕掛けられていたかのように弾ける。今度は何とか避けることがようだ。

迷わず魔眼を発動させる。そして解析をするだけで、使用を打ち切った。

信じられないことにあの大樹はここから目測約一千メーター近く離れているあの場所から先程までと同じように枝を鞭のように放つているだけのようだった。だが、比べるのもおこがましい程“次元”が違う。

威力、速度もとんでもないが、その馬鹿らしい程までに膨大な魔力によって強化されたソレは容易に俺の防御を貫通する。つまり“圧倒的な力で無理矢理” 障壁を貫いてくるのだ。

しかも物量に任せての攻撃らしく、その魔力を枝を振るう度に飛ばしていく。おかげで先程までは一撃とカウントしていた攻撃は一度に数撃同時に放つてきたり、重複して繰り出されるといった厄介な攻撃に変貌していた。

それをひたすら回避していく。見えるものも、見えないものでさえも。もはや擦り切れてきている精神と肉体を酷使して。

魔力は一切使わない。もはや、今の疲弊した長時間の戦闘は耐えられないだろう。

そのことは自分が一番理解していた。先程の一撃も不意打ちとはいえる常々の状態なら回避できていたろう。・・・しかし、反応すらできなかつた。

このことが何を意味しているか。

もはやこれ以上の戦闘の維持は限界を迎えてつある今の状態では不可能に近い

このままでは敗北<sup>まけ</sup>る。即ち

“死”

後ほんの少しでもいいから負担を減らしたかったのが、この手の裡に隠し持っていた“切り札”<sup>カーダ</sup>。もはや出し惜しみできる状況ではない

そういつ言つてゐる内に、相手も俺を殺す準備を始めたようだ。

空間が揺れ動き、歪むほどの魔力が大樹の葉の一つ一つに集中し、球体状になつていいく。

その光は実に多種多様であり、穏やかに明滅を繰り返している。大

小に大きな差は無く、まるで鮮やかな果実を所狭しと付けたかのようだ。

だがその外見とは裏腹にその一個一個から感じる魔力の波動は実際に恐ろしい程の魔力密度を如実に俺に見せつける。アレー発でも十分に俺を消し飛ばすことは可能だらう・・・

攻撃を回避しながら魔眼を発動させる。そして発動させるのはその魔眼の奥に宿る“力”。発動と同時に自身の中にあつた溢れんばかりの魔力が一気に全て消失したことを感じる。しかし、それを条件の一つとしてソレは起動する

“業深き死を（テイス・トオウデス）”

その“眼”でもって『目標』を見つめ続ける。あとはそれだけでいい。ここから必要なものは力でも技術でも魔力や気の量でもない。文字通り『魂』の強さなのだから。

大樹に異変が生じる。先程まで練り上げた力が一気に消えていく。その枝に伝わせた魔力や葉の上で生成した筈の魔力も。

それだけではない。

全身から活力が消えていく。身体の端から細かく消え去っていく。念入りに消しゴムでキャンバスに描いた絵を消していくかのように。

本来は感じることなどない筈の寒氣、痛み、消失感を感じる。

自らを吸い殺す時にも、そして吸い殺される時でさえ感じない類のものを覚えたのである。これまで一度も感じたことがない程に底知れない、おぞましい何か。それが何かはわからない。ただ分かることはこの先に待つ最期だけ。

“死”が

今まで一方的に与えてきたモノの片鱗が自らを捕らえ始めている。理解できたのはそのことだけだった。

“業深き死を（ディス・トオウテス）”の能力。

それは即ちその魔眼によって捕らえられた対象に文字通り全ての“存在”の消滅を与えるというもの。そう文字通りの消滅。

その身は大地に還ることも、風によつて巡ることもかなわない。その魂は死した後の輪廻に加わることさえ叶わない。耐え難い尋常でない苦痛をあたえられながら・・・消滅する。救いのない常闇の恐怖の中で

だが、それはその能力の対象だけの話ではない。  
使用者にも  
相応の“代償”を強いる。

「ぐつ……う……！」

その代償とは“使用者の全魔力”・・・そして“対象が与えられて  
いる苦痛・感情・恐怖”的全てを共有すること。

すなわちその耐え難い、身体を念入りに時間をかけてコマ切りにしていくかのような苦痛。

目に見える死をひとつと迎える、その恐怖を自らも味わう。そして、自分へ向けられる怨嗟や罵倒の声を一身に受け続ける。

そして、その苦痛に耐えられなければその能力の果てに訪れる“結果”が逆流する。

だからこそ、この死闘を制するに必要なのは

「ぐ、ぐぐぐぐ・・・！－どうだ？死の感覚は・・・？そりゃ、初めて味わうのだったなあ・・・？」

魔力やら腕力といった外へ向けられる強さではない

「何だこの脆弱な魂は？！もう“自我”が壊れ始めたのかあ？この

程度の恐怖で？絶望で？憎しみで？痛みで？」

たとえどのようなことにならうと、見失う」となどない、壊れるこ  
とのない“自我”

「くはははああ！！！何も感じなくなつてきたのか・・・？それでいい！そのまま死ねえ！！狂え！惑え！悲鳴えエエエー！」

## 『魂の強さ』

・・・そしてあれ程巨大な大樹が彼の嘲笑の声を聞きながら“消え去つた”

その様子を眺める彼の眼には、かつての世界でも浮かべていた色があつた。

燃える程に熱い意思と、それでいてどこか身も凍るような冷たい何か・・・一重には推し量ることのできないモノを秘めた何かを。

確かに理不尽な結末へと導く因果の影響もあったのかもしけない。

しかし狂氣じみたその衝動と鉄のような理性を同時に秘めた彼は“運命”や“宿命”なんて陳腐なモノに決して踊らされるような存在では『元』から無かつたのだ。

つまり、彼の辿りついた在り方はある意味必然だったと言えるのだろう。

その最期でさえも。

どのように世界が変わろうとも

姿かたちや踊る役柄が変わらうとも

彼が『彼』である限り。

・・・そう我們は理解できなかつたのだ

悟つてしまわぬよつて

これ以上

これ以上先へ進まないよつて

これ以上思ふ知らぬよつて

そして我們はその弱きゆゑに持つ業を彼の者にぶつけゐるのだ

彼の者は恐れを集めゐる。

咎を刻み、ただただ震えるしかなかつたのだ

彼の者はこの世界で最も畏れられていた・・・確かにそういう

だがしかし聰明であった。誰よりも先を見ていた。誰よりも未来を  
憐んでいた。その背中は孤独でありながらも巨きかった。鮮烈だつ  
た。そして、何よりも、強かつたのだ・・・

この世界に生ける者の中の誰よりも。

言つなれば彼は物語に出てくる“鬼”的な存在だったのだらう。

我ら脆弱なるモノの誰もが持つ恐れを一身に集め、その業を果たす

だが、只管遠い存在なのだ。絶対に手の届かない、及ばない圧倒的な存在

ただ強く曲がりずに在る存在

そして、最後は討たれる。世界に安定をもたらす終末を齎すと同時に

だが、その名だけは残す。

夜が明け、朝を迎える。月日が幾ら過ぎようとも、どんなに時の勝者たちがあらゆる記録から彼を書き消そうとしても……拭いきれない『恐怖』とともに潜み刻まれていく。

日々に“最強最悪の悪”として憎々しげに、しかし震えながら囁かれ続けるのだ……

永远に、再臨を畏れられながら

そして、ついに始まりを迎えた

「やはり、生き残ったのか・・・」

「何だ・・・オマエは?」

これまで世界に否定され、利用されるしかなかつた彼が今度は世界の意思として肯定された

「私は“ライフメイカー生命創造”。壊す存在であるお前の対極を為す、生みだす存在・・・そう言えば分かるか?」

後に、『魔法世界』、そつ名付けられるこの星の防人と創り手の邂逅を合図として

「初めまして。そして、長い付き合いになるだらつアーヴィング・ノア』。『方舟”の役割を担う者よ・・・」

数多の並列世界の一つである“壊れたモノガタリ”は今、動き出した……

## 第一幕最終話～第六話（後書き）

第一幕プロットは大体は完成。少し訂正作業（+次話執筆）を挟むので間隔空くかも。ただ次幕からは会話が挟めるようになる、よかつた。自分で決めたこととはいえこれまで結構きつかった。

できるだけ簡潔にまとめようとした人物情報（前書き）

ちょっとプロット変更することに

やつぱり酔った頭で考えたことは信用できない・・・大筋はいいにしても修正の必要を感じたので

できるだけ簡潔にまとめようとした人物情報

名前 ノア

登場人物その1。

主人公。あらゆる世界の安定をもたらすための傀儡として上位存在の下で数多の並列世界を渡り歩いてきた男。ただし、『どの世界でも絶対に倒さなければならない悪』という役割を負わされてきたらしい。

その繰り返された拷問じみた生涯と強靭な精神によって自らの魂も『人間』という種族の上位存在にまで昇華した。

現在、今度は『世界』という上位存在に縛り付けられ、“魔法世界の滅亡”を阻止するための抑止力としての存在である“真祖”となつた。

これまでの並列世界での戦いの生涯から培われた戦闘経験・理論は他を寄せ付けてない。その上真祖という強力無比な肉体を有しているため余計に始末が悪い。

ただ『抑止力』として『世界』に登録されてからは、『世界』からの殲滅命令時以外は魔力等はまあ結構多いかな、くらいに力を制限

されている。これは通常時に周囲に余計な影響を与えないためであると思われる。

## 能力

### ・魔眼

相手の魔力等を用いた技能を解析・模倣・看破する。眼を合わせるだけで相手を幻術に嵌めることができるように後に進化した。（ただし固有スキルは模倣や解析ができない。凄まじい程の魔力を消費するため長時間の使用は不可）

後に魔眼の機能を任意で切り替えることによって消費を抑えることを可能とした。

### ・吸血デヴァイト

相手の魔力を吸血によって取り込むことができる（補給率は血に含まれる魔力の10分の一）

吸血することにより記憶を読み取れる。（血の鮮度と量に左右される）

### ・隣に潜む暗殺者ハイドエッジ

自身の影の複製を作り出すことが出来る。最大五十体。本体を中心  
に半径15kmの中で存在できる（ただし供給を無視すれば範囲外  
であっても存在できるが実体化は出来ない）。固有スキルの進化で  
あり、少量の気と魔力の消費で使用できるためかなり燃費が良く主  
人公は多用する。実体化も出来るようになつたため、かなり運用の  
幅が広がつた。

複製達とは感覚を共有できるようになつてゐるため並列思考を必要  
とする。実体化しても複製の出せる実力は最大でも本体の十分の一。  
さらに強さにはある程度の平均が存在しており、複製の数が増えれば増える程その平均の値は下がつていく。

そして複製達は魔眼は使用できない。

後に最大数が1～358体、部分的に影の実体を生みだすことが  
できるようになった

- ・再生能力

“業深き死を”（ディス・トオウデエス）

魔眼の第一解放。この状態の魔眼で条件と代償を満たすと相手を  
文字通り“消滅”させる。

条件

? 対象を三秒直視し続ける。（見失つてはいけない）

? 使用には対象に関わらず全ての魔力を消費する。

? 殺す際に耐えがたい苦痛を相手が完全に消滅するまで受け続ける。  
(耐えられなければ相手の消滅が停止し、その“結果”が自身へと逆流する)

? 消滅させるまでにかかる時間は対象の存在としての“格”で決まる。

・  
生命創造  
ライフメーカー

登場人物その2。後に『造物主』と呼ばれる原作のラスボス的な存在。本作では魔法世界の万物の祖であり、「生みだす存在」の役割を担っている。その力と外見は原作通り。

ノアとは違つてなるべくしてなつた上位存在。作中では触れないが魔法世界とは独立した魔界などといった世界も創造したらしい。ノアの能力と強靭な魂を高く評価している。そしてある願いを持つようになった。

## 第一話（前書き）

来たぜ、ぬるりと・・・

この作品には原作には無い独自設定が含まれています。

## 第一話

### 魔法世界 マジックワールド

その世界は竜や妖精、獣人等が存在しており、此処の人間はこの世界ではいつしか使って当然となつた『魔法』という独自の技術を発達させることにより発展を遂げていた……

創生初期の規格外の生物がその辺をのし歩いてよつた頃とは随分と変わつたものだ・・。

あれから何千年か経つたのだろうか？ もう数えてすらいない。といふのも殆どの時間を惰眠で消費したからな。

幾らなんでも精神が植物の域にまで達する程の年月を過ごす氣など更々ないためである。

バトルロワイアル

生存競争を勝ち抜いた後の数十年間は役目をこなすことと併行して能力を磨くことに費やし、その後は用がある時以外は冬眠、といふか仮死状態を保つことで時間が消費している・・・

ヤツとは奇妙な出会いだった、そういうしかないだろ？。

確かに理屈の上では分かる。『壊す存在』があるなら『創る存在』があるのも道理だろ？。

だが、最初は何を言つていいんだコイツは？くらいにしか思わなかつた。しかし、俺以外にはここには“ヒト”と呼べる生物はいなかつたハズだということ、その身から立ち上る“真祖”たる俺とは全く異なつた雰囲気が漠然とではあるが理解させた。

「コイツは俺とは対等且つ根本から違うのだと

ま、何よりもその直ぐ後に星からの情報で抑止力と生成者オレことが流れてきたがな。どうやら俺は正式にこの星という『世界』に認定されてしまったらしい。・・・全然嬉しくないが。

その後は無駄に忙しい日々だった。何しろ俺の役割は星の生物の階層制度のトップをやれと言われているようなものだ。

つまり俺が余りにも強力過ぎる生物の絶対数を減らしたり、バランス調整をしなければならないという・・・本来絶対にありえない役割をこなさなければならないのだ。

普通このようなことは絶対にあり得ないし不可能だ。この全世界のバランスを取る、つまり把握することなど。

悪い部分を取り除いた 元通りになる。

この世界はそんな単純な原因結果の関係で結びついてなどいない。世界は複雑極まりない要因で成り立ち、薄氷のようなバランスによ

つて保たれ、構成されているのだから。

ゆえに、たかが一生物などといった矮小な存在がソレを全て測り知ることなど出来る訳がない。それが出来ると思うのなら傲慢に過ぎる、その一言でいいだろう。

しかし俺は『この世界』から直接リンクを受けて指令として、そのバランスを保つために動かされるといった正に“傲慢な”ソレそのものだった。

・・・この世界が滅べば必然的に此処に存在する一生命である俺も諸共に死んでしまうため嫌々ながらも動かざるを得ない、というのが本音だが。

そして俺が馬車馬のように働いたおかげで有り得ないスピードでの星は整備されてきている。

・・・本当にギリギリまで動かない俺に対して時々生命創造が文句を言つ」とはあつたが。

曰く、危なつかしい、余りに放置し過ぎていて冷や冷やする・・・等々。

そつまいっても、わかるだろ？

正直いって俺からしてみれば後で壊すべりならば創るな、といいたい。

創られた側からしてみれば俺は天災同然だし、何故こんなことをされるのか全くわからないまま虐殺を受けるハメになるのだから。

だがその理由をあえて言葉にして丁寧に簡潔に述べるとすると

れば、いつまでもしがないわけだ。

“あなた方は世界に滅亡をもたらす可能性のある存在として『この世界』から認定されてしましました。

そして『世界』としては誠に遺憾ながら君達を創った責任を果たすために、死んでもらうことになりました。

いやあ残念です。ここまで脅威となるほどの力を得なければこんなことにはならなかつたのですが。

そして私はあなた達のような存在を消すための存在として『この世界』から認知され、派遣された者です。運が悪かつたですね”

なんという一方的な理由だらう。

ただ存在するだけで『危険』『罪』『肅清』を行う……かつ

ての“オレ”であつたら、間違いなくどうとかして消しにかかる  
いた存在である。そして、そんな存在を一番嫌惡している俺自身  
が『ソレ』になるところのはなんといふ皮肉であつつか。

俺としてもあまりの自分の行動の理由の独りよがりさ・理不<sup>タチ</sup>なに  
吐き気がするが、こいつ風に“縛られている”的から性質<sup>タチ</sup>が悪  
い。だからこそ必要最低限しか働かないが。

そして生命創造は生命創造でひたすら縛られている。  
アイツ

“あらゆる可能性を生みだす世界へとする為に、あらゆる可能性を  
持った生命を創造する”

あらゆるモノを貰<sup>貰</sup>する。あらゆる生命を許容する。その可能性を  
愛で、育む。

しかし、その成長が『この世界』の滅亡へと向けられる程にまでなつたなら・・・・・

末路は、一つ

なんと寛容で優しく、それでいて冷徹で

残酷な世界だ。

・・・・・ま、それはダーリも同じか。形は違えど。

そんなこんなで時は過ぎ。気まぐれに眼を覚ましてみると、世界に変容が起きていた。良い方向の、であるが。

すぐさま生命創造に話を聞いた。

最近（といつても数百年程前に）アイツは俺達に近い存在、亜人や人間を生みだしていたらしい。

創りだされたソイツらも環境に順応しているらしく、最近は都市國家や連合を形成する程までになつたとか。そして『魔法』というものが広く認知され、社会・文化の根底に位置するような存在になつてゐるらしい。

その話を聞いて俺も一息つく。漸くヒトに類する生物が生活できるほどまで落ち着いた、といえる程に安定したといえるからである。

それに、俺もいい加減に文明のある生活が送りたいのだ。前世？では一応人間という文明圏の中で生活をしていた者としては……。

ここに到るまでの長い間に元々の技能は磨いたが、この世界には魔力というものがあるのだ。しかしそれを使用する“術”が無い。

といつても困るような事態は起きなかつたし・・・別に固めて放るだけでも目的は果たさせていたので特に何かしようとも思わなかつたが。

それに俺は、数多の世界を巡ってきたものとしてこの世界では形成される魔法・魔術といったものに“興味がある”だけなのだから。

まあ、かなりその分野は発展していることらしい。おいおいその術も身につけていくことにしよう。俺がこれまで行使していた魔

術は相性が悪くて使えないからな。持ち札は多いに越したことはない。

次々とこれまでの世界の推移を生命創造から聞いていると（コイツはずつと起きていた）、とてつもないことが飛びだした。

「・・・そして新たなる可能性を生みだすために“外”的因子も引き入れた。ある程度の文明や魔の才を持った人類をこの世界に連れてきたのだ」

おかげでようやく久々の安定といえる状態を迎えたと続ける生命創造を尻目に、俺は聞き捨てならない単語を口にだして話を遮る。

「……“外”？」

其の時アイツは『知らなかつたのかよ』といいたげな若干の呆れが含まれた視線を俺に向けていた。少しだけ、氣まずい空気が流れる。・・・仕方ねエだろ、ほとんど寝てたし。

フウ、と。わかるかわからない程度の溜息をつき『仕方ないか、コイツだし』みたいな眼で話し出す。・・・コイツは口こぼ出さない内心がありありとその視線に露骨に現れやがる。

・・・訛然としないものを感じるが、黙つて説明を聞いた。

「要は此処とは違つ起源を辿つてゐる別の星つてことだな」

「・・・ああ」

長々とした説明を一言で述べてやつた俺にまた呆れの色を浮かべる  
生命創造。

なんでもここで生きていける人間をふるいにかけるには多種多様な  
ものを、とこりことで似たような環境の他の星を探して連れてきた  
らしい。  
とこりがある意味では対となつてゐる世界のようで  
あるが。

こことは違つて世界が“魔”で構成されていない、人間がソコの中  
心に自力で登りつめた等といったコイツにとつてはかなり重要な事  
柄なんだろうが・・・。

俺にとってははははきりいつてどうでもいい事だ。それにどっちかといつとソコがどんな星なのか見てみたい気持ちの方が強い。

そんな事を考えていた俺にスッと宝石のよつな魔石でできたペンダンツを差し出す。

・・・なんだ？

「 転移の際というか“魔法”の使用の際に用いる触媒のよつなものだ。向こうの世界へとこきたいのだろつ？」

これには驚きを隠せない。・・・どうじう風の吹きまわしだ？ 基本生真面目なコイツが俺に堂々とサボリを許すような発言をするとは……ってか今俺の思考読みやがつたぞコイツ。

「殺し合いや騙し合いの時でない“普段”的お前の考え方など存外に読めるものだぞ？顔に結構出るからな」

まあ分かるまでは時間を使したが、と無表情で続けるコイツ・・・。

そういうえば“以前”に俺と親しいといえる数少ないヤツラにも同じようなことを言われたような気がしないでもない。ただ俺と親しい＝マトモじやない、が条件に付く。つまりどこにいつもどこか壊れてるようなヤツばかりだったが。

・・・それに、お前には言われたくないぜ。そのセリフは。

そんな軽い憤りを覚えながら そしてソレを今度は極力表面に出さないよつに気をつけながら そのペンダントを礼を言って受け取らうとするが、そこでヒョイと持ち上げる目の前の存在。

「もちろん、タダではない」

・・・だらうとは思つてたよ。伊達に千年単位の付き合いではない。

「で、おまえの要求は何だ?」

そう切り出す俺に急に眼から光が消えて生命創造・・・『造物主』の顔になる。その瞬間俺も『作業』ができる状態にスイッチを切り

替える。

「　いま世界に要求されているであらう『脅威になるヒトの殲滅』を終えること・・・。

そして真祖という存在の恐怖を奴等に刷り込め。人間たちは新たに手に入れた魔法という強力な力に酔い始めている。

ようやく安定した世界で、下手に騒がしくされるのは好ましいことではない」

・・・なるほどな。つまり今までの人間に与えてきた数百年の時間は『選別』ってわけか。そしてこれまでのやりとりの真意が見えてきた。寝起きの頭が回り始めた、というのもある。

確かにコイツの目的通りにするには『惨劇』を起こしたあとは俺が暫く鳴りを潜めていた方がより一層の効果があるのは確かである。

いいだろ？。そういうならコイツの掌で踊つてやるのもやうぢやない。

俺が此処以外の世界を行き来できるようになることは俺の目的にもつながる。その辺もコイツはわかつてゐるから俺に言外に告げているのだ。

『利用される』と。

嗤いがこみ上げてくる。いいねえ。こういう賢いヤツは好きだ。恐らく“外の世界”といつても俺の目的に躊躇させるために態々似たような世界を探してきたのだろう。

これは正当な取引となるわけだ。

アイツは俺に『近似した世界の情報と其れを探す手間』『移動手段』  
『魔法の使用に必要な触媒』

俺はアイツに『不適格者の肃清』『目的のためのパワーバランス調整』『抑止力の影響を強めることによる利』

あとはお互いが好きにしていいということ。其々の目的のために相手に踊らされることも気にしない。あるのは互いに利のみ。

「はあ、しゃあねなあ・・・やつてやんよ、面倒だがな」

「助かる」

“世界”を謀る

そのためには長い準備期間と駒が必要不可

アイツはアイツのため

俺は俺のため

そう今行われているこれは“世界”に語りせないための俺  
と「マイツの茶番劇なのだ。

欠なのだよ……。なあ、『盟友』よ？

## 第一話（前書き）

独自設定があります。『J』へ承ください。

『選別』の時間は終わった。そしてそのための準備期間も、終えた。

アイツが欲する情報を得ると共に相互に魔法という因子を植えつけることも終わった。アチラに置いてきた私の人形のにんげんおかげであちらにも魔法というものは浸透していくだろう・・・。

亜人、人間達。彼らは多種多様で様々な違いが個体ごとに如実に現れる面白い存在である。

ソコに可能性を覚えると共に危うい面も多分に見受けられる。そしてその危うさが『世界』の眼に留まってしまったのだ。

特に今回『不適格』と断ぜられた者達……。

新しく手に入れた魔法の力に酔いしれ、自分の力量を見極められず他種を見下す人間達。

その魔の力を持つてこの世界を征しようとする人間達。

そして一番面倒な　　だが個人的には好ましい　　自分たちを管理している者がいるということを密かに悟り世界に反旗を翻すことを決意した人間達。

彼ら人間の『本質』を強く宿した存在であった。

特に最期に述べた“本当の”反逆者となつた人間。彼らは優秀で力を有し、なによりも勇敢な一族であった。

私は好感が持てる。彼らのような存在を愛しているといつてもいいのかも知れない。彼らを生みだし、居場所を与えた存在である“造物主”としては・・・。

彼らは唯独りで立とうとしているだけなのだ。親の手を離れ、自身の光輝く世界へと旅発つ子のように・・・。

何と美しい。そして何と素晴らしいことか。

生みだした存在としては何よりも嬉しいこと、そのものである。

だが、早すぎた。彼らは、早すぎたのだ。

その力を奮つべき時を間違えてしまった。

過ぎたる力は“警戒”を呼ぶ。過ぎたる願いは自身を焼き払う。

どれ程優秀であっても“世界”を外れていのい存在は、“世界”的眼から逃れることは叶わず“方舟”<sup>アーツ</sup>の担い手を差し向けられる。

そして世界が差し向けた“箱舟”の訪れる処には破滅が訪れる。・  
・彼にとつては殲滅すべきと断ぜられた存在などただの“事物存在”でしかないのだから。

そしてその惨劇が行われる舞台において慈悲といふ言葉は存在しない。

彼は自分にとつての“道具的存在”でないものに對して向けられるものは無関心・無感情であり、公平であり、平等であり、どこまでも残酷になる。

そして彼の矜持や信念といった琴線に触れるようなモノでもない限り、彼は躊躇いもせずに他者を踏みにじる。そこに感情の色は存在しない。

だれかが幸福になるためには、だれかが平穏を得るためには、  
だれかがその分理不尽に割を喰う 同じ位不幸になる人間が  
存在するという、ドコの世界でも普遍の真理を誰よりも深く理解し  
ているからだ。

彼は今夜、危険因子を残らず消し去るだろう。私の創造した可能性<sup>うみだ</sup>  
溢れる優秀な存在を殺しつくすだろう。

だからこそ私は見届けよう

その失われる命を最大限に利用しつくそう

「えられた畏怖と圧倒的な力、脅威を知らしめよう

私がこれまで創りだした生命の中でも最も可能性に溢れる人イノチおまえたち類を生かすために

私の願いを叶えうる生命を絶やさぬ為に。  
私はどこまでも利己主義なのだから。

我が子とも言つべき人間達よ。旅立ちの時は近い・・・。願わくば、  
安らかに

この世界を形作る太源へと還れ……<sup>マナ</sup>

「や、やめて……殺さない、でくれ」

その命乞いの言葉など聞こえていないかのように右手を相手に向ける。手を向けられた男は顔を青くして逃げるが、その手から放たれた禍々しい光の奔流に為す術無く呑み込まれていった。

その奔流の通つた跡に残されたもの。それは死と絶望だけだった：

。.

「おのれ・・・ツ！おのれええ　　！」

何故だ何故だ何故だ何故だ

！！

この国屈指の精銳の近衛騎士である彼の目の前では自らの国が滅びゆく光景が容赦なく繰り広げられていた。

先祖から脈々と受け継がれ栄ってきた城下町。

活気に満ち溢れた民草の者達。

屈強で精強で無敗の、これまで他国に不覚など取つたことのない兵士達。

高度な魔法技術を持ち、発展の勢いが止まることなど知らなかつた彼の國。

それら全てのモノがあっけなく崩れ去つていく・・・阿鼻叫喚の地獄が目の前にあつた

その光景を目の当たりにして、彼の心は未だかつて無い程にうろたえ、動搖を隠しきれない・・・

何故だ！ようやく国力・魔法力ともに強大となり他国侵略を視野に入れるほどに成長したわが王国がツ！！

たつた一人の吸血鬼の前に滅び去りうとしている…！そんなことがあつてたまるかツ・・・・・！

周囲は忙しなく動く者達で溢れかえっている。ヤツ<sup>いつ</sup>が玉座の間へと向かつて来ているからだ。

「王よ…お下がりください…今すぐ」ひかりへ閉鎖結界の陣を敷きまするゆえ…！」

「オイ…早く状況を知らせろ…！」

「ヤツを此処に近づけさせんなあ……」

「リストンド卿がお討たれに……あの救国の騎士がツーー」

「ちくしょう、なんだってんだー何がどうなつてやがるーー」

周囲の喧騒と混乱は何時まで経つても静まる」とはない。皆動揺を隠しきれないようだ。無理もない……。

これまで如何なる外敵も寄せ付けなかつた城と城下町を覆うように構成された結界魔法がいとも容易く破られたかと思えば一人の男が城門を吹き飛ばしこう抜かしやがつた

「我が名は真祖の吸血鬼“ノア”……お前らを殺しに来た」

そんなふざけた前口上と共にヤツの影から数百の影の軍勢が現れ虐殺をはじめやがった！－

我等が王は王妃どじ子息を抜け道から逃がし、自らは此処に残った。

今も動じるにとなく冷静に状況の把握に努めておられる。

だがしかしこのままでは不味い。 そう私が思った時

「 静まれエイ……ツ……！」

正に腹の底から聞こえるのではないかと思えるような重低音の、だが力強い声。

溢れんばかりの霸気は周囲の喧騒を吹き飛ばし、皆を正気に引き戻す。

そうだ、ここには我らが王。どのよくな窮地もその御力で乗り越えられた偉大な王が居られる！！

そう我等は団結してこの危機に立ち向かわなくてはならない。これまでと同じだ！！我等は如何なる窮地であっても力を結集して打ち碎ってきたではないか！

「・・・ようやく落ち着いたようだな。慌てるでない。我が心から信ずるお主方がいるのだ。この程度ひとつともなる・・・」

その言葉を聞き、その信に応えてみせようと改めて誓つた時

「…………ほう。さすがに“世界”に眼をつけられるだけのことはある、か・・・。中々の霸氣と器を持つている」

招かれざる客が現れたのは・・・

俺の目の前には所謂この国の王という男が座していた。

といつても無警戒で座っている、といった訳ではない。周囲で俺を取り囲み警戒している者達もかなりの手練だ。进る魔力は先程まで

相手をしていた連中とは比べ物いとありおじがましこ。

「貴様・・・何が目的でこのよつなことをした」

王の傍に控える騎士のような者が口を開く。その瞳に映る色もし主君に危害を加えるのならば刺し違えてでも殺すといつ決意がありありと浮かんでいる。

圧倒的な力量差を感じ取っているであるはずなのに、臆することなく向かい合ってぐるその姿に顔にはおぐびには出れないが感心させられる。

しかし目的、か。

「不穏分子の駆逐を命じられた……。そんなどこだな」

その言葉に何人かが眉を顰める

「　　ゞの国の手の者だ」

「・・・ああ、ゞ」だらつなあ」

おちよぐるよつて二ヤリと笑う。それを挑発と受け取ったのか背後から怒氣と殺氣を浴びせられる。

今にも斬りかかってきそうな者達を王が手で制し、初めて口を開く。その声は隠しているようだがどこか恐怖を感じていることが俺には容易に汲みとれた。

「貴様、まさか『世界』の・・・」

なるほどこいつ等が生命創造のいつていた奴等かあ・・・となるトイイモノが見れるかな？

気が変わった。ここづらが世界に眼をつけられたことにこなった程の業・・・この眼で見わたすもんハ

そして魔眼をゆっくりと発動させる。そして先程の問い合わせに肯定するかのように微笑する。

その魔性の蒼眼に変わった瞳を見て相手の顔に少し、ほんの少しだけだが　絶望の色を確かに見せた

「さあ、『世界』の箱舟の選別を受けし者達よ。その業を俺に魅せつけてみな……。

その業がこの『世界』の領域を真に超える代物であるならば、生き残れるかもしけんぞ？」

そう言い放った後に、圧倒的な　禍々しい魔力を周囲に充満させる。

だがしかし、俺を取り囲む【勇者】達にはほんの少しの怯えすら見せない。それどころかどこか高揚した笑みをこぼすものさえいる。ああ、素晴らしいな。こいつらは本当に・・・人間らしい。

本当に勇ある人間は見ていて飽きない。どこの世界でも・・・

どれほど絶望的でも、己の力でもってその勇を示す。

どれほど差を見せつけられても、生き汚く、賢しらに生き抜く

例え死に瀕しようとも己の死に際を鮮烈に魅せつける。

そう、どれほど他の種族に劣らうとも、どれだけ種全体としては矮小な生き物としても・・・。いつもいつも最期に宿敵を葬ることが出来た勇ある【英雄】は【人間】だけだった・・・。

「では、まずは私がお相手仕うつ。彼のお伽噺で謳われる程の強者・・・。我が主君へ捧げる首級としてこれ以上のものはあるまい？」

先程の騎士が剣の柄に手を当てて俺に向き合ひ。その顔には強者と鬪つ愉悦と主君へ捧げる功績に対する興奮が見て取れた。

そしてその背後では悪魔召喚の儀を行っていた。爵位持ちでは無い・  
・?いや、違う。コレは・・・

閉鎖結界の中に閉じ込められる。そしてそこからあらわるのは悪魔たち。だが、その眼には生氣は感じられずまるで人形のようだ。

だが、しかしそのあらゆる光を写していない瞳に浮かぶもの。それはドス黒いまでに膨れ上がる殺意のみ。

こいつら魂を人工的に加工して創りだしたのか！なるほどな・・・。生命創造の創造したものでない『高位』の存在を、それも、大量に作り出す技術。そして何百もの悪魔を思うままに使役する術・・・！

眼を付けられるわけだ……

そう内心感嘆していると相手は準備が終わったようだ。その業、<sup>わざ</sup>術はこの眼に焼き付けた。

ここからは出来るなら、酒でも飲み交わしたかったものだ。今となつては叶わない願望に過ぎないが・・・。

今、心に渦巻く感傷とでもいべき郷愁を全て断ち切つて開幕の合図を揚げる」とこじょづか

「ああ、始めよつた。愛すべき“人”の性を強く身に宿す者達よ……」

閉鎖結界の中で一斉に高まる気運、戦意、敵意、殺意、決意。周りの悪魔達の虚無の視線。その全ての引き金を俺は引いた。

「ああ、始めよつか？・・・この狂宴は無礼講なんだろ？・・・」

そして 紅に染まつた右手が搔き消えた

何故ならその事実は数百年もの昔に彼らの祖先をこの世界に引き連

だが、その存在の意味を本当に知る者は少ない。

真祖の吸血鬼。まじうことなく最強種の頂点に立つ存在。

れてきたと言われる、『全ての祖』『生命の創造者』によって告げられた伝説として一部分が僅かに残っているだけだからである。

いわば子供が危険に近づかないよう、災いを避けるようになるより、枕元で唄う物語のようなものであった。

「彼の者は記憶を辿る それが安定と静寂を 生みだすと知るから

」「蜂起せよ」と恍惚あやかしものは言つ

輪廻の輪は 巡り続ける

時間は城壁じょうへきを築く

そしてあなたは 一歩一歩 踏みしめて歩く

「収穫の華は 咲いて咲いて くるりとまわる  
思い 思い に動く影と 共に  
背中合わせ」

「陽炎の先に影が伸びる それが何かはわからずには  
咲いた、咲いた 血化粧 なんだ なんだ あなたの 瞳に映る蒼  
い光」  
それが 淡い 陽の先に 在つたもの」

「無数の楽しみと 無数の世界  
男は消えてしまった物を探すだろう  
女は果実を収穫するといいだろう  
孤独は 人の中に あるの だから」

「革命は夜に一人 で涙を流すだろう  
彼の者は斜めから全体を眺める  
記憶を固定するよりも  
置いていった方がいいのかかもしれない・・・」

「彼の者は唯独り廻る 廻る

語られぬ夜を紡ぐ・・・

王国は、滅んだ。誇り高き王、精強な兵、つわもの新たな魔法、英雄の伝説で溢れた国

その歴史は終わりを告げた。だが、それだけで済まなかつた……。

この一夜だけで十五もの国が滅んだ。その事実と惨劇に入々は畏れを抱く。

そして僅かに生き残った人々は口ぐちにこう言つた

『真祖の吸血鬼』と ヤツの所業だと

だがその容貌も、目的も、

何もかもがはつきりとしたことはわからない正体不明。<sup>アンノウン</sup> ただその力を後世に伝承と共に伝えられている。その惨劇と名前を重ねられて。

真祖の吸血鬼 『ノア』

一つ名など、ただ一つしかない。その名だけでいい。それ以外に彼

を表す言葉は無いのだから。

彼を唄つた伝承歌の名前

【語りれぬ撰理】  
タナトス

渦巻く恐怖や畏怖と共に、彼の者は暫しこの世界から姿を  
消す・・・



## 第一話（後書き）

次で大体今がどの時期なのかわかるかと。お気に入りが50を超えた。本当にありがとうございます。これからもがんばります。・  
・かなりの遅筆ですが。他の作者の人更新はえー！とびっくりします。これからも精進しますのでよろしくおねがいします。  
・感想の設定を変えて制限なしにしました。

## 第三話（前書き）

独自設定が含まれておつます。『ア承ぐだせ』。

「・・・ふう

憂い気な溜息と共に、それまで忙しなく動かしていた食器の動きを止める。

朝の涼しげな空気を運ぶ風が窓から侵入。そして俺の頬を撫でるかのように駆け抜けていった。外から聞こえる鳥の囀る唄はまるで生き物の活動の開始を告げるかのようだ。

そんな穏やかな情景を思い浮かべ、最近自分が柄にも無く疲れているということを自覚する。ここ最近進展のあつた研究に打ち込みすぎてしまっていたのかも知れない。

そして目の前にある、ハーブの匂いが食欲をそそるソースをふんだんに使った肉をゆっくりと、味わいながら咀嚼をする。

「・・・つまいま

芳醇な香りのワインで喉を潤しながら、俺はようやく安定の兆しを見せて いる生活に到るまでの足跡を思い起こす・・・。

あの大虐殺から数ヶ月後。準備や向こうに渡った後の生命創造との有事の際の連絡手段などを取り決め、ついに俺は新しい世界の大地を踏みしめることができる。

俺の願いを叶えるための足掛かりとなる世界へと。

構築した大規模術式による転移。

転移は何事もなく成功した。

順調な滑り出しだ。

そう満足し、取り合えずどのよひな世界なのか見て回る。」

まずは自身の降り立つた場の近くに在る大きな町へと向かった。

だが、そこでは予想だにしない事実が俺を待ち構えていたのだった。

「

嘘、だろ?」  
「

見覚えのある、いや俺の擦り切れた記憶の中に僅かに引っかかる光景。建築物。人々の文化様式……。

それはこれまで何度かの人生や並列世界における故郷であった星。

地球

その人類の歴史の中の一 部分として書物に記されていた街に良く似ていた。

俺は古代ローマの街を田の前にしていった。

時代はカエサルから五賢帝の時代

ローマ市は『パンとサークัสの都』と書かれていた

何故ならローマ市民であるならば無料で『パン』、つまり穀物が配布され、例え財産が何一つ無いとしても何人もの家族を抱えでもしない限り食つていけたからである。

次に『サークัส』。これは剣奴や競馬、戦車競走、演劇等の娯楽を指す。分かりやすい例を述べるならコロセウムを思い浮かべると良いだろう。

五万人もの人数を収容可能な当時最大級の円形闘技場  
では様々な催し物が行われた。  
そこ

時には公開処刑の処刑場として

時には死への恐怖に立ち向かい、猛獣、あるいは人間同士で必死に戦う剣奴の様子を観客である市民が興奮しながら眺め、熱狂した

有名な話では、中に水を張つて水上模擬戦を行つた、といつ逸話が残されている程である。

そしてその費用は全て皇帝や有力貴族持ち。『サークัส』つまり“娯楽”が無料で提供される。

人間が求める欲求を満たす、ある意味では夢のような生活を送ることのできる街・・・当時の人間の欲望を可能な限り叶えた街であった。

だが、その夢のような生活を形作っていたものは周囲の属州から絞り取つた富。その全てがローマへと次々と流れ込み、市民へとまじまかれた。

ローマ市民であれば何も財産がなくとも食べるに困らず、娯楽も口で提供された。それを言いあらわしたのが・・・『パンとサーカスの都』

何故このようなことをしたのか？

それは、食や娯楽といった人間の欲する欲を満たすことによって皇帝や元老院が民衆、狭い意味では兵士を味方に付ける、支持されることがその強固な権力の基盤になるからである。

例えば暴君として有名なネロ帝。

しかし彼は民衆には非常に人気のある人物であった。彼は裕福な市民を処刑し、そして没収して得た財産を市民にばらまくことで支持を確固たるものとしたと言われている。

辺境に配備された大量の軍、絹の道などの発展した交易路に支えられた安定した供給によって保たれている平和と繁栄。

この光景は歴史の中では“良くある”繁栄の裏側、つてだけに過ぎない。

周囲の地を次々と征服し属州を得て国家の、文化の、国力の成長を  
続ける大国。

それがこの時期のローマ。今正に最盛期の超大国であつた。

そんな街の中で俺はひたすら魔法の研鑽に励むために、ここに来る前に盗んだ術でもある“認識阻害”的魔法を用いてローマの一市民として溶け込んでいた。

というのも此処が数ある並列世界の内の一であると氣付いてからは世界の把握などといった面倒が減つたこともあり、とりあえずは現在栄えている文化圏の一つであるローマの街で休暇を兼ねた研究を行うことにしたからだ。

取り合えずは戦闘　　といつよりも便利な補助魔法の修得や研鑽だ。

俺が得意な魔法の属性は火らしいが、同じような固定スキルを持っているせいか影とも中々相性がいい。

影は転移や空間を広げて倉庫にしたりとかなり使い勝手がいいからかなり重宝している（その分術式を構成する必要があるが）。

この世界の魔法といつものはどうやらこれまで俺が使用してきたものとはかなり違う、いや体系そのものが違うことが分かったのもあってかなり研究は進んでいる。

俺のこれまで持っていた魔法といつ認識はいわば組み込んだ回路に電流を流し込み装置を起動させるといつもの。

ここでいう“回路”とは術式、“電流”として役割を果たすのが魔力、そして“装置”はつまり魔力によつて術式を通り引き起こされた現象といつ図式を指し示している。

術式によって本来辿るべき“現象発生までの道筋”を強制的に組み替える。そしてその現象を引き起こすものは魔力量、精度、圧力によるといつものだった。

つまり現象を人為的に魔力・術式というものを用いて引き起こすこと。“自身の魔を中心を通し、それに因り外へ働きかける法”。それが俺の『魔法』だった。

だが、この世界においての『魔法』とはどうやらそれぞれの現象の元である属性を司る精霊に働きかけて、与えた魔力や要請書の役割を果たす術式により相応のものを発動するといつもの。

つまり“自身の魔を外の要因に働きかけ、現象を引き起こす”といつたものらしい。

要するに、俺との相性は最悪だつてこと。その為、その術に慣れることがまず時間を必要とするわけで。というわけで今は地道な下地作りの真っ最中である。

そしてその発動、いや働きかけには大体は魔法導体とこうべき触媒と始動キーという呪文が必要らしい。

触媒はもう持つている。あのペンダントだ。何の素材で造られているのかは分からぬがその強度はお墨付きだ。

俺の魔力暴走を受けても欠けるどころか罅すら入らなかつたのだから押して測るべし。

始動キーに関しては『ダ・トッド・ファンゲット』　　ドイツ語を少しもじつた、死は始まり、というある意味俺自身への自戒を促す意味のものにした。

今度死んだら次があるかどうかなど、わからないのだから・・

・・・ま、そういうことは置いといて、だ。

今は表向きの顔である役田を果たさねばならない。

「旦那、今から出港いたします」

「ああ、気をつけてな。・・・じゃないと、俺自身の身入りも少な  
くなるからな」

「ハハハ、旦那らしいや」

氣易く話を交わす俺と商人たち。周囲は船出に向けた準備で慌ただ  
しい。

俺の表向きの顔は“私的商船団”的出資者である。簡単に  
いえば交易船の船主の一人といったところだ。

この時期のローマ帝国は先に述べたように実に裕福な国であった。  
そしてこの時期は“私的商船団”といったものが登場した。

これは商人たちが長距離運航・大量の物資輸送を可能とする船を利  
用した商いである。

俺は裕福な富裕層の一人として現在紛れ込んでおり、また事実かな  
りの資産を築いた。というよりはその資産を持つた人物に成り替わ  
った、というのがより正確な表現であるが・・・。

まあ、消した男はたとえ殺されても誰も文句を言わないような男だ  
つた、とだけ言っておこう。

話を戻す。つまり、こいつのそれまで行っていたことを俺が引き継いだということだ。そしてその結果一番実入りが大きいのがコレだつたというだけの話。

俺達出資者たちは実際に現地に向かう商人たちと契約を結ぶ。

ちなみに態々離れた地にまで行って商売をする商人というのは一般的には資産があまり多くない人達である。彼らは仮に「小商人」と呼ぶことにしよう。

そんな人達に自前の船を持つだけの資金があるわけもない。そこで商品を運搬できるだけの船を持つ裕福な人たちと契約を結ぶという話になる。

出資者達は商品という形の債権を持つ。この時代の航海術や船。当

然遭難や不慮の事故による沈没など幾らでも起こりうる。そこで彼らはそのような事態によつて生じた損害は全てそれぞれが負担するという責任を持つ。

代わりに小商人たちは現地で得た収入の内から出資者へと貸付金として支払うという債務が生じる。その一般的な支払う金額はなんと一般的に利子三割という・・・なんともまあ凄まじい金額である（ただし、当たり前の話だが余りに高利だと摘発される）。

俺自身は一割五分ということで契約している。余りに下げすぎると悪目立ちする。他よりある程度安ければ安定した間隔・量の契約が結ばれるので採算もとれる。

なにより俺自身が余り商売に心を傾けていない。不自然に思われなければそれでいいのだから。

そんなので大丈夫か?という声が聞こえそうだが、全然問題無い。

この貴族は散財するのである意味でのステータス・シンボル（地位の象徴）になっている。

有名な話で言えばアビキウスという大金持ちの話がある。食道楽でさんざん浪費したあと、あと10億円相当にのぼる財産が残つていたのに、貧乏では生きている意味がないと書いて自殺した、という逸話だ。

何も珍しい話ではない。それほど退廃的な生活をこの富裕層や貴族は送っている。

だから、さほど商売に熱心では無い貴族など珍しくもなんともない、  
とこう話だ。

と、つい最近自分にとつて好ましい人間の姿を見た後だつたのも相まって、人間の毛嫌いしている一面をむざむざと見せつけられた氣分で屋敷の門の前に辿りつくと、俺の目にある光景が入った。

それは、年幾ばくかの少女。年は8～10歳だろうか？肩にかかるかかからない程度の長さの銀髪。淡いライトブルーの瞳。

顔立ちも良さそうで美少女、そう言つてもいいであろう少女。

だがしかし着ている服は擦り切れ、汚れており、またその頬も飢えのせいだろうか？瘦けていた。

そんな、これまで見たことのない子供が門の前で俯いて座っていた

私は、あやふやなそんざいだ。私はおかしなそんざいだ。

ほかの人には見えないものが見える。その人の口の内がみえて  
しまう。　　その人が知られたくないことも、ミエテシマウ・  
・

だからなのだろう。だれも私をみてくれない。だれも私のそんざい  
をみとめない。

理由は、わかる。それは　恐怖。自分の内を見透かすかのよつ  
な私という存在。

そんなの、いやなくていいでしかたない。気味が悪い。

だから私は空氣なのだ。あやふや、なのだ。いないものだと思えば、  
こわくないから。

ちうとうひひな称で呼ぶ男はまいにじゅまごにじゅ別のおんなのひとをつ  
れてくる

はまとこひな称で呼ぶ女はまいにじゅまごにじゅキレイな口をすべられ  
てよいじよである

だからなのだけれど、すぐられたのも

おまえは邪魔だ

そういう男と女は言っていた

無言で捨てられた、けど、心がそう、いってた・・・

れこしょの三日は向もできずぼーとしてた

おなかすいた

あるべきだ。だけだと、ものなんてくれない

こじは“乳の出る田柱”といつぱりもをするばしょ。そして、だれかわからない男たちがどれいにするために子供たちをつれていく

そのうちまわりの人の心の声がこわくなってきたのでそこをはなれた

また三日あてもなく、あるいは、わざよつた。なぐられた。けられた。

だけど、あるいた。あるいた。・・・あるいた。

それから五日

もつ、じじがじじがなんて、わからない

むへ、だめ。からだにしきりでない。あたま、ぜーっとある

なみだが出でくる。なんどうまれたの? なんどうわたし、こんなこと  
してゐんだひへー、わい、わいよ……

だれも、いない

だれも、こない

そう思つてしゃがんでた。ここには人なんていないつて、わかるから

だけど、そこに彼は現れた

「・・・おいおい、確かに人払いの結界張つておいたはずなんだけ  
どなあ……。おい嬢ちゃん。ここに何の用だい？」

怖い。パンでも欲しいのか？そう言つて人懐っこい笑みを浮かべる  
男の“人”。だけど

「にんげんじや、ない？」

私がそう言つと、その男の人から笑みが　きえた

無言で私をジッと見てる。私も男の人を見る。

黒い髪。そしてさつきまですいこまれそつなくらい真っ黒だった瞳

がきれーな蒼色に變つていた。

「じいのなかはけいかいときょつみ。だけど恐れはない

「いやく、ないの?」

「・・・何でおまえを恐れる必要がある」

「あなたのなかにあるの、私、“見える”もの。あるのはけいかいときょうみだけ・・・」

男の人が私のおかしこトロにさづいた

けど

恐れは、ない

恐れない

わたしを、おかしな、あやふやな、気味が悪い、

私を

「……なんで？」

男の人は私を見てどこか愉しそうに答える

「質問を質問で返すが、どうして“こわい”なんて思う?」

もつ瞳まだじまでも深い、吸い込まれそつま真っ黒な色に底つてた

「・・・知られたくない、心で思つたこと、思ひ浮かべたこと、その全部がわかる、からっ。」

「・・・本当に?」

「だつて、わかる」

「嘘だなあ・・・本当に?」“視えて”いるのか?“そこいつの本性まで?”

「・・・どうこう、意味」

「おまえはそういうことが本当に全部わかるのか？」

「どうこう」と? いみが、わからない

「おまえが観てるのは表面的思考だけ。その位で俺が驚くか。おまえは、その本質まで今は観えていない。さつきは少し観えてたがなあ」

その顔はまるで教師がいじわるな問題を出す時の様で。だけど、“

「……あなたは、いじわる」

その言葉を聞いた瞬間、大きく眼を見開いて、キヨトンとしたかと思つたら大きな声で笑いだした

「アハハハハ！！全くもつてその通りだ！俺は捻くれてていじわる  
な男だなあ！！アッハハハハハ！！！よくわかつたじやねえか！！  
！」

そういうてまた大笑いする。

どうしてかしらないけど、このいじわるな人を何でかしらないけど、  
だけど

…初めてこわくないとおもつた。

すると、何か視えた。

真っ黒な、なにもかも焼き尽くしてしまいそうな、だけど・・・神秘的な光を放つ、すぐ綺麗なモノ

私は答えがわかつたような気がした。だからわたしは気付かなかつたけど　生まれて初めて微笑つた。

「“黒い太陽”」

「うふ？」

「それが、あなた」

またキヨトンとしている。だけど、今度は大笑いせず、ニーッコリと笑つて、満点だよ～ってほめてくれるかのように私の頭をなでて

「よくできた。わっ、じゅうまいだ。食いな～むつくり、な」

そう言ってパンを私に差し出す。

でも私はあんなにおなかがすいてたのに、パンなんて気にこなりなくなつてた

あつたかいなあ

うれしいなあ

・・・ほんとうに、うれしいなあ…

そしてパンを食べた時に私は驚きを隠せなかった。

こんなこ、おいしかったんだ・・・

あたまのなかを稻妻がかけるかのよひ、そしてその轟びは全身く  
とかけめぐる。

パンを夢中で食べながら私は泣いていた。

おいしい、おいしいよ・・・

生まれて初めて、かなしいんじやない、いたいんじやない、嬉しいくて、ほんとうに嬉しいくて。

そんなときにも涙は出るんだってことを初めて知った

「……名前？」

「ああ」

私がパンを食べて、泣くのが止んで落ち着いたら突然訊かれた。もうかなりの時間が過ぎて時間は夜になっていた。空に浮かぶ真ん丸なお月さまが灯代わりとなつて私達を照らす。

そんなどこかいつもと変わらない筈の夜なんだけど、私はどこか幻想的な雰囲気を感じていた。

「・・・おぼえてない」

「マジか？」

「ううん、嘘？」

私がコテンと首を傾げると、彼は苦笑していた。

「なんで？」

「あんな男と女に付けられた名前なんていらないし、名乗らない」

私がそつまつと、また苦笑する

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

「あなたが名前を付けて」

私がそつと、彼は少し考えて

意地悪な顔になる

「じやあ、ボリ『却下』……オイ」

心を読んで却下する。だれがそんな名前を喜ぶといふのが。何か文句を言おうとしたので、睨みつけた。顔をひきつらせている。

ボソッと、「冗談もいわせねえのかよ……」とかいつてゐる。心で。みえるから無駄。

「あなたに関係がある名前がいい

私がそう言つと、「注文の多いやつだな……」とか言いながら少し考  
える。そして空を見つめる。

・・・空一面に広がる鮮やかな真っ黒いキャンバス。そこに散りば  
められた星達。幻想的な月。それらが織りなす独創的な空想図。そ  
れがどこか懐くとして 美しい。

「  
『さくや朔夜』」

「サク、ヤ?」

すると僅かに微笑んで名前の意味を言つ

「おまえ俺の」と『黒い太陽』とかいつたろ?ならこれがいいだろ。月が太陽と同じ方向にあつて見えなくなる新月の刻。だけど眼では見えないだけで、ちゃんとソコに存在する。夜を照らす月の尊さ、美しさを知らしめる」

あやふやだ、ふしぎだ。だけどそれが私だ。

「サクヤ……朔夜！」

うれしい!飛び跳ねたい位にすゞく、嬉しい……。だけど、これだけはいいたい。聞いておきたい。

「 だけど、それじゃあ“太陽”がないとダメだよね？」

そういうと、彼は少し考える。そしてその顔は先程までの人のおちよくるようなふざけた雰囲気など影も形もなく 真剣さを纏つていた。

「 そうかもしれない。だけど、その“太陽”は誰も彼も傷つける恐ろしいものかもしれないぜ？・・・それでも着いてくる気か？」

「当たり前」

「・・・少し考えりょ」

「考えるまでもない。私の始めての“せんたく”ってやつよ？大人ならそんちゅうすべきでしょ？」

「・・・はあ。もういい。後悔しても俺は知らねえ。いいな？」

「後悔なんてしない。それが私。・・・そんな気がする」

そう言つと彼はまた溜息をつく。苦笑を浮かべて。

私が「溜息つくと幸せが元げきもつよ~」って言つと、「うるせえよ」なんて言つて。

そしてしゃがんで私の手を差し出す。

私はその手をとる。その手はあつたかくて、絶対に私を裏切らないと何故か確信させるものを感じさせた。確証なんて、ないんだけどね？

「これだから人間ってやつは…飽きないんだよなあ。・・・しうがないか、時間はたっぷりある。これも何かの縁と思うしかない、か・・・」

そんなワケの分からぬことを呟く彼。そんな彼に訊いてみた

「ねえ」

「ああ？」

「人間じゃない、って言ってたけど。じゃあ何なの？」

「何だ？今さら怖くなってきたのか？」

「ふざけないで。真面目に答えてよ。」

「……はあ。そうだな。俺はな？」

そうして、私を見る彼の顔はとても涼やかで、だけどニヤリと悪戯つぽく答えた。

「悪い悪い魔法使いの吸血鬼、つてやつかねえ・・・」

・・・そう言つたときの、優しい月明かりで照らされた彼の顔は今まで見たこと無い程、不敵に笑つていて。だけど、今まで見たこと無い程妖艶で。私は思わず見惚れてしまつていた・・・

それが、私と彼の、初めての記憶

第三話（後書き）

みややくヒロインだせたぜ・・・グフッ  
長かった・・・。感想御持ちします

## 第四話（前書き）

この作品には独自設定が含まれますので、「よく承くだせ」

## 第四話

### 第四話

『食事』

それは一日一日を生きる活力であるとともに絶対に欠かしてはならない要素の一つ

これを欠かす、その行為はそれだけでその者の健康だけでなく人生の楽しみにまで影響を及ぼしてしまう。ゆえに食事というものは非常に大事な行為である。

勿論、ただ食べればいい、といつものではない。どうせなら美味しいものを楽しく食べる。真に美味なる食事はそれだけで人の心を豊かにしてくれる。満たしてくれる。

これは、人であろうと動物であろうと吸血鬼であろうと変わらない真理である。

まあなにが言いたいかとこうと

「どうせなら美味しい料理をちゃんと食べようぜ」ってことだ

「突然何よ？」

飄々と俺の鋭い視線を受け流し、心底不思議そうに問いかける。

「いやな？食事は楽しく美味しい頂こう、そういう話だ。そう、おいしい『料理』をな？」「

「いやかに微笑みながら暗喩してやる。これは何だ?」

するとこいつと、まるで華でも咲いたかのように可憐に微笑み返す小さなお姫様。だがその背には黒い炎が何やら立ち上っているかのようだ、その笑みには間違いなく羨みの色が含まれている。

ああ・・・拾つたばかりのこの純真さはドコへいったのだろうか。そう俺は内心嘆いた。一体だれに似てこいつなってしまったのだろ・・・。

「あら？ 細かいことを気にするなんて珍しいわね。それに態度私が  
気を利かせてあなたのために作つてあげたのに感謝どころか文句を  
言つの？ それにあなた自身が言った矜持に反してゐるわよ？」

『自分達が生きるために糧になつた命に感謝を忘れてはならない』  
これはあなたが言つたことよ？ “食事”に文句をつけることは許さ  
れないことだつて

「うんうん俺が教えたことをキチンと覚えてくれているよつて嬉し  
いよ。だが気を利かせた結果が“これ”か？」

満足げに鷹揚と頷いたあとニーッ口リと笑い、俺が指し示す先にある  
もの。それは皿にのつた暗黒物質。だくまついや、『お約束』だった。

それを指摘され思わずビクリとする　朔夜。先程までの会話にあつた余裕はどこかへ行ってしまったようだ。目線を横に泳がせ、その頬にはスッと朱が差していた。

「　いやはや、おまえが天才なのは承知してはいたが・・・いつの間に鍊金術なんて覚えたんだ？この俺でさえ、まさかただの卵がこんな兵器になるなんて考えもしなかつたぜ」

フウ、と『やすが朔夜・・・いつも俺の予想の斜め上を爆走するだけある』と感嘆の溜息を吐く。

「いや、それせひどい」

ふるふると朔夜は身体を震わせる。成程成程、改めて自身の暗黒物質<sup>だーくま</sup>の出来栄えに感動で身を震わせているのか。ならば俺も講評しなければならん。もう一度これを見た感想を述べねば。

そして俺は万感の意を込めて

——ヤリと

「ツ！ノアの、バカア――――――！」

そして俺の目の前は真っ暗になった。だーくまたーで。

「……取り合えず、番犬の餌やりに行ってこい……」

朔夜を拾つて5年。俺は朔夜に従者としての様々な高度な教育を施してきた。それは学問から護身術、武術、マナーや常識までありとあらゆる分野に渡る。これはコイツの将来を考えた上で必要なことだと認めたためである。

ローマは有能であれば奴隸にだつて子供の家庭教師を任せる国。従者自体別に珍しいことではない。あくまで表向きは朔夜は“従者見習い”であるが。

それに能力が無くて困る」とはあっても有ればどうあえず極端に損をすることはない。

・・・それにどいつもせ拾つたのだったらキッチンと育ててやりたい、といふ気持ちもあつたしな。

そんな考えの元、研究の合間や表の仕事の合間、時には影の分身まで使ってあらゆることを教え込んできた。朔夜の持つ異能の力である、対象の心や本質を見ることが出来る能力【さとり】とでもいつておこりうか？その制御は特に。

可能な限り本人の意思で自在に使役出来るようだ。

この力は異端ゆえに朔夜自身までも深く傷つける。・・・そして、この力を悪用することを画策する輩が現れないとも限らない。いや、現れるに違い無い。それが遅いか早いかは分からないがな。

ゆえに、研ぎ澄ます。鋭く、鋭く。真に研ぎ澄まされた刃物として。朔夜自身がその力に見合つようになつた時、その時は。　その刃はどんな時にも朔夜の窮地を切り開く最強の剣となるに違いない。

十歳といつ年齢は人間の中の動きやら知識やらの【習得】に関しては最盛期といえる。そして心身の成長・形成におけるかなり重要な時期である。

そのため、俺は無理の無いようになにかなり気を使っていた（最近では女の矜持？とやらを顔を赤くしてまくしたてるようになってきたが。反抗期か？）

心身ともに健やかに成長していくよ。

だが、その結果わかつたことがある。

それは朔夜が普通の子供とは比べ物にならないような天<sup>ト</sup>の才を持つ子供であるということだつた。

正直驚いた。学問はいわずもがな、精々身体が丈夫になればいい程度の気持ちで教えていた護身術、武術は特にその才能を顕著に表わし、あつという間に修得してしまつた。

そのあらゆる世界を巡ってきた俺からみても類稀な武の才能。そのなかでも『剣などの刃物を用いる術』に関する才能は他を隔絶する片鱗さえ感じさせる。

まあ、どれもいまだ蓄に過ぎないのだが。何にせよ自分の好きなように生きる上で才能が溢れているといつのは実に喜ばしい。

まだまだ土台を作る時期であるし、現状は自身の思い描いている完成形には程遠い。しかし時間をしっかりとければ必ずその領域に到る。いや、もしかしたらそれすらも超えて辿りついてしまうかもれない。

。 全てを理不尽なまでに其の力で羅ぎ払つ『極み』にまで・・・

俺のようなどじれも努力してよひやく一流になれる、といった者からしてみれば羨ましいことだ。

・・・料理については、これからに期待といったところだろう。これは近道などない、正に日々の修練と経験がモノを言つものだ。

これまでとんとん拍子で来たのだから努力して上達する楽しさがより感じられる“苦手”なものが見つかってよかつた。

ちなみにレシピや作り方は“一切”朔夜に教えていない。どの料理もだ。これまで厨房にも絶対に立ち入らせなかつた。

なぜなら料理というものは食べる人への思いやりや新しい発想を限られた材料や器具で生みだす、他者の料理から技術を盗む等実に様々な事に通じて役立つことを教えてくれる一つの『勉学』だ。決して俺が火事の発生を本氣で心配していたからではない。

それで今回初めてつくった料理は大失敗、というわけだ。

これを糧に朔夜はまた自主的に多くのことを学んでいくだろう。その楽しさ、素晴らしい自然と身につけていく。

俺もあれだけ唆して発破をかけたから大丈夫だろう。

そしてこれからもいつやつて影ながら見守ってやれば、失敗したものを俺の教え込んだことをバカ正直に順守して食つて腹を壊すなんてことも起こらないだろう。

あとま

「 もう、頂きますかねえ・・・」

今年で十五を数える程までになつたお姫様が作つた初めての料理だ。捨てるなんてことは流石に出来ん。

サクッ

食器に触れた時に出た音が苦笑を誘う。恐らく卵焼きを作ろうとしたのだろうが、どれくらいの火加減が適切かわからずに失敗したのだろう。あわてて止めようとした様子が眼に浮かぶ。

中のある程度無事だった部分を口に運ぶ。うん、味がなんともいえない。恐らく、ダシなどを加えることはしていない。・・・正に純粹な『卵焼き』だ。

「 まことに

だが、その料理が如何に一生懸命に四苦八苦しているかがわかる部分が見つかるにつれ、別の意味で腹が膨れる。

「まったく、本当に不味いな・・・」

そして胸に久しく感じたことの無かつた温かい感情がここ最近よく沸き起ることに苦笑する。

「だが、悪くはないな。こんな『料理』も……悪くない」

そう呟いた時の彼は、苦笑ではなく穏やかな笑みを浮かべていたといふ。

五年

言葉にすればたったこれだけの言葉。だがしかし想起する想いは果てしない。

あの娘をどうして拾つたのか・・・それは自分でも分からない。

能力の希少さに惹かれたのか

その飢えた哀れな様子に同情してか

・・・持った力に振り回され全てを拒絶したかのよう  
なあの瞳に過去を垣間見たのか

今でもはつきりとしたことは自分でも分からない。

ただ言えることは

“やつしたくなつたから”

これしかない。どんな美麗文句を連ねるよりも、その方がしつくりくる。何故なら自分は己の思つままに、自身の望むままに生きる存在であると直覚しているからだ。

俺の行動に大層な理由など存在しない。大義など必要ない。ただ貴くに足る“想い”があればいい。

心底殺してやりたいと思えば、例えそれがこの世を統べる程の超然たる力を持つた神であろうと、世界を手中に収める力を有する魔王であろうと殺し

心底氣に入った存在ならば、全世界から悪と断ぜられる存在であろうとも救い

心底愛した存在ならば、例え自身を憎悪する存在であろうと守り通す

だからこそ、“力”が必要不可欠・・・例えそれが互いの亀裂を生みだすとしても。

そう、自分は何にも縛られない。故に何者にも屈しない。それが俺の本質なのだから。

こんな傍若無人な生き方は当然敵も多く生む。かつてはそれで厄介なことに巻き込まれたもある。心から信頼した者に裏切られたこともあれば、蛇蝎のごとく憎まれたこともある。

だが、そのことに一 片の後悔もない。正しいか正しくないかではな

く、“俺”らしいか“俺”らしくないか。そこが俺にとつて一番大切なことなのだ。

今回も同じだ。

そしてその一番大切なことを今も貫けているかどうかは、この心の内にある温もりが何よりの証明であるのだから・・・

・・・そして、その温かい『料理』の作者であるお姫様は壁一枚またいだ隣の厨房で能力を使って覗いており。

先程の感情任せの行動をどうやってノアに謝ろうかと右往左往していた（餌やりには行った。何だかんだいっても律儀である）そのお姫様は顔をトマトのよつに真っ赤にしてその心を聞いていたのだった・・・

「顔が、熱い・・・」

だけどその顔をふにやつと崩し

「全く、 じょうがない男。 本当に、 ノアは本当に素直じゃない……」

だからこそ、 その優しい心の声が、 何よりも・・・ 温かい

父のよう、 兄のよう。 口では絶対に言わないけど、 その奥底に確かに存在するのは自分を見守ってくれている、 愛してくれている唯一の存在。

私は自分が壊れていることを自覚している。だけど、憧れていたことも自覚した。この五年間で。

あなたのイジワルな、だけじゃその根っこにじっかり根付いてる優しさ、温かさのおかげで

私は本当の“家族”的存在に飢えていたんだ。どこまでも無遠慮に、だけど損得関係なしに私に向き合ってくれる、見てくれる存在に・・・。

彼が人間じやないってことも知つていて。彼が今まで理不尽な理由でたくさんの人間を殺してきたことも直接聞いた。生きるための力を身に付けたならいつでも此処から出て行つてもかまわない。そう彼は言った。

だけど、そんなことはどうでもいい。そんなことが何だというのか

彼が何であろうと、彼が何をしようと私は彼を拒絶はしない。全てを容認するわけでも、許容するわけでもない。ただただ無遠慮に彼と真正面からぶつかって、手を取り合つて生きていくだけ

だって家族なんだから。私が心の奥底から欲していた存在を手放すことなんて絶対にしない。私を愛してくれた。その温かさを貴方は教えてくれた。だからこそ私は誓つたのだ。

何があのとも私は最後まで貴方の味方でありたい

これは私があの『悪い吸血鬼』さんから貰つた最初のキモチ。

今まで憧れて手を伸ばして“眺める”ことしかできなかつた”モノ

そしてきっと、どんなモノよりも尊く大切な存在なんだろう

だからこそ

「・・・次こそ“つまいー”って言わせてみせるーー。」

今度はおいしく作ってみせる。私の田舎の感謝を表すよいひ。

あの捻くれてて、意地悪で、性根の腐った、外道の、だけ  
ど優しい吸血鬼に素直に礼を言わせてみたいから。

そして私も礼を言いたいから。最近は私もアイツに似てしまつたの  
か、素直に感謝の言葉なんて恥ずかしくて滅多に口に出せない。

だからこそ私は行動でノアに示す。いつものよひごと。私が彼に向き  
合つに足る存在と示すために。

だけど

“ありがとう”

・・・その“家族”への感謝の言葉だけは、何の意地も張らずに言えるようになりたい。

カツカツカツ・・・

不気味に感じる程の静寂の中、響き渡るのは靴の音。まるでこの世にはその音を発するものしか存在しないかのようだ。そう此処には彼しか存在しないように・・・。

そんなつまらない事を考えてしまつ程に周囲には人の気配は感じられない。それどころか生き物の気配すら・・・何一つとして存在し

ない。

ここは彼らの間では『礼拝堂』と呼ばれる聖地の一つ。そこに集まるは“聖人”と呼ばれている者達。彼等が信仰を捧げ、崇拜している者達。彼ら“聖人”達は跋扈する数々の人外の妖を滅してきた存在である。

事実、各地に存在する表向きで一般の信者達に司教と呼ばれている者達は裏の仕事を支援する役目を担つた飾りにしか過ぎない。

とは言つても民心や神を信じる者達を導くこともまた務め。彼らもまた立派な役目になつてはいるのだが、裏に関することは『執行者』と呼ばれる悪魔狩りをする者達の為の情報を得るために支援を行つに過ぎない。

彼らの治める街に発生した悪魔を狩ることは彼ら自身の利益を守ることに繋がるため、両者の協力関係は強固であり、かなりの部分にまで融通を利かせてはいるが・・・。

実質的に教団のトップに立っているのはこの“聖人”の面々、というものは設立当初から変わらない。

幾千もの悪魔を屠ってきたその実力は一騎当十。

その厚い信仰心と、代々“聖人”へ至つた者へと受け継がれる二つの名を体現する戦闘能力は爵位持ちの悪魔にすら匹敵し、あらゆる災厄を未然に防いでいた。そしてある種の“気狂い”として悪魔達に恐れられる化物達でもある。

それら“気狂い”達の元へ“執行者”的は直々に神託を受け取ることで此処へとやってきた。じきに与えられるであろう重要な使命を果たすために。

短く切りそろえた金髪。身に纏う装束は無駄な装飾を省いた実用性を追求した黒きローブ。そのローブに覆い隠されているのは過去乗り越えてきた死闘の歴史。そしてそれに比例するかのように絞り込まれた実戦仕込みの肉体。

冷厳とした雰囲気を纏いつつも、実に洗練された動作で歩みを進める。

「只今参りました」

C状に囲まれた円卓の中央へと立ち、彼がそう淡々と告げると突如として先程まではだれもいなかつた筈であつた空席へと“聖人”達が現れる。

その研磨された針のように鋭く、それでいて泰然とした山のような雰囲気からは彼らの持つ力の凄まじさを感じさせる。

そして厳かに神託を告げる。

「神託を、告げよう……。『不死殺し』の一いつ名を受け継ぎし執行者ヴァードレッドよ。新世界からローマの都へと舞い降りし人外の者を滅せよ……。予言者が受け取った神託。『世界の破滅』を願いし不死の真祖。この大命を果たした時、お主は神に認められし“聖人”が一人と認められよ!……」

そして一人の“聖人”が印を押し、ある書簡を卓の上に差し出す。

そなたに神の加護があらんことを

その言葉に合ひせむかのよひ一礼して拝命書を受け取る。

そこに書かれていたのは

“執行者五名及びそれに追随する兵士を使役する権限を下さる。また執行者には其々の全神器の使用許可を下さる。この任務の達成は全てにおいて優先されるべきものとする”

彼はその文を一瞥し懐へと入れ、踵を返して歩き出す。

いまだ執行者の身であるにも関わらず、一つ名を『えりし男』  
歴代最強と謳われる『不死殺し』が今、動き出した・・・

## 第四話（後書き）

「ううう神鳴流のような退魔を生業とした化け物たちは居ると思うんです、魔法使い以外に。特に昔のある程度神祕が溢れているような時代ならそれこそ腕利きが居るはず！」こういう奴らと主人公組とのバグバグ。チートバグ。チートがこの作品で書きたいことの一つです。ようやく出せたよ・・・そしてほのぼのも実は書きたかったんだ。

シリアル？色が強いんだよ。この小説・・・ヒロインのおかげでだいぶ日常シーンが増える予定だけれど。毎回毎回書くたびに自分の力不足を実感します……；そんな穴だらけの小説だけど、これからもよろしくお願ひしますね！

12／13 執行者の名前変更。クルト・ヴァーデレッド（第一候補へ）。いや紛らわしいと思ったので。直接何の関係が無くてもこれは紛らわしい。もし混乱した人がいたらすみませんでした（^\_^；

## 第五話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。『アホださい』。

## 第五話

第五話

今日も平穏平凡な一日が過ぎ去りうつとしていた

そして今俺は、ほのかな心落ち着かせる匂いで鼻腔をくすぐるハーブティーを口にしている。

独特的の芳香と共に感じられる茶の味をじっくりと味わう。

最近の朔夜は料理と共に従者としての訓練も兼ねた、茶を入れる作業に夢中だ。

それはもうさつきから俺の様子を興味なさげな風を装つてチラチラと覗つている（俺はそれに気付いていない振りをしている）。

ふう、と吐息を洩らす。そしてツイツと僅かに緊張した様子の朔夜に眼を向け、茶の感想を述べる。

「ふむ・・・、茶の入れ方はマシになつたな。料理よりは将来に期待が持てそうだ」

口の端を釣り上げて、いや、こいやかに、せうじやかに朔夜を称  
贊する言葉を精一杯紡ぐ。

すると、朔夜も（現在は従者モード）顔をほころばせ

「それは光榮です。こつか『この茶がなければ生きていけない』と  
言わせてみせるから覚悟しようとや、主様」

やつ、「こつと花のような可憐な笑顔で小首を傾げる。

うむ。拾つた当初から将来有望だとは思つていたが美しい淑女に順

調に成長していくようで何よりだ。

現在は美少女から美女へと移り変わる中間辺りの容姿だが、どれ程の魅力的な女へと将来成長するか今から楽しみだ。

「ほほう？ それはそれは有り難いことだ。

この吸血鬼が騒碌する前にその領域に到れることを切に願う。  
なんせハーブティーひとつを入れるのに何十分もかけたお前だ。  
気長に待つことにするよ」

「既に頭のどこかがイカれてらつしゃる主様です。

そんな小さなことほ気にするだけ無駄、といつものですよ？

それに耄碌するなら財産全部私に引き渡してからにしてください。

それなら一向に構いません」

ピジッ

「そうか。まつたく、お前は出合つたじろから、まつたく！ 変わ  
つていなじょうだな？」

安心した。これで俺も益々頑張れるとこつたものよ……。

その微笑ましいまでの手際の悪さも含めて、生温かく、末永く見守  
つてこくこととしよつ」

ミツヤ

「せつと死んでくれれば私が死に水を手際よく取つてあげますよ。だから安心して死んでください なんなら今からでも構いませんよ？」

それとも私自らあの世へとお送り致しましょうか？ うん、そうしましょー！」

名案！ といった風に眼をキラキラ輝かせ、手をパンツ！と合わせる朔夜。それにこやかに生温いハーブティー片手に慈愛溢れる笑みを返す俺。

そんなどこにでもある穏やかな日常風景を繰り広げていると、朔夜（通常モード）が何か思いだしたかのように「あっ」と声を上げる。

「どうした？」

「いや、駄犬に餌をやる時間だったことすっかり忘れてた」

成程。ハーブティーという強敵の前にすっかり忘れていたのか。

朔夜を拾つてから直ぐに万が一に備えて番犬を飼つており、その餌やはり朔夜の仕事でもある。・・・まあ結界があるからあまり意味は無いのだが。

しかし役割を果たすことが無い筈であるのにこの犬は良く吠える。腹が減つたら。

ゆえに朔夜はこの番犬のことを「駄犬」と呼んでいる。そして最早

これが知識と化してしまつてこる。哀れなり。

「まつたぐ……。何かに集中して他の仕事を忘れるとはまだまだだな」

「そうね。何かに集中して船主の仕事をほつたらかしきるような誰かさんに似たのかしら?」

お互に苦笑と共に皮肉を交える。そこにあるのは穏やかな気持ちだけ。これも最早日常の一風景と化してこる。

「なら仕方ないな……。

早く餌やつて」

「ええ仕方ないわね。

その間に」飯作つとして

互いに笑いあう。そして踵を返して外で腹を空かせている番犬に餌をやるため朔夜は部屋から出て行つた。

そして俺も今晚の糧を調理するために厨房へと向かうのだった。

今日は珍しくあの犬が吠えないな、などと思いながら

最近は朔夜もそれなりに料理は出来るようになつてきているが、  
まだまだ手の込んだものは難しいよつで。

持つてゐる自分の中のレシピも少ないため現在は俺の料理から盗む  
ことを目標にしていいる。こじりしき。

そこで朝と夜は俺。昼は朔夜が担当するのが俺達の間の暗黙の了解  
となつていた。

・・・それにしても、今日は本当に穏やかな日だ。夕暮れ時を過ぎ、  
それまで晴れ渡っていた天空は夜の帳に包まれようとしている。

そして空に浮かぶ星は燐然と輝き、これが未来の空ではあんにも

見えづらくなるのか・・・

そんなどこか哀愁にも似た念を抱いてしまつ程に、この天の下で生きる我々へその美しさを自己主張していた。

明日も晴れるといいんだが……

そんな吸血鬼にあるまじきことを考えながら歩いていると歯房へと辿りついた。

早速手を洗い、手際良く下準備をしていく。

やじてふと思ひ。

自分はこれまでに無い程穏やかな日常をここ最近送ることが出来ている。そしてその穏やかさはやはり何者にも代えがたい幸福であるところとも改めて実感出来ている。

しかし

お前は本当に血肉のしがらみから逃れられるとでも思つているのか？

平穀は何物にも代えがたい幸福だ。だがしかしその平穀こそが、お前を鈍らせる

そしてその心に付いた“錆”はいつもお前の大変なモノを奪つてきただろ？……？

……しかし、俺の中にある経験と勘が訴えかけてきている不安と焦燥感は、その幸福を感じれば感じる程に大きくなつていいく。自身の娘とも妹でも言つべき存在の幸福を願う度に胸の奥で警鐘を鳴らす。

やはり俺自身に呪いの“じとく纏わいつく”この“楔”を断ち切らない限りは・・・

俺が思考の渦に捕らわれ始めていた時、ふと背後に誰かの気配を感じて振り向くと

「あ・・・何やつてんの?」

「・・・朔夜?」

そこには犬の餌やりを終えて帰ってきた朔夜が居た。

その顔は不機嫌そうに歪み、壁によりかかつてこぢらを見ている。俺が眼を見開いて驚くと、朔夜はかぶりを振つて溜息をつき、俺の手元を指さす。

「手」

「ああ？」

「手、止まつてるよ？」

確かに思考に夢中になつて作業が止まつていた。

「まったく・・・私はお腹空いたんだからやつをとつてよね。私の目の前でバクバクと食事を始めるんだから。あの犬・・・」

そつ悪態をつく。それに対し皮肉を返してやることとする。

「まあ仕方ないだろ。  
何せ、かなりの時間餌をお預けされていたようなもんだからな？誰かさんのせいだ」

「うひさいわねえ……とにかく! いからむわせとひかるー。」

「ハイハイ」

そんな会話を交わして調理を再開する。しかし、なんとまあ・・・。

「・・・ところで、番犬はどうだったよ?」

「・・・何が?」

「いや、普段は餌の時間がきたら喚くじゃないか？」

今日はやたらと『静か』だったからな。何かあつたんじゃないかと思つただけだ

一瞬、キヨトンとした顔になる。そして何かを思い出したかのように手をポンと打ち

「ああ、それ？」

私が行くまであの犬なら寝てたわよ？大方待ちくたびれて眠っちゃつたんじゃないの？」

「・・・ふむ、成程な？まあいいや。ちょっと気になつただけだ  
しな。

取り合えず邪魔だから出でけ。そして大人しく待つてお

大きく溜息をつき「ハイハイ、分かりましたー」などと言つて出でいく後ろ姿をジッと見送る。

そして先程、柄にも無く考え方恥り、その結果氣を緩め過ぎていた自分の醜態を思い出す。

何て言うか俺も鈍つてきているな。いくら考えに恥つていたとはいえた人にここまで近づかれるまで気付かないとは。

「早くしろ～」と急かされる。それに「うるせー。」とながめなり  
な返事をしながら、作業の手を忙しく動かす。

これは俺の錆落としも兼ねて今度からの鍛錬は厳しくせねばならん  
と鍛錬メニューを考えながら・・・。

だが、その時、ノアから顔を隠すよつこ“朔夜”の顔を  
したモノが歪んだ笑みを密かに浮かべていた。

そう……“獲物”が何時隙をみせるのか。

いつ来るか？

いつだらう？

いつ食べられるのだらう？

いつ味わえるのだらう？……その喉笛を私の眼前に晒すのは

そんな美味そうな獲物を“しょくじ食い散らかす”瞬間を思い浮かべ、楽し  
そうに笑みを零していた。

カラカラ、カラカラ……

テーブルの上にあるグラスの中身を静かにかき混ぜる彼女が浮かべた笑みは、正に仕留めた獲物をいたぶる猫そのものだった……。



## 第五話（後書き）

ついにその手が伸び始めました・・・。今回は難産でした。

作者の励みになりますので感想などがございましたら是非頂ければと思います。

今後とも拙作をよろしくお願いします。

## 第六話（前書き）

今年もよろしくお願ひします

## 第六話

### 第六話

『闇』

古来より人の恐れを搔き立て、同時に人へ安らぎを与えてきた。しかし、陰陽一体。光があるところに闇はある。全てを照らしだすものが光だとしたら、全てを隠しだすのが闇とでも言えぱいいのだろうか？

そして、ソレが今現在、私を阻む障害となっていた

安らぎなんてものをどこかへ投げ捨てた  
一ティーの舞台として

端の無いダンスパー

「

成程、手強いな

足のバネを最大限に生かし、しかし最少の動きで回避するーー！

飛び退く。その危険地帯から。

「ハア、ハア・・・・？！チツ！ーー！」

「スムーズ！」

私の周囲と視界を覆い尽くす闇の世界。手を伸ばしたら先が見えなくなるほどにその闇の世界は深い。

そして、そのどこから聞こえてくる、今正に私を襲つてゐる鋭い斬撃とは対照的な無感情に響いてくる何かを吟味するかのような声。

その声の主 私をこんなところへ引きずり込んだ人物へと皮肉を込めた嘲笑を投げかける。

「まつたく……！淑女をこんな“暗がり”へ強引に連れ込むなんて  
どこからやつてきた変質者なのかしら……。」

鋭く、速く

一撃一撃を僅かに聞こえる風切り音を頼りに、短刀で弾いていく。

終わりの見えてこない舞踏<sup>ワルツ</sup>を強いる相手に歯ぎしりしながら、しかし少しでも情報を引き出すために話かける。

本当に突然だった。餌をやりに行つた私の眼に入った光景は血まみ

れになつた駄犬の姿。そして何やら怪しげな、黒いローブを身に纏う二人の侵入者の姿。

襲撃！　そう思つた時には既に遅かつた。

一人がナイフをこちらへ顔も向けずに投擲。

私が反応しソレを身に着けていた護身用の短剣で弾いた時に、一瞬で背後へ転移したもう一人が、あらかじめ隠蔽して仕掛けておいたのであるう術式を発動させた。

その一連の動作には一瞬の迷いが無く、まるで息をするかのように行われた。

さらにはノアの張つた厳重な結界をいとも簡単に掻い潜り、そして

私へと完璧な奇襲を仕掛けたその気配隠行の鍛度

この事から感じられたことはこの一人の戦闘者としての格は・・・  
間違いなく手練そのものであった。

そしてそのまま恐らく最初から準備をしていたのであるが、術者の得意とするテリトリーとして構成された閉鎖空間へと術者ごと閉じ込められ、今に至る。

そして

先程から私を襲う、とてもなく殺氣を押し殺した攻撃は正に熟練者のそれそのもの。ノアとの訓練に置ける『理想的な暗殺者』の仮想敵のレベルにほぼ等しい。

それはつまり最低でもこの敵が一流の手鍊であることを示している。それも、暗殺という“本業”だけでなく、戦闘慣れした一流の戦闘者。

無音で、しかし殺氣の残りカスに至るまで残さず、自らの所在に至る痕跡を覆い隠す。闇を利用した己の五感すらも制限した状態での戦闘術<sup>スタイル</sup>。

厄介だ。これでは『さとり』が使えない。

私の固有スキルとでも言つべき『さとり』は読む対象を何らかの形で強く認識できなければ発動出来ない。故にこの場ではコレは有効に活用することは難しい。

「……別に、お前に対して恨みがあるわけではない。  
ただ、邪魔なだけだ……あの吸血鬼を葬るのに、な」

「 ッツ！－チツ！－！」

その悠長な口調とは裏腹に、その私の命を刈り取らんとする死神の  
如き一閃は鋭さを増していく。

それに加えて時間差で襲いかかる『魔法の射手』が実にいやらしい。  
あらゆる多様性、連射性がその長所。時間差で押し寄せるこの攻撃  
が巧妙に相手の攻撃後の痕跡をかき消していく……。

必死に歯を食いしばつて耐えていく。金属を打ち鳴らす音が連續して続していく

見えない。だがそれが何だといつのか。

眼で捉えられずとも、音を捉える耳がある。痕跡を嗅ぎ取る鼻がある。血潮を感じる舌がある。変化をくみ取る肌がある。そしてこれまでの鍛錬で研ぎ澄まされてきた勘と経験がそれらを補完する。

私自身の戦闘術において『やとつ』はあくまで戦闘補助に過ぎない。  
スタイル

この身に刻まれた基本は常に五感、六感を駆使すること。冷静に対処して堅守する。まだ“聞かなければならない”ことがあるために。

「ここのままでお前たちが侵入したことなど直ぐに彼に悟られるわよ？愚かな侵入者さん？いや復讐者の方がお好み？」

「私はどちらでもないよ？麗しいお嬢さん？」

そして貴方をここで殺すことで何の支障も生じない。

何せ“お前”は向こうにも居るのだからな？いや向かつたというべきか……

それに私は彼の吸血鬼には何の恨みも無い。

ただ、殺せと我等の神が告げし神託を果たさんとしているだけなのだから……」

今此処に居る敵は一人。もう一人は何らかの方法で私に化けている

まだ、まだだ。抑える。まだ、早い

「成程。それじゃあなた達は狂信者と呼んだ方がいいのかもね？あなたの思い浮かべる“神”とやらを盲信し、理性を溝に捨てた愚か者といったところ？」

我慢、我慢、我慢、我慢

「ふむ……。狂信者か。それは違う。何故なら我等はただ悪魔を滅するのみ。

命ぜられし神託を果たすために。  
信ずる教義の元、我等が大いなる神が愛した人を守るために」

気を練り上げる

「そしてその神託の前では我等」ときの理性などひとして重要な要素ではないのだよ……。我等はただ神の御心のままに行つのみ。  
それが我等

・・・ガマン、ガマン、ガマン、ガマン、ガマン、ガマン、ガマン、  
ガマン、ガマン、ガマン・・・

「 “異端審問” の “執行者” の務めなのだから」

スイッチを、入れた

殺す

欲しい情報は手に入れた。あとは殺す

刃と刃が擦れ合う瞬間に、練り上げた気を周囲に顯現する。

解き放たれた気が恐ろしい程の密度を持つて周囲に拡散していく。  
そして男に触れたときこそが

私と獲物の間に有つた仮初の優位性を覆す時である

「なツツ……？」

男は驚愕する。その余りの氣の発顎の鍊度の高さに。その、これまでに無い運用の仕方に。

だが、何よりも驚愕したこと、それは

「 腕は一本頂くね 」

その剣閃の迅さ、鋭さが常軌を逸していたこと

たかが短剣の間合い

だが、その間合い内だと認識された瞬間、腕にまるで焼き鎧を押し  
つけられたかのような“熱”が奔った

そして先程までの繋がりはなく、頼りなく左肩から先がポロリと落  
ちる。

気付いたら、その場を離れていた

もし後ろへ瞬間に飛んでいなかつたら、返す刃で首筋を切り裂かれて絶命していたに違いない

男が腕を失った痛みと溢れ出て来る鮮血を抑え、またその斬撃に戦慄を感じていた時、抑えるような忍び笑いが聞こえてきた

其れは実に楽しげで

「

ああ、愚かね」

実際に愉悦に満ちていて

「たかが“悪魔”と私達と一緒にするなんて、本当に救えない……」

実際に異質で。だがその豹変した歪んだ笑みを浮かべる顔が、不思議な事にこれ以上無いほど

「身の程をわきまえろ、愚者。  
貴様等が寄り添う神が如何に残酷な存在か知るが良い」

美しい戦姫が其処にいた

それは私がノアに拾われて、私の才を見出して“戦闘の教育”（と  
いう名の英才教育）を受けていた時の話。

「  
技？」

怪訝そうに声を上げたノアに私は「クリと頷く。ノアとの戦闘訓練は厳しい。時には“魔法世界”とかいうところに行きドラゴンを狩つたり、時には極地でのサバイバル訓練を施されたり、あるいは悪魔を召喚してソレと本気の殺し合いをしたこともある。

だが、それは別にいい。これらの苦行のような訓練はしっかりと私の血肉となり、私の糧となっている。・・・料理は別の話だ。食えれば何でもいいの。

しかし、私はノアには基礎と呼ぶべきものしか教えられていない。刃物や氣、魔力の制御だったり、基本的な刀剣類の使い方などだったり。

しかし、ノア自身の使っている技と呼べるのは何一つ教導されたことはない。

そう思つて問い合わせたのだが、返ってきた答えは思いもよらないものだった

「んなもんいらねえよ、お前には」

「え？」

私が意味が分からぬといふ顔をすると、彼はやれやれといった風に僅かに肩をすくめた。

そしてノア先生の楽しい講義の始まりだ

「いいか？はつきり言つてお前の剣、というか“刃物を扱う才能”は異常だ。そこの天才是なんでものとは比べ物にならないくらいに次元が違う。最早バグといつても差し支えない位だ・・・そこは分かるな？」

ノアがそう言つならそうなのだろう。私は他人と比べたことなど無

いから分からぬいが。

取り合えず頷く。

「そして何かしらの流派における技とは“型”だ・・・つまり何かしらの基礎動作の延長線上のものに過ぎない。つまり“基礎”“基本”がその土台だってことも分かるよな?だからいや、もう一度言おう。

『おまえに何かの特殊な型など必要ない』

おまえの基礎動作や能力は最早全てが必殺と呼べる域に達しそうとしている」

そして私の周囲に障壁を張る

「それを斬つてみろ」

何の脈絡もなく張られたソレに怪訝な顔をしたもの。何の氣無しにナイフで切り捨てる。

私を覆うように半球状に展開されていたソレは力パリとずれ落ちる。

それは私の日課でもある『障壁を斬る』といつ修練。最初はあまりに硬く、また氣も魔力も弾くという“術式”の組み込まれた強固な結界で、脱出するのに一日を費やしたこともあった。

そりて当時は田の前に食事を置かれて、突破できなければソレにありつけないといふこともあって必死になつたものだ。

今では訓練の始めと終わりの体験がなつていて、

すんなりと斬り捨てた私を見てノアは満足げに笑う。

「この障壁は鋼鉄以上の硬度と氣や魔力を弾く」との両立を可能と

した結界だ。

あまりに維持に力を消費するので常時展開にあまり向かないが、それはひとまず置いておこう。今注目すべきことはヤジマじゃない

そして切り捨てられた結界の表面を指で撫でる。

「実に見事な斬撃だ。しかし、これを氣も魔力も用いずに最

小限の腕を振る力のみで為す、といつのは果たして何人できる」と  
やら・・・

それも“破壊”ではなく“斬る”といつといふにお前の異常性が垣  
間見える」

その艶やかな笑みは反則だ、と私は呟く。口には出さないが。・・・  
表情には出来るだけださない。

「毎回、お前の相手をする度に俺は気が付く。お前はどうか知らんが  
な……。  
覚えているだ?

最初は何の脅威にも感じなかつた一振り一振りに次第に確固とした“筋”が付いていつた瞬間を。

打ちあう度に響く鉄の音が段々と鋭く、熱いものに変わつていった。そして一撃毎に重みが増していく。“全ての力を一点に集中する”という真髓をお前はたつた一回の模擬戦で自然と身に付けた。

防御が硬く、何一つ攻撃が通らずに敗北した後の一週間、おまえはひたすら密かに打ち込みを始めた。最初はその意図が掴めなかつたが……一週間後、おまえは防御どころか障壁すらも“すり抜ける”一撃を放つた。

そして、その一撃すらも避けて見せれば、次には『さとり』を制御してなにやら訓練を始めた。そして一力用しておまえが防御」と斬り捨ててきた時は流石に俺も焦つたぞ？

そして今では氣や魔力に頼らざるとも結界という“異常”を斬り捨てられる程だ……

そして私にその眼を向ける。詠つよつに懐古して。そしてはつきりとその口元は笑みを浮かべていた。おかしくておかしくて仕方が無いといった感じに。

「刀剣を扱う上で全ての根本にある“斬る”という基礎であり奥

義をお前は「」の試行錯誤のみで極められる可能性がある。

そつ、もはやお前の斬撃は技で收まるものではない。……“業”的領域だよ」

そして、その“業”に至る過程でお前が身に付けたものは最早他者からみれば基礎の域を超えた“型”であるのだから、と続けた

故に

「お前は本来極めるといふことが不可能な筈の“基本を極めること”を曰指せばいい。

それこそがお前の剣になる。お前はあれこれ他に手を出す必要はない。

試行錯誤を重ね“業”へと昇華しろ。お前だけの“業”にな。

下手に俺の真似事をする必要など無いのだ。俺が伝えることは経験と思考のみ。

“戦い”といつもの本質を刻み、見つける手助けくらいしかせん

そして何か護符のようなものを私に渡す。そして『アデアット』と唱えてみろ、と言われる。

「・・・『アーティスト』」

そして現れたのはスラリと艶やかな黒い鞘に納められた剣。しかしこれまで見たことの無いもの……。それを抜く。

美しい、しかしそこか妖しい光を反射する刀身。しかし片側にしか刃が付いていない。反りがついていて『斬る』ことに特化し、洗練されていることが分かる。そして鍔と鞘、刀身に刻まれた紋様はどこか神秘的な雰囲気を醸し出している。

あまりに美しいその刀身に見惚れいると彼がニヤリと笑う。思わず我を忘れてしまっていたことに気付き、己の失態を悟る。

「ククク、どうやら氣に入つたようだな？それはお前への仮契約に付いてきた特典だ。<sup>ペレセント</sup>

気付いてるか？俺がお前を拾つた日だぞ今日は。

・・・まあ、女に送るものとしてはどうかとは思うがな？」

まったくだ。普通はペンダントやアクセサリーだろう。まあ、らしいが。

「・・・」の剣は?

「日本刀という刀剣に似ているな」

「二ホントウ?」

「ああ。・・・まあ、実際はまだこの手の刀は打たれていないだろうがな。まだ早すぎやん」

最後の方はボソリといったから良くなかったが、それから続

けられた説明で二ホントウは数ある刀剣類の中でも最高峰の切れ味を有しているらしい。

「加えて、その刀には術式が刻まれている。強度を限界を超えた極限にまで高めている。破損する心配が無いんだ。というより破壊不可能だな。俺の全力の魔法でも傷一つ付かないだろう。刃こぼれしないから切れ味も落ちない。武器破壊も不可能だ。『戦場で振るう武器』としては最高だな」

良かつたな、そう言って私の頭をそっと撫でる。

「……それが、お前にひとつてのもう一つの相棒になるだろ。『ひとつ』と共にお前の障害を乗り越える助けてなってくれるだろ。『ひとつ

「アーティスト』

現れるは戦姫の美しさを称えるかのよつた剣。

抜かれたソレは何もかも斬り捨てると言わんばかりの妖しい光を放つ。しかし、真に恐ろしいのはその剣を手に取った瞬間に溢れ出した目の前の敵が放つ　　“殺意”

それは、まるでタールのようにネバ付いて身体に纏わりかかるようだ。それでいて針のように鋭く身体の芯にまで突き刺さる。

“　　おまえを、‘殺す’  
……その‘念’だけが

それを見た男は顔を歪める。一目でわかったからだ。アレはヤバいと。

なるほど……悪魔とは比べ物にならない“化物”の眷属は“化物”であつてしかり、か……。

しかし、その後に浮かべた表情は如何なるものか。彼女からは見えないが、彼が浮かべた表情もこの片腕を失った絶体絶命の状況で浮かべるにしては異常であった。

湧き上がる感情は・・・『歡喜』と『高揚

未だかつて無い強敵と出会えたことに“感謝”した。彼もまた“外れたモノ”的一人であつたのだから・・・

そして黒の世界でさえ妖しく輝く刀を携える戦姫と、神に仕える狂った執行者の一人の命の鎬の削り合いが・・・

「悪いが、ここで死ぬわけにはいかんのだ。何としてもお前を倒してみせるぞ」

「足搔くな。直ぐに訪れる運命を受け入れろ」

打ち鳴らした刃同士の甲高い悲鳴と共に始まった



## 第六話（後書き）

感想が御座いましたらいただけると作者の励みになります。  
よろしくお願いします。

## 第七話（前書き）

この作品は独自設定が含まれます。ご了承ください。

## 第七話

第七話

まずは、第一手

その結果が如何なるものであらうとも、私にとつて不利益となるものは無い

私が愛し、憎み、そして求めて止まない  
うか・・・見極めさせてもらおう

殺戮<sup>じゆりく</sup>存在に足る者かど

なあ？ 真祖の吸血鬼？

彼は嗤つ。彼の歩いた道筋の傍で朽ちた弱者を。

彼は嗤つ。自分が浴びた血潮の温かさを。

彼は、嗤つ……自身の愚かしいまでに無駄で滑稽な生と、それを定めたとされている神を嘲笑つ。

「待たせたな」

そう言つて両手に料理を持つてやつてくる、先程私をそんざいに扱つた吸血鬼。しかし吸血鬼が態々料理をするとは・・・

「今日の料理は俺好みにしたが、文句はないな?」

「はいはい、いいからさつさとしる? 不味かつたらぶつ飛ばすから安心しな 愚図が」

天使のような笑みを浮かべ、一コリと笑う。

私の神具と呼ばれる術式装備「投影鏡念」の能力。それは鏡に写した生物の人格と性格を完全に自身に投影し、姿形を写しとする能力を持つ。異端調査における潜入や組織へ潜り込むことに役立つてきた。

性格や仕草は勿論、私が発する言葉も基本的にその人物に違和感なく変換される。他者に“成り替わる”擦り替わる”という困難を無にしてくれる私の相棒でもある。

……そう変換される、はずのだが…

「（オイイイイ！）何で？　何でこの娘、こんな口が悪いの？！」

「

さつきから内心冷や汗を流しまくっている！　何、この娘？！

投影する時に自然とその人物の基本的な情報も手に入る。そこで“従者”という立場だったから私はアタリだと判断し、<sup>ターゲット</sup>標的に接触を図つたのだが…

しかし、しかし…この娘の口の悪さは…・・・

「ううせえ。お前の犬の上サよりはマシだ。黙つて食つて感動のあまりに咽び泣け」

「まあ確かに。自分を保護した人のあまりの人の悪さ意地の悪さ性格の悪さに、己の不運を嘆くことはあるかもね？『ああ、なんて私はクジ運が悪いんだろ』つて」

「確かに。俺も嘆くことをやめられない。俺が手塩にかけて育てた従者は未だにあの黒い『暗黒物質』だーくまたいを時折皿にのつけて来るんだからな？おかげで未だに俺が大半の飯を作るはめになってる」

「だから何度も言つてるじゃない。私はあなたの教えを順守してい るだけよ？“食物と己の中の矜持だけはないとしろにしてはなら ない”。それこそが己が己たる基礎基本だつてね？」

「確かに。己の肉体と精神の基をないがしろにしている奴は早死 にする。それも無様にな？その俺の教えをお前なりに糧にするの はいい。だが、俺は今まで“アレ”が作者であるお前よりも皿に多 く無かつたことはないぞ？」

「『めんなさい』。己の主人への燃えるような敬意を込め過ぎてしまつて……。ああなたのよ。ああ、悲しい悲しいわ。せめてその想い

だけでも、と思つて主人へ私の献身の証を捧げていたといつのに……。その想いは届かなかつた

「届くかそんな爛れた敬意。だが安心しろ。己の主人を毒殺しようとする想いだけはありありと感じ取れたから」

バチバチと両者間の間では激しい火花が散つていた。

ホント何で？！　どうしてこんな険悪な空氣を自分から生み出しているの？！　出る言葉出る言葉全てに毒が含まれてるし！？　どうしてこうなつた……

……早くもそのことを後悔し始めていた。

私は執行者の中では純粹な戦闘能力の高い方ではない。いや、そこまで弱いというわけではないし、それなりに研鑽を積んできたという自負もある。しかし、それでも“平均”よりは少し下にあたるだろう。

それは仕方ないのだ。私に出来ることもあれば、出来ないこともあります。

あんなワシマシニアーリー人間兵器の中でも無駄だし。

田の前で溜息をつきながら食事を並べる吸血鬼を違和感を「え」となく観察する。私が他に誇れる数少ないもの、それはこの“観る”力しかない。

強者は強者に敏感である、といつが私のそれを測る嗅覚は並外れているらしい。これは私の持論なのだが、真に“恐ろしい”者ほど自分の匂い、姿、在り方を偽ることがうまい。私のような潜入する任務に就くものにとって、それに気づくことが出来るかどうかが生死を分ける分水嶺となる。長生きするにはそのものを本当の意味で偏らない視点と確かな物差で測ること。これが必要だ。

故に私はどこまでも精緻に分析が出来る観察眼が求められたのだ。これまで始末した悪魔共もその物差で測つた上で適切な人員、あるいは策略を持つて葬つてきた

だが、そんな私にでさえわかることはこの男の力量の底の知れなさだけだった……。とてもではないが私が正面からやり合って勝てるとは思えない。

身体の軸は一切ぶれていない。ただ、その状態を何時までも維持しているのではなく、時たまに崩しているかのようにしている。

一見隙だらけ。しかし、その実ではその身の周囲に空氣に漂わせているかのように混じりあってる微弱な魔力がその身に迫る危険を察知するのだろう。

……凄まじい。何という魔力制御か。周囲に余計な気をまき散らすわけでもなく、空氣と同化する程にまで出力を落とし拡散した魔力を完全に己の意のままに制御している。

これでは余程の手練であつたとしても隣りに立たれても何の違和感も感じない。身体の気配は一般人に限りなく近づけ、しかしその警戒心は一時も緩めてはいられない……。

現に私のような解析に特化したようなものでなければ、違和感すら

抱かず」にその間合いに入ってしまう。そしてその末路は

そこまで考え思わず寒気が走る。恐ろしい。たとえ直接戦闘に特化した相手であつてもそのカラクリに気つかなければ圧倒的に不利だ。身体中に纏わりついた魔力が敏感に相手の動作、気、魔力の動きを感じとり、こちらの思惑など筒抜け。たとえ障壁でそれを防いでいたとしても変わらない。その場合は障壁の脆い弱所を探られ、防御の慢心をつくことに利用されることに変わりないのだから。

一見しただけの実力の片鱗でさえ“化け物”。

内心舌打ちをしながらも、違和感を与えないために差し出された料理に手を付ける。

「……」

おいしい！ 何だこの鶏肉の溢れんばかりの肉汁。そしてその味を際立たせるふんだんに使われた香辛料！ こんなもの食べたことない……

「どうだ？ つまこだらう？」

確かに絶品だ。これほど高価な香辛料をつまく使つた料理はそこいらでは見かけないだろう。本当の意味で肉を際立たせている。とてもではないが私には無理である。

だが、次に彼の口から出づいた言葉は私自身としては認められない事実の追及であった。

「　　侵入者さん？ 歓迎のもてなしとしては満足出来る品だつたわう？」

それは私にとっての“詰み”を意味する宣告だった……。

「　　侵入者さん？ 歓迎のもてなしとしては満足出来る品だつたわう？」

揺さぶる。先ほどから感じていた些細な違和感。それを確かめることができた。だが、すぐに殺したりしない。確認しなければならない」とが幾つかある。まずは探る作業から始めようか。

「？ ついにボケたのかしら？ いつも顔を合わせている私を突然侵入者とか……あまりふざけたこと言つと切り刻むわよ？」

何処か頭の逝った可哀想な人間を見るかのよつた腹の立つ眼を向けてくる。ふむ、実に巧く朔夜に化けている。瓜二つだ。とてもではないが余程のことでは気づかないな。それに肝が据わっている。顔色一つ変えないとは。

「いいからさつさと正体を現せ。 もう無駄だ。」

だが滑稽な茶番ももうお終いにしよう。ジワリと殺氣を滲ませ、互いに睨みあう。その瞳からは何の感情も感じられない。

そして

「……ふう。どうやらここまでなのね。どうしてバレたのか聞いても？」

初めてバレただから。と言つて俺に話をさせようとす。……時間稼ぎか。いだらう。乗つてやる。俺も最後に確認しておかなければならぬことがあるしな。

「まず最初に感じた違和感はいくつかあるが、疑念を持つたのはお前と交わした先ほどの会話からだ」

「？ どういふこと？ 自分で言つのもなんだけど、雰囲気とか仕草まで完璧だった自負はあるんだけど」

この様じやそれも説得力ないけど……と続ける。確かに表面上のものは完璧だった。

「そうではない。だが、確実なのはお前のその変装とでも言えぱいのか？ それ自体は完璧だったがやはり綻びがあった。お前は覚えているか？先ほどの俺の『番犬はどうだった』という質問にどう答えたのか」

怪訝な顔をする。確かに『』く普通の受け答えであつただらう。だがそれ故にお前は完全には化け切れなかつた。

「答えは簡単だ。『番犬』といふのは俺たちの間の『何か異常はな

かつたか?』といつ確認を示す隠語だ。……どうやらお前のその能力かアーティファクトかしらんが、それは基本的仕草や性格は『ペー』できても知識を完全に『与す』ことは不可能なものようだな?』

その答えに動搖は表には出さないが、当たり、のようだな。だが実はこの答えは嘘でもあり本当もある。確かに隠語としての意味もある。だがしかし俺が疑わしく思つたきっかけは単純である。あの時の答えでコイツは番犬のことを『あの犬』といった。別段話の流れでそう使うのはおかしくない。だが、朔夜があの犬を指す時は必ず『駄犬』と言ひ名前で呼ぶ。

そして確証に至つた理由は俺の出した料理だ。

コイツは味の濃いメインの肉に眼が行つていたが、あの料理には朔夜が嫌いなオニオンがさりげなく入つていた。普段のアイツではならば残しあしないものの一言文句を言つてから食つだろう。そちらではまず見ない料理や調理に注意をそらされていた。作法云々が完璧であるが故にアイツ特有の反応の違いが顕著であった。……といつ、なんとも間抜けな理由であつた。

……真実を告げるのはあまりにも慈悲が無さ過ぎる。プライド的な意味で。

どうやら身体的な行動や言動の特徴などは完全に模倣できるが、自

発的な行動の細部までは再現できない能力のようだな。

しかし、これは厄介な連中に眼を付けられたな。この屋敷の結界を  
軽々と突破できるような戦闘員がゴロゴロいそうだ。それでなくて  
もコイツのような厄介な能力持ちがいる時点でヤバい。

「さて、今度は俺の質問に答えてもらおう。言つておくがお前に拒  
否権はない。少しでも虚言の色が感じられたらお前には意思無き傀  
儡となつてもらう」

これで俺とコイツの間の無条件での情報の取引という形が成立した。  
そしてコイツは俺の言葉に心底嫌だという顔をする。

「大丈夫、直ぐに終わる簡単な質問だ」

では、時間が無いので单刀直入にいこうか。

「お前らの中に“予言者”と呼ばれる存在がいるか？」

動搖を顕わにする。もちろん表面的なものではない。

脈拍の一時的な乱れ、視線と瞳孔の僅かな揺れ、身体の細部に僅かな発汗

それらを周囲に散布した魔力と五感による観察によって確認する。

そうして俺は決定的な問いによつてその身体的反射を捉える。まるで蜘蛛の糸に獲物を絡め取るような心持で最後に仕上げる。

「..... Yes or No?」

## 第七話（後書き）

大学の後期の追い込みがようやく終わりました。とてもではないが執筆している暇なんて無かつたです……。しかも久しぶりに書いたのでいまいち進まない。とりあえず今話はここまで。感想いただけたら嬉しいです。

## 第八話（前書き）

この作品には独自設定が含まれます。ご了承ください。

「お前らの中に“予言者”と呼ばれる存在がいるか?」

この言葉を聞いた時の私は正に心臓を驚撃されたような心地であった。

何故この吸血鬼がそのような質問をしたのかはわからない。だが、目の前にいる死神の眼は私の反応を逃さないとばかりに、静かに居竦むような眼光を光らせている。それは私に喉元に剣を突き付けられたかのような錯覚を引き起こしそうになる程の威圧感と圧迫感を感じさせている。

「Yes or No?」

……だめだ、虚偽は通用しない。だがしかし真実は告げられない。

今までこんな任務に従事してきたからこそ分かる。“コイツ”にだけは、死んでも情報を渡してはだめだ。“コイツ”はこれまでと違う。私たち自身、いや人類全てを滅ぼしかねない存在だと確信した。確たる証拠などはない。だがしかしコイツから感じる血と屍の臭い

……何よりも私の本能が叫んでいる。『トイツだけは必ず殺して殺して殺しつくさなければ……ヒトは滅ぶ、と。

「いいえ」

だからこそ私は笑う。私の顔には死に臨む覚悟を決めた者だけが纏う死相が浮かんでいることだろう。何度も見てきた。

だからこそ、その行く末は承知している。……私は生きて戻れないだろう。

だが、それが何だというのだろうか。生は苦しみ。死せば審判の後に神の元へ。叡智の父の導きのままに……それが我らの教え。死は終わりではない、救いの始まりに過ぎないのだから。

私達が心の支えとしているのは世に蔓延る大勢にとつて都合のよい“解釈”ではない。……教えによつて導かれ辿りついた、己自身の答えを得た自身の魂の強さだ。

私の言葉にそもそもおかしいとばかりに田の前の化け物は微かに微笑みを浮かべる。

「美しいものだな？ 死を覚悟した真に強き者の最後とは。お前はその選択に後悔は無いのだな？」

「……」

「先ほどの言葉に虚偽は感じられなかつた。だがしかし眞実、といふわけでもない。おかげですっかり煙に巻かれてしまつたな……ここまで追い詰められて最後まで揺るがないとは。

見事。そのお前自身を支えている芯は余程強いものだと窺えるな」

そうして私に向ける視線は変化した。郷愁、悲哀、憎悪、慈愛……それらが入り混じつた視線。その先に何を見ているのかはわからぬい。だが、わかることはコイツも私を殺すべき存在と捉えたことだ。

「ああ、實に厄介だ。お前たち人間だけが持つその“強さ”。

決して折れない“信念”。善惡問わずにそれを持つ者は決して引かず、朽ちず、諦めず、そして強い。実力の壁なんてものはあつさりと越えてきやがる。……殺したくなるほど愛おしく好ましい

「そして私たちは一拍置いて互いに一ヤリと笑う。

ここから交わすのは最早言葉ではない。

「 まあみる、化け物ッ！！」

「 ほざけ！！ 人間がッ！！」

交わす剣があげる甲高い金属特有の共鳴音。響き渡るそれが戦の鬨となつて私たちの間を駆け巡った……。

互いに剣を奔らせる。俺は影魔法の応用である影の剣を、相手は隠し持つていた短剣を。こちらは一本。あちらは一本。

繰り出す剣戟はこちらが一なら相手は四、五といったところ。俺は自身の間合いで勝負に持ち込むような流水のように連續して打ち込む。対して相手はその流れに逆らうように、嵐のような手数を重視した攻めを見せる。

こちらが喉元へ鋭い突きを出せば、それを皮一枚で避けて、合わせるかのように刃の上を短剣が走り、手首から先を切り落とさんと迫る。

それをこちらも皮一枚でかわし、密かに一の太刀として迫っていたもう一方の短剣を弾く。そして体勢を崩した相手に回避困難な胴にある急所のみぞおちへ前蹴りを放つ。

しかしそれを弾かれていない方の右手を引き寄せ肘で防ぐ。

気を込めた一撃だったが、それはあちらも同じく氣で強化しているために決定打にはならない。

そして、再び接近しようとする動きをみせる。

だが、それは悪手だ。

「 ダ・トッド・ファングット。火の精靈34柱。集いて来て  
敵を焼け」

「！？ 速い！！」

「『魔法の射手・連弾・火の34矢』」

瞬時に打ち出された魔弾が襲う。絶好のカウンターとして打ち込まれるソレを瞬時に弾いてはいるが……

「ハアアツ！！！」

「？！ 何ツ！？」

そこへ間髪入れずに氣弾を掌から放つ。それをまともに喰らい、吹き飛ぶ。だがまだだ。まだ終わらせない。

「カハツ！？」

「ハリチだ」

ハツとした顔で振り下ろされた一撃を交差させた短剣で受け止める。が、それもまたこちらの狙い。

「『隣に潜む暗殺者』<sup>ハイドエッジ</sup>」

「なつ！？！」

一瞬で剣の形状が変わり小型の人型になつて二つの短剣を握りつぶす。そしてミドルキックで敵の肋骨を何本か碎く。そして吹き飛んだ相手の周囲に漂わせている魔力を利用して背後にも分身を生み出し、そして

「『魔力暴走』<sup>オバロード</sup>」

一気に暴走させ爆発させる。

豪快な炸裂音と共に周囲の壁は粉々になつて消し飛んだ。頬を撫でる風は熱く、爆発の余熱が含まれている。周囲を駆け巡る粉塵は爆発の規模の大きさを感じられた。

ひゅるひゅると弧を描いて相手の持っていた短剣の残骸が足元に転がってきた。

「……」

それには目もくれず、残骸の山と成り果て、今だに煙を上げている向こう側を凝視する。

「ふうん……それがあなたの能力？ 始動キー無しであれ程精密な影の人形を操るのは無理だと思うし」

煙をゆっくりと引き裂いて向こう側から現れるのは朔夜の姿ではなく、本来の姿に戻ったのであろう女がいた。20代前半位で淡いブルーの瞳に、少しウェーブがかかった長髪。引きしまっていながらも、女性特有のしなやかさは失っていない肢体。だからこそ不可解な点が浮かび上がる。

「それもお前の能力なのか?いや、術か……手応えは確かにあつたのだがほほ無傷とは。実に面妖だ」

女の着ている服はあちこち破けて非常に扇情的な状態になつていて、所々に煤がついているもののその下にある肌には傷一つない。

「あなたがソレを言つてへ。」

「違ひない」

そうして笑い合つ。確かに自分が言えたことではない。そして女は皿を細めた。それはまるで男女の逢瀬を楽しむかのようで楽しげだ。

「……ねえ、あなたの名前は?」

「……何故それを急に問いつ?」

そつ胡散臭げに問い合わせると女は不満そつに頬を膨らめた。

「知りたくなつたんだもん」

「どんな理由だ」

「いいじゃん。私も名前教えてあげるよ。『アイリ』。覚えやすい  
でしょ」

「……ノア」

ノアかあ、とは口の中で噛み締めるよ! ひづぶやくと「ノコ」と笑う。

「『ノア』ね。覚えたよ。これで忘れないから安心して」

そつしてアイリは口元を釣り上げ笑みを浮かべ、指先をペロリと舐める。まるで猫のような仕草をした。

「これから死ぬ相手の名前だけど、忘れないでおいてあげるよ。それに自分を殺す相手の名前くらいは覚えておきたいと思つから私の名前も忘れないよ!」

そうして浮かべた笑みは妖艶で、実に魅力的だと思いつつこちらも笑みを浮かべる。だが、こちらは相手を見とれさせるようなものではないだろう。久しぶりに愉悦を感じる殺し合いの相手に対する敬意と敵意を込めた“原初の威嚇”。獰猛に形作られたソレは嗜虐的な歪みを感じさせる。

「「やあ、もつと踊ろうつか……」

互いに交わす言葉は存在せずに、交わすは剣による一撃。再び呑ませるその重さは変わらない。だが、込められた想いは確かに変わっていた……。

一撃一撃を交わす」とに伝わってくる血と汗と越えてきたであろう屍の数。そして己自身の命の輝きを互いに見せつけ合つようにぶつけ合つ。

“人”という存在に許される、単なる戦闘力では計り知れない想いが壁を超えると襲いかかる。

烈火の如く、打ち合う鉄の音は互いの魂を鍛つ。周囲に散らばる衝撃は戦いの場を盛り上げる舞踏曲となる。

まだ

そう思い、ノアは笑う。後三手で詰むと思つていた攻防を己の限界を押し上げ、あっさりと捌き切つた。

目の前の女の力量は既に当初の量りを大きく逸脱している。つい數十分前までは歴然としていた実力差をあっさりと埋める何かを燃焼させている。

「あはははは…！　これだ…！」

虚空瞬動で互いに間合いを牽制しながら激しく打ち合つ。右手に携えた短剣が幾閃もの軌道を描く。それを紙一重、皮一枚で捌く。互

いに瞬動の先を読み合い、瞬間移動を繰り返す。周囲からは彼方此方での衝突音しか探知できないだろ？

「知恵だけでも、力だけでも、勇だけでも足りない！！ 全てを持つてしてもなお届かない、そんな壁を傲慢にも乗り越えんとする！ ！ 無深き人が誇るべき力そのものだ！」

「あああああああああッ！――――！」

影の剣が右肩に突き刺さりながらも獣のような唸り声をあげて短剣を投擲する。それを回避して掌底を放つ。

しかしそれに合わせるが如く、どこからともなく現れた短剣が掌を貫く。瞬間に繰り出した膝蹴りを相手は前蹴りで相殺する。再び離れる距離。しかし、互いに離れながらも詠唱する。

「 破壊の王にして 再生の微…」

「 …… 来たれ 虚空の靈…」

互いに渦巻く力を現象へと変ずる言靈を紡ぐ

「我が手に来りて 敵を喰らえ…」

「薙ぎ払え…」

そしてその力の開放が

『紅き焰！…！』

『雷の斧！…！』

奔る爆炎は全てを焼き払い、大地を、空を焦がす。何もかも飲み込みながら突き進むソレは本来の威力を隔絶していた。

しかし、ソレと拮抗するのは術者の限界すらも越えた雷の裁断の刃。全てを飲み込まんと迫る火碎流の如き魔法を打ち碎かんと衝突する。

そして、後に語られる化け物達と殺し屋の壮絶な戦いの火蓋ノア じついろこぎやが切つて落とされた……。

## 第八話（後書き）

感想がございましたら作者の励みになりますのでどうかよろしくお願いします。

## 第九話（前書き）

独自設定が含まれますのでご容赦ください。

何度も書いてもグダグダ感が○'z いや、最初か( r y

パラパラと降り注ぐ土砂のスコールを肌に感じながら、ノアは立ち上る砂塵の向こうを凝視していた。先ほどの魔法の打ち合いは完全にこちらが勝っていた。だが、それ故に勝負はついたと判断しているのではなく、この程度で終わる相手ではないということを理解しているからである。だがしかしだ

(少なくとも現時点においては、負けは無い)

心は先ほどまでの心地よい命の鎧の削り合いで熱くなっているが、一方で冷徹に判断を下す頭の方は終始冷静なままである。その証拠にノアは己の強力無比である固有スキルは『隣に潜む暗殺者』を一度使用しただけでそれ以外は一切使用していない。それも攪乱や探りを入れる目的の用途である。

それ以降はこの世界で新たに身に付けた技能しか用いていない。魔法や戦闘技能としては基礎の領域に当たる気の運用だけである。簡単にいえば、実戦における試験運用とでもいえばいいだろうか。これまでノアは固有スキルを戦の軸として運用していた。だが、この世界に来てから磨いてきた、特に“魔法”は対人戦においては今回が初めての実戦において使用となる。それらの知られても痛くない手札のみで戦っていた。

そして警戒し続ける頭の中の並列思考では先ほどから懸念している事柄について思考していた。

（俺がこの世界にいるところと、ところよりも俺の存在を知るものなどこの世界にはいないはず）

まず現時点では魔法世界とこちらでは呼ばれている向こうの世界といちらの世界は交流は無い。存在するか怪しいものとして、どちらの世界においてもお伽噺に語られる程度である。こちらとあちらを繋ぐゲートもない。故にあちらの世界での行動がこちらの世界に伝わるということもない。

更にノア自身が自分の危険性について自覚しているために、存在の隠匿については細心の注意を払ってきた。周囲に強烈に印象付ける、“ノア”という個人の存在の根付けから朔夜の養育に至るまでの全てに至るまで不自然のないようにだ。少なくとも周囲と逸脱した行動を取つたと判断されるのはあくまで存在をすり替えた時のみ。それ以外は隠匿は完璧だったはず。そうそれ以外は

“ノア＝吸血鬼”と結びつけるに足るモノは一切無いはず……。

（だがやつらは一切のこちらを嗅ぎ取る気配する見せずに俺の元に辿りつけ、はつきりと“化生の存在”と認識した上で襲撃をしてきた）

そしてノアは、先ほどのやり取りで影の剣に付着した相手の血液を舐め取る。

ほんの少量しかないそれは不明瞭でおぼつかなく、とてもではないうが記憶を遡ることは出来ない。しかし状況を判断するに足る情報は提供してくれる。

(襲撃者の人数は一人。結界で感づかれることを恐れて大人数での襲撃を避けたのだとしても少なすぎる)

逃走ルートを他で抑えているのだとしても少なすぎる。それにここまで盛大に戦闘しているのだ。もはや結界等関係ないし、援軍として予備戦力を何人か置いていても問題ないだろ？

だがしかしその気配は無い。単純に考えるのならこの一人は捨て駒。こちらの戦力把握をするために送りこまれただけという考えも出来る。だがここまで戦闘者をそうもホイホイと捨て駒にできるような組織はそうそうないだろうし、もしそうであるならばこれまで自身が築いてきた情報網にそれ程の規模を持つ組織が引っかかるはずがない。朔夜を育てるに決めた後は更に念入りに入り組ませた情報網である。まず違う、と考えてもいいだろう。

次に考えられるのは俺や朔夜ではなく俺たちの持つ所持品を目的としていた陽動であつた場合。まずそんな狙われるようなものはこの屋敷には置いていない。その場合、金目の物目的はまずないだろうから、研究している魔法関連だろうが、それは朔夜さえも何をしているのか知らない。そんなものを盗むなんてことは不可能だろう。

そして考えられるものの中でも最も厄介なものは

(通常の方法ではない、何らかの特殊な方法で俺の存在に辿りつくことの出来る存在 例えは予言者と呼ばれるものの類 予知能力者の類がバックに存在するような相手に俺の危険度が察知されてしまつている場合だ)

それが本質ではないにしろ、心を読むことを造作もなく可能とする能力者が存在する位だ。それくらい存在すると考えてもいいだろう。“ありえない”と切つて捨てられる程楽観的ではいられない。何せ身近にそういう存在がいるのだから尚更である。

先程はこちらにうまく尻尾を掴ませなかつたが、その類の能力者が背後にあると想定した動きをすべき、と判断してもいいだろう。他にも様々なことは考えられるが、それらを想定した対策はいずれも既に打つてあるのだ。故に、これから取るべき行動は……

そんなことを考えていたせいだろうか。突如として背後の壁が吹き飛ぶ。今夜はどれほど屋敷の壁を崩壊させれば気が済むのだろうか？ そう諦観の念を抱いてしまつほど盛大に吹っ飛んだ。そしてそ

の向こう側から金属の衝突音が幾度となく聞こえてくる。そして一際甲高い互いの獲物が奏でる音色を響かせたあと、煙を裂いてこちらに良くなじみの顔が飛び込んできた。

「終わったのか？」

「まだ。そつちは？」

そうして、いつものティータイムの時のような気楽な調子で背中合わせに言葉を交わす。互いに口元は僅かに綻んでいた。

「……まつたく。こつちは無理やり暗がりに引きずり込まれたするような変態の応対に四苦八苦していた時に、あなたはどこの誰ともしない女に鼻を伸ばしていたのかしら？ 汚らわしいから離れて

くれる？」

「おいおい心外だな。俺はただ紳士的に舞踏ダンスの御誘いをしただけだ。  
まあもつとも少々……熱くなってしまったが、な」

そうして互いの得物を構える。俺は影の剣を。朔夜は俺が与えた刀  
を。

「……ほつ。それを出すとは余程の相手だな。少なくともそちらも  
一筋縄ではいかない相手らしい」

「そうね。あなたが言っていた通り、己の中に確たる“芯”を持つ  
ものは厄介ね。それが歪んでいるかどうかは別として……殺しても  
殺しきれない。腕一本斬り落としてもまだ隠し玉を隠していたとは  
思わなかつたわ」

「こつちもだ。最初の量りなど完全に裏目にでたな。最早完全に限  
界という名の壁を超えたぞ。もはや別人だな、アレは。窮鼠猫を噛  
むどころではないな。噛み殺す勢いだぞ？」

そうして互いに田の前に現れた敵を田にして笑つ。

朔夜の相手にしていたと思われる男は全身から血を流していない所など無いのではないか、という位に血を流し、片腕が無い。いや、あるにはあるが、その腕がまるで糸に括られた人形のようにナイフを4本それぞの指の間に挟んだ状態で男の周囲を浮遊している。顔に浮かべた狂笑は最早人間が生きながらにして発していい空氣ではない。

一目見てわかつた。あれは戦に狂つた鬼だ。それも自ら望んで狂つた戦闘狂。血を啜るように他者との命の殺り取りこそに至高の悦びを見出す狂人だ。噴き出す気配は最早化け物と言われても否定できないまでにおぞましい。

そしてこちらを見るアイリの表情も凄まじい。口元は三田円のように弧を描き、まるで幽鬼のようになんでいる。そして、またしても身体には一切の傷はない。だが、その破けた衣装はほとんど血塗れで、怪しげな妖艶さの中に一層の歪さを感じさせる。まるで紅の衣を纏つた死神だ。

どうやら俺との戦の間で、それまであった己の限界を突破して新たな領域に辿りついたらしい。その全身から立ち上る魔力の総量自体に変化は見られないがその質がまるで違う。力強く大河のように雄大に、されど静まり切つた湖のような静寂さを併せ持つてゐる。ものはや負けは無いなどといつ心構えのままでは危険だ、と判断せざるを得ないほどに。

互いに示し合わせたかのよつ、気を昂ぶらせて戦闘状態に移行する。

そして再び刃を交えようと互いの空氣の膠着が決壊する寸前に、俺は無粋な来客が近づいてきてることを察知した。

「 チツ。 警備の兵どもか。 水を差す真似をしやがって。 」

「つやう」の騒ぎを聞きつけてこの街の周辺の警備を担当していた兵が集まってきたようだ。当然か。いくら防音や認識阻害の結界が張つてあつたとしても、これほど大騒ぎすれば誤魔化しも効かなくなるだろう。……それにじつにしろ撤退すべきのよつだ。どうも監視されている節がある。ここつらも追跡の準備を確固たるものにするために命を賭した時間稼ぎをする気のよつだ。

すると、朔夜もそれに気づいたようで、囁くよつに相対する一人を警戒しながら俺に声をかける。もっともその顔は興が削がれた、と言いたげに不満げであるが。

「ド、ドリフスの」

「決まってる。ここを放棄する。手筈通りにな。教えたる？ 隠れ家などこへりもある。逃げるが」

「……了解」

もつとも、もし相手側に予知能力者の類がいたらあんまり意味がな  
れやうだが。

しかし当然にそらの事情を鑑みてはくれないらしい

「それを私たちが許すとでも？」

「周囲の兵など我等の部下が抑えてるだり。勿論此処も包囲されてる。逃走経路は皆無だ」

「おこおこ……。逆に聞くが本当にそこいらだけで俺たちを止められると思うのか？ 無駄死にだぜ？」

時間を稼ぐ。『俺』もだが。“道”を拓く為に必要な時間

を稼ぐ。

「せんよ。『門』<sup>ゲート</sup>も使えない。繋げそうな媒体は無い上に、ここには既に我らが結界を張つてある。無駄なことはよせ……それより、わざわざ殺さうぢやないか。互いにそんなに時間は無いだろう？」

確かに近くにあるもので媒体にできそうなものは無い。そして言えば風位だが、残念なことに風は俺が最も苦手とする属性で高等魔法である『門』<sup>ゲート</sup>は使えない。それでも脱出手段はあるにはあるのだが、結界といつ存在が逃げる“道”を遮断している。

「さうよ？ テートのお誘いをすっぽかすなんて男の風上にもおけない位失礼なことよ？」

そうしてアイリは嘲笑する。もつ今にも飛びかかってきたそうだ。

だが……間に合つた。

俺は口角を釣り上げ、眼を細めて静かに言葉を紡ぐ。

「  
朔夜」

そつしてあからさまに目配せする。朔夜は溜息をついて肩をすくめる。当然アイリ達は怪訝な顔をして警戒し、何かする前に阻止しようとするとするが

「  
まったくマスターは人使いが粗い」

二人の召還した悪魔達が俺たちの前に現れることでその動きを止め  
る。

「RJ魔術？！　でも何の触媒も詠唱も無しで……？」

「しかも、これは一筋縄ではいかんな……」

溢れる力と魔力はその悪魔が有象無象の類ではないことを彼等に示す。そして身につける鎧は血に塗れており、つい先ほどまで殺し合いをしていたようである。

「まつ……中々」

そういうて悪魔は顎を撫でながら眼踏みするかのように彼等を眺める。その瞳はこれから闘争への愉悦を楽しみにしているかのようであった。

「じゃ、任せた

「ああ、任せた」

「くつ！ 邪魔するなー！」

そつして剣戟の嵐が巻き起しる。その音を背にゅつくりと立ち去る。  
召還した悪魔達は子爵級。しかし制約は何も無い状態……。

通常の召還は必ず制約といつづの縛りが生じる。何故なら魔界とい  
う異なる世界からの召還であるからである。そう簡単に取り外せる  
ものではないのだがそれを可能としたのは、かつて“殺した”強者  
の技術である。ソレを応用して製造した“人工”的魔。

魔界から召還するのではない、自らが創った存在であるならば仮契  
約の要領で呼び出せる。もつとも、魔眼でコピーしたのはあくまで  
も戦闘可能なレベルの人工魂と魔法生物の生成術式と維持術式。そ  
のためそこから完全に自律した人格と思考ができるだけのレベルに  
発展させることはそう簡単にいくものではなかつたが……。

そして

「斬れるか？」

「ええ

朔夜が結界の一部をあつさり切り捨てる。不可視の障壁が糸が千切れるようにその効力を失っていく。

「よそ見はいかんな」

「？！ 嘘だろ？！？！」

「くそが！！！」

必死に追い縋るつとするが、それも阻まれる。その表情には隠しきれないほどの焦燥の色が浮かんでいた。

ではでは、  
“また”  
会おう。

「アリを今にも噛み殺せんとするかのよつにアリの怒声が背に突き刺さる。憤怒の想いに返すのは、嘲り。ビームでもビームでも…面白い。」

『あわせたよ』

いつでも。こつまでも。俺の掌の上で踊って踊って踊り狂え。

その背に浴びせかけた如何なる言葉ももづ彼には届かなかつた。

そしてもう用済みとなつた屋敷に背を向けて歩き出す。……暫くは無縁のものとなるだらつ『安穏』とともに別れを告げた。

## 第十話（前書き）

独自設定が含まれます。ご了承ください。

今回は結構グロい描写があります

「 巧遅より拙速を取る」

「え？ あんなに「覚えとけよ！」みたいな去り方しておいて？」

隣を歩く朔夜が俺の意図を察して驚いた顔をする。ちなみに今は3つ目の隠れ家を経由して“また”戻ってきた所だ。といつてもローマの近辺であるというだけだが。

「だからこそ、だ。今度はこっちから“奇襲”する

何にせよ予知能力者の類がいるなら時間を置いた作戦なんていうものは無駄。さつさと実行部隊を消して元を断つに限る。

そして大体こういう精緻な予知が出来る能力者は戦闘能力に割くリソースは然程なく、後方で支援に徹するのが鉄則である。故に、イレギュラーに弱い。

そういう旨を話すと朔夜も納得したようだ。

「ふうん、でもどうやって？　監視には私も気づいてたけど流石に元は連れないと？」

「影を使う。元々俺の能力はこいつの事の為に在る」

一瞬で数百の影の分身に核を埋め込む。こいつらは生きていないので気配が全くない。最高の斥候兼暗殺用の能力だ。ましてや今は夜。“俺”的独壇場である。

「監視に適したポイントを調べる。そして“潜れ”」

次々と夜の闇に溶けていく。これであいつらの大凡の構成員は全滅である。知らず知らずの内に自分の影に潜り込まれて爆死決定だ。

「手駒の子爵級なんて悪魔を一體も召還したのははじめてわけだ」

俺の創造した中でも最高位の存在を消費魔力を度外視して召還したのはちやんと考えがあった。向こうにとつても脅威となる強さだ。

「……確かに彼らが行方をくらましたなら、無理に追いかけるよりも崇拜する予言者サマにお願いしたほうが合理的だと思うわね。そして田の前の戦闘に注目する、と」

呆れた様子でこちらを見てくる。容赦ないわね、なんて呟いてるが殺し合いなんてこんなもんである。疑問を持たずにはいこんだやつから死んでいく。戦う為に存在する戦士は生死の境に存在する危うき天秤に常に晒されてるのだから。

「手早く、静かにいこう。……あの一人レベルの執行者とやらはあと何人だ」

「三人。antzから“視た”。でもどうやらその内一人は戦闘とうよりどっちかといえば探知と支援型。

一人は他人の目を借りて多視点から監視できる能力で、もう一人が精神感応の能力。他の構成員の精神に同調して管制指示してる」

そして、と前置く。どうやらもう一人はあまり“関わりたくない”お方らしい。

「最後の一人がヤバいみたいね。なんか“不死殺し”なんて二つ名持ってるらしいわよ？ ここにはまだ来ていないみたいだけど。他に詳しいことは知らなかつたぼくてわからなかつたけど、ね」

どうする？ なんて笑みを浮かべているが眼は笑っていない。決ま

つてるだろ？ そんなこと。

「…………」まとめて潰す。もちろんその“不死殺し”とやらも誘き出せそんなら一緒に、な？」

俺らの平和の邪魔だ。さつさと牙はへし折るのが一番だ。

「それで私は？ 何をすればいいの？ 悪い吸血鬼サマ？」

「やけに楽しそうだなあ、お前。……まあいい。その一人と監視は俺が全部殺す。お前はあいつらの下部の武装兵を静かに消していく。それで向こうの悪魔と戦ってる一人は

「

「…………」悪魔との戦闘が終わり次第、生き残っていたら不意打ちで殺す、ね」

そんなどこでしょ？ そんな言葉が最後に付け加えられる。

「……合ひてる、合ひてるんだが……。」の性格の悪さは誰に似たんだか

ちゅうと真剣に悩んでしまう。

「あなた以外いないでしょが……ねえ、それで相手の予言者サマはどうするのよ？ 正直言つて相手は“組織”よ？ いくらこいつちが個人の力では勝っていても、これから相当何かにつけて煩わしくなるんじゃない？」

呆れた顔で俺に問いかける。そう、そんなものだ。群に個が立ち向かうことはそれだけで不利である。まともに向かい合つたらの話だが。だが俺の考えは決まっている。

「これから伝言が伝わるから大丈夫だ。きっとヤシラへの“首輪”になるからな」

「？ どうして？」

笑みを浮かべる。月光が優しく、この世界で唯一守るべき存在と己の中で認識されるようになった愛しき存在を照らす。……そう守るべきものはただ一つでいいのだ。それ以外は己を縛る首輪にしかならない。

「なあ、朔夜。人を抑える首輪にならうものつていうのは何だと思つ？」

「？」

疑問符を浮かべる朔夜にそのまま俺の考えを伝える。既に自己を確立させている俺は揺るがないし、ブレない。だからこそ、俺の本質を知つていてるだらうお前には考えは隠さない。

「 それはな。“弱さ”と“恐怖”だ。 そつ俺は思つて  
いる。勿論分別の無い欲やら愛やらなんてのもあるだらうがな。だが、これから人間がいくら発展していくも、この一つだけは変わらずそのままだらうな」

そして人には強さもある。熱意や愛、希望……それらは人間誰しもが持つているものだ。それらは他と結び付くことで更に強固にその輝きを増す。しかし硬く結びつくが故に非常に脆弱い。

そして僅くも崩れ、折れたそれらは一転して弱さとなる。己を縛る肉体という器へとその思考は移り、内へ内へと沈んでいく。そこに“他”はない。強さなどない。ただただ己のみしかいない。そして、背負つものが多ければ多いほど、人は強くなり、また弱くもなるのだ。

「やして、その弱さは必ず周囲を犠牲にして、つよい隙が生じる。  
自らが墮るとも墮さなくとも、な」

だからいじめやるのだ。

「次は無い。『俺たちに関わるな。』『コレ』はその結果だ。」  
わればいい。そうして植えつけるんだよ

やつじりでも参ったひしく、へじひくもつわることを拒絶するやつなんぞ  
んな悲劇を見せつけねばいい。末路を、教えてやればいい。

「そう“弱さ”は“恐怖”と結び付くものだ。人を支配するものとは神でも権力者の王でも何でもない。己を縛る肉体という器……故に、どこまでも原初へと人を立ち返らせる様々な“痛み”は人を縛る」

「どんなに崇高な人間や極悪非道の悪人であつてもあらゆる痛みは脳を一時的にであつても支配することが出来る。

一度と味わいたくない、自分がその被害をこうむりたくない……そう思うほどに、分かりやすいまでに理不尽な覆しがたい力で示された暴力というものは、それだけで人を“恐怖”させる。そして極限状態に追い込まれた人間の意思というものはどれもが弱い」

どれだけ綺麗事で飾ろうとも人間が各自の考え方や信仰の違いを表面上とはいえ抑えてきたのは、いかなる形であつても互いに抱く、相手が持つ己を傷つけうる“暴力”である。そして血で血を洗う戦という名の暴力の混沌の中で互いに互いを認識してきた。あるいは國を支える利を相手に握られている。

そんな風に、互いに笑顔で握り合つた友好を掲げたその手とは裏腹に、その背に背負つた隠しきれないほどに大きな鋭い剣を互いにあえて見せつけ、関係を保つのだ。これはどこままでいつても変わらない現実である。

「“弱さ”という種に“暴力”という水を口え、じっくりと愛でるようにして“恐怖”という感情を芽生えさせる……これから行うのは言つてしまえば、今まで何千何万と繰り返されてきた原初の示威行動に過ぎない」

だが運の悪いことに俺は、  
そういうやつ方は慣れ切つてゐる。  
腐るほどに

「……少々、やり過ぎてしまつかも、知れんがなア」

そう言って浮かべた彼の笑顔は今まで浮かべた中でも一番彼に似合っていたかもしれない。善惡全ての区別を飲み込み飲み干す一つの極地に至った者。

それは正に悪鬼そのものだった。

「……！ くそつー 完全に逃した」

「まあ、普通はあんな連續で空間転移するとは思わないよな

完全に標的を逃した俺とバーグは同時に溜息を洩らす。完全に逃げられた。イラッとするぜ、こんなひじょう。

『おーい、管制室へついたー』

アイリ、やんのどこか気が抜けたような声が頭の中に響く。やつべ殺される。やつまで怒り狂つてたからそのギャップが怖いのか。  
あ。

『すんませーん、真祖には逃げられました』

『あ～……しょうがない、じゃ予言者様に後でもう一回“見て”も  
らつか。じゃ、こいつらの解析よろしく』

確かに。その方が簡単だし確実だわな。

そういうて、念話が途絶え彼女は目の前の戦闘に集中した。

迫る拳を弾き、背後から迫る魔弾をクルリと宙返りすることで回避する。その動作には少しも迷いもなく余裕の笑みすら浮かべている……おい、別人じゃね？ 全然俺の知ってる人とは別人なんですが？ もう完全に人狂いのレベルよ？ アレ？

「ひやあ～、こええ。怖いなオイ？　あの攻撃を簡単に捌いてんぞ。  
ちよつとおかしいだろ」

隣のバーグも同じことを考えていたらしい。彼はいくつかの箇所に散らばって潜伏している監視兵の眼を共有することが出来る。それによって相手の持つ能力を分析することに長けた執行者である。俺と同じ直接の戦闘力こそ低いが非常に重宝される稀有な能力の持ち主だ。

故に彼に求められることはただ一つ。『情報』を集めること。それが至上の任務だ。

監視兵も同じだ。よつて彼等はその情報を集め持ち帰ることが何よりも優先されるべきことなのである。必要なら味方を見殺しにしてでも価値ある情報を持つて帰る。悪魔との戦闘には命よりも情報の方が重要であるからだ。しかし、その行為を批難するものはいない。何故ならそういう狂った連中の集まりなのだから。

悪魔に殺されるヤツが悪い。そういう認識で通っている。

さあ～て滅多に観測できない『子爵級』の悪魔なんて化け物の基礎データを集めんとねえ……。

そして暫く観察しながら俺も周辺の武装兵に指示を出す。魔法やら向やうの魔異の痕跡を残すわけにはいかないからな。

そんなこんなで観てると気づく。・・・お、まだ待てまで。おかしいだろ、オイ。

「……なあ、あの悪魔『枷』無くね？」

おかしい。こいつなんでもおかしい。悪魔召還とはどうしても異なる異界から召還するからか特別な召還陣でも敷いて、何らかの制約でもつけないと完全な状態で召還できない。なのにあんな無造作に召還。しかも一体同時に召還されたってのに特に力を抑えつけられてしているよつには見えない。どうしてだ？ 召還したのが真祖だからか？

「……ああ、周辺の奴らもやつてたるな。記録しつけ。」

それに気づいていたらしいバーグも監視を続けながら手元の羊皮紙に何やら高速でやたら書きこんでる。もしあの真祖の吸血鬼が悪魔を大量に無制限で召還できるとしたら厄介なことになるな。やっぱり予言者様の危惧は当たつていたか……。

そうして前線でそんなキチガイな化け物と戦っている執行者一人に、現在分かつた敵の癖などを伝えようとしたその時、彼は人生最大の失策を犯した。

一瞬、ほんの一瞬そばの観測者から眼を離し、鉄則である周囲への警戒の意識も逸らした瞬間。

それはあまりにも致命的な、『空白』だった…… 潜んでいた正真正銘の『悪魔』にとって、それは致命的過ぎた隙だった。

「己の至近距離より突如として発生した熱、衝撃、閃光。それが彼の身体の全てを白色の世界へと包み込んだ。

「え？」

影を『門』<sup>ゲート</sup>で通り、その地へと降り立つ。全身を粒子のように分解して闇と同化した意識が再び再構成される感覚が身を包む。

何度もやつても違和感を覚えるな、と考える。

田の前にはもうと先程起こした爆発の影響で発生した土煙が舞っている。高台に位置するそこから辺りを見渡すと同じような煙が二十ほど上がっていた。

「ん？」

煙を強引に風を操つて晴らすと其処には惨状があつた。

爆心地周辺には鮮血で描かれた不格好な模様が描かれてゐる。周囲には恐らくそこにいたであろう人物の臓物やら肉片やらが散らばっている。まるで幼い子供が遊び散らかした粘土のようにそこは散らかされていた。

ピンク色の“粘土”は辺りのへし折れた木やら少し離れた枝<sup>タチ</sup>やらにもぶら下がつてゐる。しかし、前衛的なオブジェにしても性質が悪すぎるその惨状を見ても「アレは腸か？」そういうや最近ホルモン焼きとかやってねえな」とか呟いている男の存在が更にその光景を異様で淒惨なものに変えていた。

しかし、その紅く染まつた朱の世界の中でもぞもぞと動く何かがいた。

ふんふん　と鼻歌交じりにそこへ近づく。

「あれ？　まだ生きてんの？　お前？　ある意味不幸だなあ

ゲボッ、と赤黒い汚い血を口から吐瀉物のように吐き出しながら倒れ伏している男の目の前に立つ。その男の状態は見るも無残なもの

のだった。

上半身と下半身は右のわき腹の辺りがかるうじて繋がった状態だが、左側は対照的にほとんど吹き飛んでいる。それどころか背骨を露出させてしまっている。内臓も幾つか足りない。恐らく限りなく爆心地の近くにいたのだろう。

左腕はどこかへ吹き飛び、足も内側へ捻じれている。顔も最早原型は留めていない。爆発の熱で傷口が焼かれて出血がケガの割に少ないこと、そしてそれ程のケガを負つて即死せず、意識も残つていたことは彼にとつては耐えがたい苦痛の時間を引き延ばすだけだつた。

「うあ、あああぎ、ぢ、くじよオ

気管と肺を灼熱の温度と化した爆風に焼かれて息をするだけで痛いが、本能は少しでも死から逃れようとヒュー・ヒューと異様な音を立てながら胸を上下させる、がその僅かな動きでさえ苦痛を生み、その苦痛が意識を失うことを阻むという悪循環が生じていた。

「ハイよつと

そんな激痛に耐えている男の事情など知つたこと無いと言わんばかりに、ノアはその男の首に手をやり片手でぶら下げてその眼を合させる。

新たに生みだされた激痛に必死に耐える男に「口リ、と微笑みかけるその笑みはどこまでも恐ろしく残酷なものだ、と男は恐怖する。何故ここにいる? とか、今一体何が起こった? とか。そういう疑問全てを忘れさせてその感情はその男の全てを支配した。

只々恐ろしい、と。

「よつ? 襲撃者? お前さんはまだ生きてるみたいだからな。最大限度に有効活用してやるよ」

まだ、何かするつもりか。この目の前の惨状を鼻歌交じりで歩く恐ろしい吸血鬼はまだ何かするつもりらしい。

まずい。「イツは俺たち後方の部隊を初めに潰したのだろう。まだ辛うじてリンクしている武装兵と前線の執行者との無意識の繋がりがそれを証明している。だが、だからこそまずい。後ろから戦線

を管理している俺たちがいきなり壊滅したとなれば間違いなく混乱する。このままではそのガラ空きの背中を突かれてしまう。先程の吸血鬼が再び現れたことなど知らずにいる前線のやつらまで最悪全滅してしまつ。

そして自身の能力の下、無意識下で繋がる前線の味方から矢継ぎ早に情報が入つてくる。

『　　！　突然正体不明の敵勢力が現れた！！　他の部隊にも気を付けるように警告してくれえッ！！！！！』

『クソツッ！！　いきなり敵が現れて五人やられた！　今やつと倒しあが…？！　クツソおおおおお…！！　また現れやがった！　畜生…！』

『ちょ…？　いきなり新手が現れたんだけど…？　どうなつてんの…？』

次々と降りかかる凶報が頭の中を駆け巡る。ますい、混乱が拡がつてゐる。突如として現れた新手に前線が混乱してい。

自分から視線を外し、目の前の吸血鬼は薄らと笑みを浮かべながら眼下の狂騒の戦場を覗下している。完全にこの“戦争”はこいつの思い通りの展開になつてゐる。

ちくしょう、ちくしょう。ふざけんな。

情報も持ち帰れず、味方を危機に晒す。

己の矜持に泥を塗りたくられるような屈辱、一瞬激痛を忘れる程にふつふつと燃えあがる憤怒と憎悪の執念が男を突き動かす。

「のまま」いつの思い通りになつてたまるものか、と悪魔を狩る執行者としての最後の意地を出して残る味方に最後の指示を出そうと能力を繋げようとしたその時

やあ～と、使つたかあ。 どうも、あ・り・が・と・

「う

蒼く光る双眼をこちらに突如として向ける。 そして眼があつた瞬間。 彼は焼け爛れた声帯を震わせ絶叫した。

「ガアアアアアアアアアアアああああああああああああああああ？！－！－！」

無理やり男の持つ思考を乗っ取つていいく。オセロの盤上の白を一手で全て黒に変えていくように、カタカタカタと男の精神の中核から強引に支配していく。ズタズタに精神を引き裂くような苦痛が彼を襲うが、目の前の吸血鬼はその蒼眼を向けている。その暴虐な侵略は瞬きをするよりも更に短い間に行われていた。

白目を剥き、爛れた声の悲鳴を張り上げる彼を無視して完全に能力を“乗つ取る”

あちこちで沸き起る噴叫をにべもなく切り捨て目の前に  
対処せよ、とだけ返す。そうして彼等は音も無く忍び寄る剣鬼に氣  
づかずバタバタと斬り捨てられていく。次々と喪失していく意識の  
繋がりの断末魔と絶叫は完全に男の心を折つた。

そうして男の矜持と信念を利用しつくした吸血鬼は最後の仕上げに  
向けて

「 無駄な努力、御苦労さま」

その男の全ての情報と魔力をその身の糧にした。

## 第十話（後書き）

感想が「Jゼロ」まいたらお願ひします。

## 第十一話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。もう少しでいの時代の話も終わりを迎えそうです

「ハアハアハア……畜生ーー！」

脇目も振らず逃げ惑う彼は最近執行者直属の武装兵の任に就いたばかりの年若い男だつた。

悪魔と直接戦闘をする機会の多い執行者の元の兵士といつもの組織の中でもエリートであり精銳であるとして誉れ高いと持て囃される存在である。

彼もその例にもれず、憎き悪魔をこの手で殺すことを夢見て入隊した。日々繰り返される地獄の訓練、これまでこなした任務の数の分だけ彼の確固とした自信となつていた。

しかし

(まじでありますねえーー！　一体何なんだーー！　何が起きてるーー？)

真祖に逃走を許したということで近辺の裏の痕跡を隠ぺいする作業をしていた時に突如として現れた襲撃者。いや、あれは人間なのか？

一切の生者の気配を感じさせずに現れたソレは部隊を文字通りの物量で押し潰した。

何とか殺したと思っても靈のように消えたかと思えば新手が現れるといった具合で切りが無く、次第に仲間が一人、また一人と次々に討たれていく。

終いには周囲を包囲され各自が血路を開いて逃げ出す始末だ。

身体強化で強化された聴覚には次々と途切れることなく見知った仲間の断末魔が聞こえてくる。もはや組織としての機能は完全に喪失していた。

「はあ！　はあ！　死んで、たまるかあッ！－」

そうしてなりふり構わずに路地裏から表通りへ抜けようとする。魔法の隠遁といつ点から考えると非常にまずいことだが、今の彼は死への恐怖に完全に囚われていた。

「もうすこ、しい？」

やつとのことで表通りへ通じる道へと出た瞬間、喉元に熱いモノが込みあがつてくる。何が起きたか分からず目線を横にずらす。そこには横の石壁から刀身だけが飛び出た剣が見えた。そしてそれが自分の心臓の部分を正確に貫いてることをゆっくりと理解し、血を周囲にまき散らしながら完全に琴切れた。

そうしてその壁の向こう側にいた剣姫は自分の愛刀を引き抜き、血を振り払つてから念話を飛ばす。それはたつた一言で良かつた。

「あとは

『北西に四人。まとめて居る』

「了解」

乗つ取つたリンクを辿り生き残りの場所が伝えられ、彼女は一足で近くの高台の屋根の上に飛び上がる。そしてジッと伝えられた方角を凝視する。

「……見つけた」

その眩きと共に気を集中させて、そこに目がけて文字通り“飛んだ”。

独特な風切り音をその身に浴びながら一直線に。

必死に連携を取りながら、ノアの影を警戒しながら安全圏に逃げようとする彼等の間に音も無く降り立つ。

最後尾で後ろを警戒する男の首を撥ねる。その男の前にいた者は、降り立つた瞬間に投擲したナイフが喉元に突き刺さり、空回りするような濁った水音を立てながら瞳から静かに光を失った。

そして後ろで起きた異変に気付いた一人がこちらに向いた瞬間に、先程の首を撥ねる動作と同時に投擲された二つのナイフが眉間に迫る。反射的にソレを弾いたその時には既に頭上に移動しており、片方の頭を捻じり折つた。ペキヤツと音を立て崩れ落ちる骸を無視して最後の一人に横薙ぎの一閃を放つ。

先程弾いてしまったせいでその手に握る剣による防御は間に合わない。そう判断した男は咄嗟に鞘で受け止めようとする。だが無情にもその存在を無視するかのように、鞘びきろか魔力強化されていった鎧ごとあっけなく斜めに分断した。

驚愕に目を剥きながら絶命した男の上半分が地面に落下する様を氣にもせず、血を払い鞘に納める。その後に背後で砂袋が落ちるような音がした。全てが刹那の出来事。文字通りの“一瞬”だった。

喧騒が、止んだ。

た。

それは悪魔を狩る尖兵が、全て息絶えたことを示している

「ツバイ！　ツバイ！　返事しろ……クソオツ！……！」

苛立たしげな声をあげる。もう何が起きているのかは分からなく  
ても自分が置かれている状況は理解した。何だ、逆戻りしただけか。

ここは再び“死地”になつた。それだけの話。

そして私は先刻から幾度となく交わした応酬を繰り返した。響  
く残響と衝撃に顔を歪めながら眼前の悪魔を睨みつける。

「やべ、田の前の俺に集中しろ」

静かに相対する悪魔は私に囁く。とても画面やアーティ。何か秘密をこつそりと教えるように。

「私は我が創り手に似て意地が悪くてな……少しでもつまらなくなるとあつせい壞したくなるのだよ。脆くて弱き肉体のお前らを」

囁いた言葉に実なんでものがあるわけがない。文字通りこいつ等は悪魔なのだから吐き出される言葉は私たちを惑わせるために存在する。

「故にだな？ まあ、“せいぜい”がんばれ」

飽きられないよつにな？ そつぱざく糞つたれに蹴りをブチ込む。鍛え上げられた体躯が小石みたいに吹っ飛ぶ。それに追いすがるようにして駆け

「見えてんだよオー！ 愚図がーー！」

すに背後から放たれる魔弾を回避し、合わせるようにしてこちらも魔法を放つ。それがカウンターとなつてその悪魔の足を一本吹き飛ばした。痛みに顔を歪める悪魔の顔に膝をブチ込んでさらに歪めてやつた。

「死ねえい！」

そうして私が吹き飛ばした悪魔にヴァートの腕が飛来して脳天に突き刺さる。しかし、それでも容赦なく放つ雷の斧によつてその身を粉々にした。還る暇もなくその身を消滅させる。

「……チツ」

更に先程吹き飛ばした悪魔の影をヴァートの影の魔法『影縫い』が一瞬で打ちつけ封じていた。

「これで」

右手に全ての氣を集中させて、その悪魔に向けて疾走する。

悪魔がニヤリと笑つた。動けない癖に ! ! と思思考をそこで止めて右に形振り構わず身体を寄せる。カツ と辺りが一瞬の閃光が発生した瞬間、激痛が奔つた。時間差で襲いかかる衝撃波によつて弾き飛ばされそうになる。だが、私はギリギリと歯ぎしりしながら沸き起つる怒りでそれを堪える。

悪魔!<sup>ハイツ</sup> 動けない癖に口からバカみたいな密度の魔力の塊を飛ばしゃがつた!!

その塊は私の左腕の肩から先を跡形も無く吹き飛ばし、それでもそのまま直進して、術の制約で動けないヴァートの胸から上を消し飛ばした。ぐらつ、と崩れ落ちたその身を見ながらソイツは口端を釣り上げ囁う。

だらけのもの

「そう悪魔の口が動いた。だが、それは！　お前もだよオーーーー！」  
悪魔があああああーーーー！

左から溢れだす血しぶきを氣にもせずに拳を振り上げて、その悪魔の顔面にブチ込んだ。術の効果が切れるか否かのギリギリながらもその一撃は叩きつけられた。固い殻を纏つた果実の身のように中身がはじけ飛ぶ。間抜けな断末魔を残してソイツは絶命した。

びさつとその身を近くの壁に投りかける。よつやく、終わった。

「はあ……はあ……ッ！」

ゆつくりと腕を再生していく。痛い。極限状態に長時間おされた精神の疲弊が能力の発動を阻害する。常に“自身の最高の状態”を投影し続けることで実現する奇跡。手足が千切れようと、何が起ころうとも自身が死と敗北に心が折られない限りは戦えるというキチガイな能力だ。だが、この能力は一切に動じない心が前提としてある。<sup>イメージ</sup>想念がぶれればまずこの神具はその奇跡を起こさないのだ。その位元々の扱いが難しい代物なのである。そう、歴代の使い手達も他者の姿という具体的なものに変装する位にしか使えなかつたものなのだ。

……そして今回の自身の“最高の状態”などという抽象的なものはとてもではないが明確に投影することは不可能に近い。しかし、アイリはその壁を越えた。自らの壁としてあつた障害を超えるそのときには、これまであつた能力の上限までも飛び越えたのだ。

だが、その代償は大きい。

「く……ふつ……」

能力をゆっくりと解除する度に全身に妙な違和感が残る。まるで自身の身体ではないような感覚がその身を包む。腕が足が千切れ、全身が魔法で焼かれる度にその事実を否定して投影してきた。その結果彼女の身体は今現実と虚像の境の拒絶反応が起きてしまっている。

痛む身体とギシギシと軋みをあげる精神。その境目がまるでささくれだつた皮を剥がすようにみちりと音が立つ。そんな想像が書き立てられるほどにきわどい状態であった。

何とか収めて息を落ち着かせる。額に滲んだ汗を拭つて、さあ立とつと思つた瞬間だった。

「 ドスッ」という背中に感じた衝撃は激痛に変わる。一瞬の意識の空白を経て、口の端から紅い鮮血を垂れ流しながらも何とかゆっくり視線を下に移した。

私の胸から飛び出た手が、その手の内にビクビク痙攣する肉塊を掴んでいた。

私がソレが何か認識する前に首筋にだれかの顔が寄せられる。そしてその何者かは私を背後から抱きすくめるようにしてポツリと、囁いた。

「 ただいま」

そして気付く。その声。視線を更に下げると気付く。ソイツの上半身だけが私の壁の影から飛び出すよつこにしてくる」と云う。

やられた。

何時の間に影に“道”<sup>トレイル</sup>を。いや、そつか。

「…ああ、悪魔を召還した時だよ」

なんて、化け物。ビニの世界に全く系統の違う魔法を同時に行使する存在がいるといふのか。“門”<sup>ゲート</sup>“召還術”<sup>マーキング</sup>“締結”どれも高等魔法だ。私の思考を読むようにして答える背後の存在に戦慄を感じた。私は、最初から最後までハイツの掌の上で

「なあ、気分は？」

最低なやつめ。様々な意味を持っているであらうその質問に私は一ヤリと嗤いながら答えた。

「ええ、そうね。

案外何とも思わないものね

負けたことも、あっさりだまされたことも、これから自分が死ぬということも、案外なんとも思わないものだ。むしろ精一杯生きたという想いだけしかない。これまで生きてきた中の幸福も不幸も全てが私のものだ、と胸を張って死ねる。何という、満足感。それにこんな最期はいつかは遂げるものだと覚悟していた。それに考えていたよりもずっとましな最期なのかもしない。

その答えを聞いて、後ろのコイツは面白そつにクスクス笑つてこういった。

「 良い旅を。アイリ。お前のような面白い人間のことを俺は忘れない」

「……ええ、私もあなたみたいな性格の悪い吸血鬼のことは忘れないわ。まあ死後は会わなそただけど、ね」

激しい睡魔に抗いながら、私は最期の言葉を目の前の敵に送ることにしよう。

『おやすみなさい』

静かにその眼を閉じて、安らかな休息を迎えた。これまで、ただ前を向いて走ったその生に安らぎを。

「うじて牙は、長い夜は終わりを迎へよつとしていた。

## 第一幕最終話（前編）

ようやく満足度がリストになつた……お待たせしました。

## 第一幕最終話

ようやく辿りついた。もう、終わってしまったようだが。だが、まだだ。まだなのだよ。なあ吸血鬼？

それは突然だった。

カラカラカラカラ……

ゆつくじとアリの遺体を地に横たえて胸の上に手をおいた俺が聞いたのは、その妙な音。何かの金属を擦るような波長の高い音だ。ゆつくじと背後を振り返った。そして、そこにいた男を睨みつける。

そいつは真っ白だった。白いローブに、真っ白なフードと左手には鋭いナイフ、右手には金属の棒を引きずりながら歩いていた。

ただその眼は気に入らない。気に食わない。一切の感情を排した瞳に映るものはなく、【虚】そのものだった。

「で？ お前は何だ？」

そこで口の端を男は引き裂くように左右に広げた。ぱっくりと引き裂けた笑みを見て そこで俺は理解した。成程、こいつも外れた人間か。異端を狩るために異端となつた狂人。脆弱な人間の癖に化け物を駆逐する側に立つ存在。

そう理解する。「己自身も似たような笑みを浮かべてることには気付かない。

「神の代理人。神罰の代行者。『不死殺し』。呼び方は様々だが、やることは変わらない。

……吸血鬼。主の齎したお言葉に従えば、いずれこの世界を崩壊させる者よ。生と死の理を冒涜するものよ。神に逆らうものよ。その身の全てを滅ぼしに来た。絶滅しろ、絶望しろ。そして救われる。許されざる罪を背負つて A me n」

突然現れた執行者との鬭争の夜は今ようやく決着を迎える。現行の執行人最強の『不死殺し』と最凶最悪の吸血鬼『語られぬ撲滅』との間に生まれた唾棄すべき獣の如き殺し合いを持つて。

「戦」い「争」う。 誰にも語られない、殺し合い。

遅れて辿りついた朔夜は目の前の光景を眺めることしか許されなかつた。何せ自らの使える主に命じられたからだ。壮絶な、それでいて無邪気な笑みを向けられながら。

（まだ早い、手を出すな、か……）

嵐だ。そこにあるのは正に鬪争の嵐だつた。

ノアの生み出した影を執行者は金属の棒を一振りしただけでかき消した。その数が一から、十へ。十から百へと増えても関係ない。ただの一振りでかき消された。まるで砂城を倒すように呆気ない。全く持つて理解できない。

だが、ノアは嗤つている。そんな不得体の知れない攻撃に晒されて、ゲラゲラとたのしそうに腹を抱えて嗤つっていた。そして普段は押さえついている制限を外し始めていた。

「あひやははははは！… 何だ何だあ！… その妙な力は！…？ 意味不明すぎて俺の腹筋が滅茶苦茶だよ！… 何だそりゃ！… あはははははは！…」

「さつさと滅せられよ。化け物が。貴様は塵も残さず、殺してやる

そして刃と刃が火花を散らしながらぶつかつた。またもノアの影

の剣が消える。だが予想していたのか、ソレを全く気にせずにノアは指を鋭く突きだす。目を抉り取るうとした。

だが執行者は首を僅かに傾けるだけで避ける。

そして両者ともにほぼ同時に全身から氣を放出させた。莫大過ぎる“氣”はとても同じ次元を生きるものだとは思えない。頬を引き攣らせるしかなかつた。

瞬動と同時に斬りつける。甲高い音があちこちで発生する。執行者の顔が驚愕に歪んだ。

普通は始点と終点がはつきりと分かるという欠点を持つ筈の瞬動。だが、ノアの瞬動はそんなもの関係無いとばかりに自在に方向を変える。

それは無限の軌道と始点を持つ移動術。

人間を超越した吸血鬼だから。そんなものではない。そんな単純な“差”ではない。

“真祖とは破滅の抑止を担う存在”

かつて彼が私に語った言葉だ。そしてそういう意味での真の“真祖”という存在は自分なのだと言っていた。全てを超越し、全ての摂理の頂点を担わされた存在なのだ、と。

かつての神秘の時代の勝者を決めるべく行われた生存競争をその中でも矮小の身で勝ち残ったその身は、比べるのもおこがましいものだつた。弱い弱い人の身体とは次元が、規格が、格が違つた。

最早捉えることすら叶わない。私の“眼”ですら捉えられない。

もう身体が摩擦で発火してもおかしく無い位の速度に達している。

触ることも叶わないながらも、執行者は懸命に防ぐ。

数多にローブが斬り裂かれ、深紅に染まろうともその眼に絶望は

浮かばない。相変わらずの虚しかない。

身体をバラバラにしそうな空氣の壁の生む衝撃波に木の葉のよう  
に飛ばされながらも決して倒れない。直ぐに立ち向かう。越えよう  
も無い差を超えるために。

互いに冷笑を浮かべて言葉は交わされる。

「化け物を殺せるのは人間だけだ！！ それは認めてやる！ だが  
よお？ お前は俺を殺せるのか？ ええ？ 確固たる意志を持つて  
！ この俺の！！ 息の根を止められるのかあ？！ 弱い弱い人間  
がよお！！！ 全てを殺せる俺をお前たちが殺せるのか！！ ああ  
”あん？”

「違う。殺すには殺す。だが、私が殺すのではない。神の名の下、  
その御手を煩わせないための『剣』。それが私だ。

私は私のために殺すのではなく、ただ罪深き者を滅すための存在  
たる私に個は存在しない。人間かどうかではない。重要なのは出来  
るか否かではない やるかやらないか、だ。貴様が何である  
うとソレは変わらない

「神やらなんたらと支えが無ければあっさりと折れる人種が、確固  
たる自己を確立して善悪全てを飲み込む存在に勝てると思って  
いるのか？ “神”？ そんなものは俺のバベルの塔でもしゃぶつ

てゐ。

血ひの足で立つことも出来ぬ脆弱な生き物めッ！！

！」

「主の御座す天に睡する存在よ。頂点を氣取るその行為許し難し。  
他者を食い物にすることでしか生きられぬ傲慢で高慢な生き物めッ！！！」

片や、理解不能な力行使する存在。片や、人智の及ばぬ次元の力行使する存在。

はつきり言おう。ここは完全な戦場だ。“個”と“個”的戦闘の規模ではない。もはや戦争……まだ未熟な“個”が立ち入ることなど最初から不可能。

(手を出したくても、出せない)

己の未熟を噛み締める。まだ、『家族』の隣に自らは立てない。支えたい存在を、自分を救ってくれた彼の力になれない。そう思い知つた。

固く握りしめた手は赤く滴る。目指すべき頂の高さを思い知り、自らの中に存在した僅かな傲慢を恥じた。

だが、

(「いつか私もあそこ……立つッ！…」)

その剣姫の瞳には熱く苛烈な烈火が宿っていた。

だんだんと全貌が把握してきた。そうノアは結論づける。  
先程軽く掠つた攻撃の痕を見る。軽く切られただけだ。血が一筋  
流れる程度の傷。

だが、それが自身にとつてどれだけ異常なことか。それを彼は理  
解していた。

(“再生できない”。いや……違う。俺の再生はいわば魔力で完  
全に死生の理を屈折させて元の状態に戻すというもの。いわば真祖  
としての“概念”といつていい。例えどんな状態であろうが、どん  
な攻撃であろうが関係無い。それが俺の属性であるのだから。対価  
の魔力のある限り、この身に刻まれた“概念”は機能し続ける)

別に細胞にプラナリアのような再生因子が組み込まれているわけ

ではないのだ。この身に刻まれた概念。俺が真祖の吸血鬼である以上この概念が存在するのは不变であり自明なのだから。事実ただの魔法で負った傷はどれも俺の不死を脅かす脅威にすらならなかつた。

といふことは、だ。その概念を無視して「えられた確かな一撃。それから導かれる解。

（ 奴もまた、何らかの概念利用した“武装”をしていふといふこと。そしてこいつは俺のような存在を殺せるといふことだ）

そして四方八方から遅延魔法を解放した魔法のフルコースを叩きつける。色取り取りの魔法の射手。そして殲滅するよつて上空から叩きつける。

「  
マレウス・アクイローニス  
氷神の戦槌」

しかし、執行者は軽くステップを踏むようにそれらを回避し、左手のナイフで氷の塊を碎いた。

（あつさり捌きやがつて。だが、先程は杖。今度はナイフ。……何故先程のように書き消さないのだ？）

始めの牽制で仕掛けた影を、たかが一振りで一掃した杖の一撃を使わず、何故態々無駄な動作と隙を生むだけの行動をとったのだ？……ならば確かめてみよう。同じ手を使うのは気が食わんが。

「また影か……芸の無い。無駄だと先に分かつては筈だが？」

「ほぞけ」

また四方八方から影の刺客を襲わせる。そして奴が面倒だと言いたげに顔をゆがめた。

そして杖を振りかぶる。その瞬間に“解析”した。

「…………つ！！！」

「ほう、避けたか」

目の前まで迫っていた不可視の刃をギリギリで回避する。魔力も氣もほんの僅かに隠ぺいされていた。危うく上半身と下半身が泣き別れる所だった。事実、俺の左腕は半ばからぱっくり裂けている。本当に久しぶりだ。止血なんてものしたのは、プランプランとしている腕に布を巻きつける。

だが、理解した。なるほど、『コイツはヤバい。

だから騒ぐ。笑う。なるほど、コイツは面白い。

「は、ははは……」

「？」

「ふ、ふははははは！－ アハハハハハツ！－－－！」

成程成程成程。

「その杖。概念武装した“ハルパー”かあ。あははははは！－  
確かにそりや『殺せる』。確かに俺は殺せるわなア。『不死殺し』。  
まんまじやねえかっ！ あはははつ！－」

「つ！？ もう、見切ったのか……」

そう奴が持っていたのは杖ではなかつた。剣であり鎌であるような形状を持つ武器。その刻まれた概念は俺の再生に組み込まれた、  
というより“不死”を冠する能力の大元となつた概念 “屈折  
延命”をその神聖によつて無効化する。

かつての神秘の時代にペルセウスがヘルメスより『えられメドウ

ーサの首を断つたとされる、その概念が、物語が、杖に装飾のように刻まれている。これによりこの《剣》の前では自然の理を無視した現象は全て断ち切られてしまつ。

「これは魔法という自然法則を歪める“歪曲”の理も無効化するということである。特にこれを主な属性としている闇や影といつたものは完全に無効化される。それ以外の魔法なども行使を阻害されその威力は大きく減衰するだろう。」

「そしてコイツの恐ろしいのはそこだけではない。コイツ自身が自らの身体に直接ある概念を刻んでいることだ。」

「しかも！『剣』の概念武装を直接身体に刻むとか！！！あはははー！いいね良いねえ！！！最っ高にクレイジーだーー！」

「……」

「確かに口を『剣』と化せばその武装の力を完璧に行使できる。それだけじゃねえ。馴染めば馴染むほど、その力は強くなつていいくだろ？最終的に魔法無効化能力者もどきになれるかもしけねえ。それだけじゃねえ。その『不死殺し』の能力を素手で行使できるようになるかもな」

だが、そこで瞳いを浮かべる。

「だが、払う代償はでかい。てめえ、もう恐らく十年も生きられねえぞ！ それだけじゃねえ、四肢も段々感覚が麻痺してきてんじゃねえか？ 馴染めば馴染む程にな？ 最期は廃人確定してんぜ？ あはははは！！ というかまず何で只の人間がソレを刻んで生きてるんだ？ 文字通り自らの魂を無理やり削つて型に嵌める行為だ。普通は死ぬぜ……一番最初の時点で、な」

一頻り嘲笑うと、スッと真剣な顔になる。

「愚かだな。お前が何を思つてソレを刻んだかは知らん。だが、その人の身を外れた力を一身に宿して、その結末を予見できなかつたとは言わせない。何がお前にそこまで力を求めさせた？」

「……滅私」

何をバカなことを、と言いたげに男は口を開いた。心なしか胸を張つていいようつでもある。

「？」

「私の前人生は碌なものではなかつた。主の教えに出会わなければ私は畜生にも劣る存在としてそこらで果てていただろう。だから

だ、感謝。ひたすら感謝した。主の教えに出会えたことに。

例え私の父親代わりであつた神父様が強盗に殺されても、例え妻が悪魔に翻り殺しにされても、例え娘を眼前で事故で失おうとも！「

つらつらと語られる。それまで虚しか移さなかつた瞳に仄かに暗い感情の光が宿る。それは“狂信”だつた。

「誰かを失う度に理解した。何かを捨てる度に理解した。救いとは！　“犠牲”なのだとツツ！！！　救済とは“死”の後に主により齎されるものなのだと！　人は哀れな生き物だ。誰かに主張を押しつけなければ、欲望を満たさなければ生きていくことは出来ない。そして何かを得るために、何かを捨てなければならない。私が失つた分、必ず誰かが救われ満たされるだろう」

そして締めくくる。

「そして私は、自らに救いを得るために私を捨てた。それだけだ。私のこの身が果てるまで、私は私の信じる神の剣となる。そう自らを定めた。貴様らのような主に仇なす存在、主の造りたもうた“人”を害する不浄の化け物を滅するために存在する剣だ。信じる者は、救われる。それを体現するためだけの存在に……」

沈黙が間に流れる。この鬪争の場には相応しく無い、沈黙。こい

つは正しく生きながら狂っている。そしてそれを俺は鼻で笑うこと  
で崩した。

「……ああ、悲劇。最高に幸せな悲劇ってヤツかあ？ 歪んでる歪  
んでる。だが、実に正鵠を得ていい。ある意味、一番間近で裏に葬  
られてきた真実を見つめてきた“俺”には分かるぞ。

幾ら綺麗事を言つても、幾ら理想を語つても、幾ら最善を尽くそ  
うとも。誰も彼もは救えない。現実は優しくないからな。

誰も傷つかない世界？ 戯言だ。平等な世界？ 戯言だ。どれも  
己の弱さ、醜さを覆い隠す戯言に過ぎない。誰も彼もが幸せな幸福  
ビーハンド E N D なんて空想の中にしかない。救いの本質は“犠牲”それは否  
定しない

だからこそ鼻で笑った。

「 もっとも、一番大事なことは忘れてるけどな？ なあ  
？ 軟弱者」

「……何？」

「結局は向き合つべき時に向き合わずに逃げ出したんだよ。てめえ  
は。お前は少なくともその払つた“犠牲”から何かを託された筈な  
んだよ。絶望から立ちあがつた後にテメエがやるべきことは何だつ  
たのか。……教えの禁忌を破り、自殺すべきだったか？ 墮落し、

欲に塗れるべきだったか？ それとも身を削つて、血で血を洗う殺し合いに興ずるべきだったか？」

そこで吸血鬼の魔眼は蒼く光る。悠久の時と悲劇を見つめ、全てを見透かす光を宿して。

「てめえは、全てを受け止めきれなかつただけだ。近くにあつた耳触りの良い矜持にそのまま縋つた。耐えきれなかつたからな。これ以上傷つきたくないから己を捨てたんだ。救い？ 違うね。ただ楽になりたかったんだ。先に語つた崇高な目的など口先だけの逃避だ」

「……え」

切開切開切開切開切開切開切開切開切開切開切開切開切  
開切開切開切開切開切開

歪んだ笑みを浮かべて根底を切り聞く。抉り出す。

「想い重い思い。何かしら託されたんだろうが、お前では耐えきれなかつた。お前は託されたことを果たす中で生きるべきだった。また、誰かに愛されるべきだったんだ。だが、逃げてしまつたお前はその重荷を放り捨てちまつたからな。もう、戻れないんだ

よ。誰も愛せないし、誰からも愛されない。お前は何も考へない“剣”になつちまつたんだからな」「

「…………ま、れ…………」

そうして思い出す。この数年を。俺に向けられる、徐々に感情を取り戻してゆく暖かい笑みを想い浮かべる少女を。自分は大分甘くなってしまった。だが、誰かに俺はこの数年確かに他者から愛されたのだ。そして思い出した。取り戻したのだ。

これまで唯一人で恨まれ憎まれ、……殺され。“結果”世界はうまく回る。実際に合理的な構造だった。何せ“犠牲者”は一人だけだ。だが、これまで落としてしまったものを俺は思い出した。これは、絶対にいらないものなんかじゃない。それを俺はほんの少しだけ思い出せたのだ。それを自覚した時　　俺は確かに“救われた”のだ。

「己を捨てたテメエは  
まつたんだよ。間抜け」  
捨てちゃ いけねえもんまで、捨てち

疾走する、間抜けなどこまでも人間らしい愚者。いや、耐えきれなかつた優しい軟弱者。

俺は気付いた。いつの間にか落としちまつてた大事なものを。取り戻せるかどうかはわかんねえが…… 何を信じ、何を失い、何を望んで、何を得て、……何を、護るのか？ それを決めるのは、俺だ。糞つたれの上位の神なんてもんじやねえ。

もう踊らされているだけの人形は飽きた。まあ、今更この穢れきつた悪党の悪行も魂も手おくれのレベルなかもしれねえ。だから、俺は俺の答えを出した。

「俺の答えは。平等に全てを愛して、分け隔てなく殺してやるよ。立ちふさがる全てを愛し、殺す。そんな化け物じみた“人間”になつてやる。どこまでも血に塗れた救いをもたらしてやあ。俺自身と一人のためにな」

蒼い光が輝いた時、男はペタリと膝を立てて座りこむ。そして暫し自失した人間は自らの首を断つた。すんなりと、禁忌を犯した。

確かに安らぎに満ちた穏やかな笑みを浮かべながら。彼

はどこまでも救いのない“救い”を得たのだった。

## 第一幕最終話（後書き）

ネギまらしくない。だけど、そんな救いの無い“殺し合い”が書きたかった。あと、文章が少しでも読みやすくなっているなら良いですね。

・ノア

よつやくこの作品のテーマに触れられた。何か大事なものを落とした悪党が少しづつ不要としたものを取り戻していく。今回彼は大きな目標を立てました。

・朔夜

彼女は自らの大事な人を決して一人にしたくない。だけど、まだ隣に立っていない事実に憤慨する。“甘え”を自覚します。少なくとも彼が自然に笑えるように、背中によりかかる存在を目指します。

・アイリ

人間という存在の、どこまでも誇り高い“弱さ”を肯定できる人間。そして自分の信じるものを見抜いた。

・ヴァーデレッジ

どこまでも優しく、どこまでも強かつたがために、誰よりも弱くなってしまった人間。最期は救いを垣間見て自害する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9089n/>

---

～匣庭物語～

2011年9月15日06時01分発行